悲しみの彼方への旅

－わが内なる病んだ心から健康な心への道－

島野 隆

無償配布許可書籍

無償配布許可書籍

この電子書籍は、**内容に一切の変更を加えない**形において、および**無償を原則**として、自由に複製し配布することを許可致します。
内容の**著作権**は**島野隆**が所持します。
内容を改変しての、また有償による配布を禁じます。

出版本ガイド

この書籍は、最初に

『悲しみの彼方への旅
ーわが内なる人格障害から健康な心への道ー』

として**出版**されたもので、在庫本を**島野隆のサイト**
および**アマゾン**等で購入が可能です^^。

□言葉の変更部分です

印刷ガイド

この電子書籍は、**「四六版」サイズ縦書き**で作成されており、**Acrobat Reader**の印刷で

ーページの拡大/縮小・・・１枚に複数ページを印刷
ー１枚あたりのページ数・・・２
ーページの順序・・・横（右から左）

を指定して印刷して頂くと、出版本と同じように読みやすいかと思います^^。

現代社会が抱える病弊に
解決への示唆と勇気を与える
異色の自伝小説!!

人格の障害とは?
そして、そこからの「治癒」と「心の成長」とは?

自ら心理障害を体験し、
同時にその研究者として歩んだ
心理学修士の前半生——

私の中で、生きる心が消えていました。
人生が終わった。心はむしろ静かでした。
・・・・・・・・・
僕は今ようやく人生というものが分かった気がする。
やっと今になって!
残された人生を最大限に生きたい。本当にそう思う。(本文より)

読者からの声:「しまのさん」はまさに自分だ…。こんなに強烈な感情移入をした読書体験は初めてです。まるで自分のことを自分が語っているかのようで、読むことがひとつの治癒体験でもありえると感じました。

悲しみの彼方への旅

－わが内なる病んだ心から健康な心への道－

島野 隆

悲しみの彼方への旅

―わが内なる病んだ心から
健康な心への道―

島野　隆

悲しみの彼方への旅

―わが内なる病んだ心から健康な心への道―

夏の日が落ちて
しばらくすると、

あたりが薄暗く、青白くなって、
人や建物といった全てが周りの空気にとけ込んでいくような時間がやってくる。

僕はその中を、何かのもの悲しさに浸りながら、
暗くなるまでどこへというあてもなく街の中を歩くのが好きだった。

好きだったというよりも、そうしないではいられなかったんだ。

自分の中に何か失われたものがあって、
ただ悲しみの気分だけがその失われたものの片鱗のように思え、
その中にいたかった。

その悲しみは青白い夕暮れの空気の中を通って、
失われた何かに、どこかで繋がっているような気がした。
それに引かれて、
僕は青白い空気にとけ込む街の中を悲しみの気分と一緒に歩き、
やがて暗くなるともうそれはいなくなってしまい、
僕は諦めて現実の中へ、家へと戻っていった。

16歳。
僕の心の旅はここから始まった。

これは、自分の心の奥深くに迷い込んだ僕が、
今のこの明るい世界に戻ってくるまでの、とても長い物語なんだ。

悲しみの彼方への旅―わが内なる病んだ心から健康な心への道―

目　次

1章　プロローグ　7
2章　少年年時代まで（出生～申学時代）　13
3章　心の旅へ（高校時代～大学２年）　27
4章　抑圧された感情の開放（大学３年）　45
5章　解かれたパズル（大学４年４月～５月）　63
6章　自己の本質への接近（大学４年６月）　79
7章　遠く置き去りにした過去へ（大学４年７月）　101

8章　蘇った自己　（大学4年7月末）　119
9章　心の罠の中へ　（大学4年8月）　143
10章　削進と後退　（大学4年9月上中旬）　163
11章　病んだ心の崩壊　（大学4年9月下旬）　191
12章　現実への帰還　（大学4年10月）　227
13章　自己の受け入れに向かって　（大学4年11月）　269
14章　新たな人生へ　（大学4年残り）　305
15章　見出された人生　（大学院～現在）　323
考察　―病んだ心から健康な心への道の本質　343

当小説における登場人物名は全て仮名です。

1章

プロローグ

「普通」というレールの外の心の世界

「うつ病」と並んで「人格障害」という言葉が社会で一般に知られるようになりました。

私はこの「人格障害」というものに、ちょっとした思い入れを持っています。

なぜならそれは、「病んだ心」という課題を私たちに示しているだけではなく、時に、私たち現代人が「普通」というレールで用意された人生を選ぶことによって失った、何か深い人間としての情動の世界を示していることがあるように感じることがあるからです。

それに比べると、よく聞く「うつ病との闘病と回復」はちょっと単調な印象を受けます。「普通」の世界でストレスがたまり、普通でいられることができなくなって、薬を飲んで休んで、また「普通」に復帰する、というような……。

言ってしまえば、この心の病という問題に対して、「うつ病」とはまだ「普通」というレールになんとか留まろうとしている心の世界であり、人格障害とは「普通」であることをもはや逸して、背を向けた心の世界のことであるように思われます。

「普通」というこの曖昧な基準を取り払った時、あるいは人間の心の全ての、本当の姿が見えてくるのかも知れません。

何も心の病についての論争などする気はさらさらありません。
何のことはない、私が私自身の心の中に見た世界は、人格障害の世界だったということです。

そして、自らそれに取り組むために大学院まで心理学を学び、その後の社会人生活の中で、大きな心の健康を得ることができた。その道のりを通して、人間の心というこの不思議で広大な世界をつぶさに見ることができた。
その感慨を感じています。
それだけです。

私は、この私自身の前半生を、小説として世に出したいと考えています。大量の巻数を必要とする長編になると思います。
これは、そのダイジェスト版のような感じになると思います。

プロローグ

膨大な日記を小説としてまとめる作業を始めていた私は、かいつまんでまず一冊の本にまとめたものを書きたいと思うようになっていました。

なかなかそれに着手できませんでしたが、一度それを書き始めた時がありました。

ある、深刻な人格障害傾向を持つ女性に対して、メールを主に使っての濃い援助作業をしている時でした。今これを書いている２００５年秋。１年前の7月下旬のことです。

その女性の心は危機に瀕していました。私の援助を通して、その女性は自らの心の闇に逃げることなく向き合うことを選び、ある日「心の大手術」とも言うべき出来事が起きたのです。私はこの出来事の中で、私自身の「傷ついた者への愛」という未知の感情に出会い、その分析の中で私自身の心理学理論が完成へと向かって大きく進化した、一つの奇跡のような体験でした。

その最中でした。私は、自分とも似た来歴や感性を持つこの女性に、自分の前半生の道のりを伝えることが何か役に立つかも知れない、と考えて、ダイジェストのようなものを少し書き始めたのです。冒頭を彼女に送りました。

その後の急展開もあり、続きは書かずじまいでしたが、私はそれを書き始めた時の自分自身を、とても感慨深く思い出します。それはまさに、私たちがこの現代社会の中で隠している心の奥の世界への、ひとつの旅だったからです。

自分がこれから書こうとしていることについて少し伝えたあと、私は不思議な気持ちに取られて、キーボードから一度手を離しました。

そしてマンション15階のリビングから、遠く続く家並みやビルの風景を見て、それから再びキーボードに向かってこんな文章を書き始めました。

……

僕にとっての、未知であり続けた存在……。それは、小学校5年から……そうだな……30年以上にわたって恋心を抱き続けていた女性でした。心が健康で、優しく美しい、輝いていた人でした。

……

僕は一体何を書いているのだろう……。

ふと手を休めて、マンション15階のリビングから眺める家並みの風景を見ながら考え、そしてまたキーボードに向かう。

毎日見ることのできる、この風景は癒しです。そこには色んな人が生きている……そう感じながら……。

そんな現実の中とは、切り離されたような心の世界。それはないものであるかのような顔をすることもできる。でもそれはやはりあるんですね。

僕の少年時代は、３つの世界に分断されていたように思えます。
それは全くつながりのない世界でした。
……

改めて、私の前半生の心の旅路を、かいつまんで書こうと思います。
これから同じように、自分自身を探す心の旅に歩みだそうとされている方のために・・。

2章

少年時代まで

（出生～中学時代）

少年時代まで

私の少年時代は、3つの世界に分断されていたように思えます。
それは全くつながりのない世界でした。

顔立ちと特別な頭の良さを誉められ、なにごともない平和な家庭の中で、何も問題はないように生きていた自分。僕だけが悪い子で、どうせ僕は駄目な子なんだ、と思って生きていた自分。そして小学校5年から6年にかけて、ある少女への初恋の中で生きていた自分。ただその子のそばに近づけることだけを願っていた。
思い出すと胸が熱くなります。

地方の中都市の一家族で、私は次男として生まれました。上に一つ違いの兄、下に妹の3人兄弟です。
容貌や才能には結構恵まれて生を受けることができたようです。取り上げた産婆さんから、「こんな頭の形のいい子はいない」と言われて生まれ、顔立ちの良さと、特別な頭の良さをよく誉められる幼少期を送りました。家もまあ普通の家庭。小学校では「算数はかせ」「理科はかせ」と呼ばれ、当時は今時ほど問題になるいじめもなく、近所の友だちともよく遊んでいる、なにごともない生活を送っていた

少年の私がいました。

一方、今でこそ平和で仲も良い私の家族ですが、私の小さな頃はちょっと歯車が狂っていたところもあったと思います。中間子ということで親の目も離れたところがあったのでしょう。乳飲み子の頃も放っておかれたことが多かったと、母から謝られるように聞いたことがあります。

「基本的信頼感」があまり育たなかったのだと思います。私の人生での最初の記憶は、3歳頃だったか、毎夜のように見る、決まった内容の悪夢です。空から何か大きな得体の知れないものが降りて来て、同時に足元の地面が消えていて、その中で自分は何かを怯えている…。そんな奇妙な悪夢でした。

やがて家族の中の歯車の狂いは、小さな私の心の中に増幅して吸収されていったようでした。親からのちょっとした厳しい躾（しつけ）などの中で、自分だけが悪い子で、どうせ自分は駄目なやつなんだ、という気持ちが育っていました。

そんな私にとって、顔立ちや頭の良さを誉められることは、何か安全を感じることのようではあるけれども、決して心を満たすものではありませんでした。むしろ大人のその言葉に、浅はかさと、軽い嫌悪感を抱いていたのを憶えています。

なにごともない平和な外面の一方で、孤独感を心の中に抱き続けた小さな少年の私がいました。

そんな私にとって、熱中することができたのは、家にあった子供向け科学図鑑などを隅から隅まで眺

めることや、あとは少年少女向けの文学集を読むことでした。

文学集の方は隅から隅までという感じではありませんでした。私が心を惹かれ、その世界にはまり込む、特有の傾向のものがあったのです。『ああ無情』『ロビン・フッドの冒険』そして『パール街の少年たち』…。

どれも、孤独な少年が、自分達の居場所となる新しい世界を探す歩みのような物語です。中でも、『ああ無情』のマリウスとコゼットの純粋で美しい愛と、それを見守るジャン・バルジャンの世界は、私が熱中し、心の中で、その中で生きようとした世界でした。

そうしたものに、憧れと、心の寂しさを埋めるものを求めていたと思います。小さな少年の私の夢の中には、しばしば、見知らぬ街で出会う見知らぬ美しい少女が現れていました。

初恋の2年間

そんな夢の世界と現実とが重なる時期が、小学校5年から6年にかけてありました。初恋の少女と同じ教室に通った2年間です。

その子は、ちょっと田舎びた雰囲気もある当時の子供達の中で、回りとは違って上流家庭の子という感じの洗練された洋服を着ていた、素直で優しく、きれいな女の子でした。彼女がいつも一緒にいた友人の女の子も、ちょうど5年生の時に都会から転校してきた美少女で、この2人の存在が、私のいたクラスを何となく他のクラスよりも輝いた雰囲気にしていたように感じます。

今その少女を思い出すと、大人への扉を前にした、何かへの憧れを感じさせる澄んだ瞳、そして清楚な純粋さと優しさのイメージが浮かびます。

私の中で、その子への思いは、はじめは自分がその子に自分でも分からず惹かれていくことをちょっと癪に感じるような感覚から、やがて大人びた美しさもあるその少女への思いに、自分からどっぷりと浸っていくような感じになっていました。

まだ恋というものさえ知らない心の中で、少年の私はいつもその子の姿を探していました。放課後に遊ぶ公園で。夏祭りの大通りで。林間学校のキャンプファイアーで…。

学級編成はそのまま6年生になり、休みの日、学級の皆で5年生の時の先生の家に遊びに行ったり、学校推薦の映画『どぶ川学級』を皆で見に行ったりした時に、その子も一緒にいた日々…。映画の合間に流れた成人映画の広告映像を前に、皆で照れあった場面…。

将来への不安など何もなく、来たるべき思春期の輝きの中で、その子への思いと共に過ごした日々は、私の生涯の中でも最も澄んで美しい時間だったように感じます。

少年の私とその少女はある程度仲も良く、時にはその子と2人で寄り添ってお喋りするような時間がありました。家庭科の料理材料を2人で打ち合わせながら、確認のたびにその子が私の手をぽん、ぽんと軽く叩いていた時間…。教室に置かれたオルガンに2人で座って、つたなく弾いていた時間…。

それらは私の心の中で、まるで四次元の穴から別の世界にある、他に何もない深い森の中で、小さな2つのつぐみのように寄り添っていたような、暖かい記憶として残りました。

当時の私はりりしい男の子というより、女の子からも「かわいい」と見られるタイプで、自分でも少し意識していたと思います。その子からも私は同性に接するような気持ちだったのかも知れません。

料理材料について電話をするかも知れないと伝えられた日の夜は、私は少しどきどきしながら、自分が愛らしい口調で喋れるだろうかと気にもんでいたのを憶えています。

一方で私は、日常の学校生活の中で、そんな自分の心の世界とは全く異なる顔を人には見せていました。その子に対する感情も、自分の心の中だけの思いとして固く心の中に秘め、決して誰にも、その子に対してさえも表すことはありませんでした。

自分がその少女には可愛いと見られることを望んだのとは全く対照的に、女の子をちょっとこばかにするような態度も私にはありました。卒業も近いある日、私は定規でつぶしたハエを、その子の友人の美少女に見せつけて、逃げるのを面白がって追うという無神経ないたずらをします。その美少女の方は男の子のように気さくな性格だったので、女の子の気持ちという思いやりなど私にまるでなかったのです。

そんなちぐはぐな外面を抱えながらも、私は初恋の少女への思いの中で、心の中では暖かく澄んだ時間の流れに身を任せていたのです。

それぞれの進路へ

やがて小学校の卒業が近づいてきました。

ほとんど全員が地元の決まった中学校に進学する中で、初恋の子と、友だちの美少女だけが、家の都合で他県の中学校へと進学します。初恋の子は東京へ。明星学園という、ＴＶアイドルの世界を感じさせる名の中学校へ行くそうです。友だちの方は長崎へ。

それを知った時、私は「やはりそうなんだ」と思ったのを憶えています。やはり自分とは違う世界に住む女の子だったんだ、と。

女の子達を中心に、お互いの思い出のために、それぞれがサイン帳を用意してメッセージを書き合いました。私も、茶色がかった中世の海図を表紙にあしらった、ちょっと洒落たサイン帳を買い、友達や一部の好きな先生に書いてもらいました。初恋の少女と美少女の友人にも書いてもらいました。

私もお返しに初恋の少女のサイン帳にメッセージを書きました。一瞬、こんなに好きだった自分の気持ちを、その真っ白い紙面に託すイメージが頭の中を流れます。もしその子の目の前で書くのでなければ：。私はいつもの「何気ない風」を装い、当時好きだった「レインボーマン」の絵など書きます。書いたメッセージは、今は特に思い出せないような、あたりさわりのない内容だったと思います。

卒業式の日、私たち皆がこれから進学する中学校の制服に身をかためた中で、初恋の少女と美少女の

友人だけが違う服装で参列します。美少女の友人は紺色のスーツで、回りに少し溶け込んでいますが、初恋の少女ひとりが上下とも白のスーツを着て、コントラストが際立ちます。それがよく似合ってもいました。

クラスごとに講堂の壇上に上がり、卒業証書を校長先生から受け取ります。

やがて私たちのクラスの番に。袖の階段から壇上へと上がろうとした時、初恋の少女は私の少し斜め前にいて、私たち男子が先に上がっていきます。

初恋の少女の横を通りすぎる時、その子は私に声をかけます。

「たあ坊のばか」。何となく愛着心とご機嫌斜めを半々に混ぜたような声で。私は何か余裕を示すような表情を一瞬その子に見せ、そのまま壇上へ向かいます。

その少女はその時、たったひとり、私にだけ声をかけました。それもその言葉で：。

卒業式もいよいよ終わりに近づきました。私は、これでいよいよその子と離れ離れになるのだという思いに耽(ふけ)ります。あんなに好きだった、そして少年の私が心の中に大切に描いていた愛情の世界、それに重なる女の子と自分は別れ、見えないところへと遠ざかって行こうとしている。

自分の中にそんな思いが流れるのを感じ、私は眉を寄せながらうつむいていました。

しかし同時にそこには、そんな自分を離れて冷静に見ている、もうひとりの自分がいました。

自分のそんな心の世界は、家族や仲間たち、そんな「現実」の中を生きる私にとって、誰にも言えない「秘め事」だったのです。現実の中の初恋の少女本人に対しても！

家に帰ると母に、「たかしがすごく悲しそうにしていたと先生が言っていたよ」と言われました。私は「そんなんじゃないよ」とちょっと憮然として答えます。「ちょっとお腹が痛かったんだよ」と。母は、「なんだ、そうかい」と言いました。

中学校時代

小学校も終わり、どの学校の生徒でもない春休みを過ごして、やがて中学校へ。

私は、過ぎ去った小学校時代の余韻の中にいました。

自分の心の中に置きざりにした、透明で澄んだ空気の中の世界があった。そこにはあの少女がいた…。青白い透明な空気が流れる、大きなプラタナスの木がある小学校の風景…。私は心の中で、その風景の中に再び戻って行きます。

しかしそこにはもう、その初恋の少女はいませんでした。

中学校の生活の中で、次第に、恋というものを頭で考えるようにもなります。もしあの2人で寄り添っていた時間に好きだと伝えていたら…。そう考えたこともあります。

やがて私の心の中で、その少女の輝きは比類なきほどのものになり、私は彼女が人間ではなかったのではないかという思いを抱くようにさえなります。それはまるで夢の中のおとぎの国に起きていた出来事であったかのように、現実の自分にあったことという感覚が薄れていきます。

しばらくすると、日替わりで気になる女の子が現れるようになり、初恋の子への思いは次第に薄れて、やがて消えて行きました。

それでも、小学校6年の頃に流行った歌謡曲のメロディを思い出すと、その頃に自分を包んでいた雰囲気が、ふわ～っと体の中に蘇ってくる。それはもう初恋の少女の記憶ではなく、何か憧れと安心に満ちた、私がその中で生きていた、ある別の世界の空気の記憶でした。

その空気の記憶はもう、私の体の中から消えることはありませんでした。

恋愛至上主義とナルシズムと自殺願望

中学校の3年間は、これといったこともない、平和な時代だったと思います。「不良」というものが登場したのも、ちょうど私の下の学年からです。幅広い学生ズボンを穿いて、頭髪をリーゼント気味にした粗野な感じの下級生を、何かもの珍しいものを見るように見かけた記憶があります。

私はそんな中で、小学校の時ほど目立ちはしませんでしたが頭がいいのと、あとは絵のデザインとか、何となく才能がある子として見られていたと思います。

頭も顔もいい方とはいっても、女の子に対してはちょっと斜に構えて距離を置いた態度、そしてどちらかというと朴訥で口下手だった私は、ほとんどモテたわけでもありません。女の子が近づいてきた分だけ引くようなところもありました。

そんな外面とはまったくちぐはぐな内面が私の中にはありました。自分が「恋愛至上主義」のように感じたことを憶えています。成績の良さはあまり重要なことではなく、異性を好きになり相手からも好かれるということが、何よりも重要なことに思う感情が自分の中にあるのを感じたのです。そんな内面をひた隠しにしながら、心の中では日替わりのように「好きな子」を意識していた感じです。

中学1年の時だったか、ある夏の日、学校のプールから帰って、鏡を見ながら櫛で前髪を撫でていた時、自分自身の顔に見とれたことが鮮明な記憶として残っています。自分の容貌へのナルシズムの最初の日だったと思います。それが、その後の恋愛至上主義感情を構成したひとつの分子になったのだと思います。

しかしその一方で、そうした自意識が表に出ることを、自分の恥部であるかのように恐れる気持ちがありました。

中学1年までは、ほとんど子供の延長という感じでしたが、中学2年頃までに次第に異性を意識するようになり、女の子にぎこちない自分を何とかしたいと感じたりした時期もありました。

妹の買ってきた少女マンガをよく読み耽っていました。萩尾望都の『ポーの一族』など文学的な雰囲気があるものです。そうした作品に流れる、「失われたもの」を探しに行くという雰囲気に、私は強く惹かれていました。

そんな中、西欧の中等少年寮を舞台にした、自殺をテーマにした作品を読んだおりに、自殺というものがあまりにも高尚な魅力あることのような感情にとらわれたことを憶えています。自殺という行為そのものへの現実味はないまま、それが、「失われたもの」がいる、自分が本当に生きるべきだった世界に行ける手段であるかのように、あまりにも魅力があることのように私の心に映ったのです。

子供時代の終わり

中学3年は、3年間の中学時代でも最もクラスのまとまりも良く、気の合う友人に囲まれた1年間でした。後の私は、この最後の平和な日々を、「幸福な時代」としてよく懐かしむことになります。

しかし平和な日々の中で、私は明らかに、これから自分が生きていくことへの不安を感じ始めていました。せわしなく目の前を飛ぶトンボ…。それは一体自分が何のためにここにいると考えるだろう…。それに生きる意義などない…。では人間は？　同じではないのか…。

高校以後の人生も見えず、ただ束縛のない自由で静かな生活を望むといった厭世観の中にいました。デール・カーネギーの『道は開ける』を読んで感銘を受けたりして、何か将来の生き方へのイメージを

得たりはしましたが。

私の心の底に、大きな感情が沈んだまま置きざりにされていました。幼少期から抱いた、人々への漠然とした疎遠感。自分だけが悪い子で、駄目な子なんだという思い。そして初恋の少女を好きでいた自分が生きていた別の世界：。

それらは子供時代という猶予の中で、現実の世界から切り離されていました。その猶予の切れる時は、音を立てて近づいていたのです。

3
章

心の旅へ

（高校時代～大学２年）

高校時代

高校に進学する頃、私は何とか自分の将来に自信を持つようにしました。自分自身に自信を持ったというより、自信を持てるような自己像を練り上げたのです。カーネギーを読んで人生を分かっている、下らないことにとらわれず、何ごとにも動じず、率直で純粋で知的で、そして風貌も魅力ある人物。これで行けばいい、と。

男子校でした。私の高校生活は、回りの騒がしく粗雑な笑い声を軽蔑することから始まりました。コメディアン番組や少年喜劇漫画の登場人物の物まねと、女の話題だけしかしない連中がひときわ目立つ教室。僕はあんな話などしたくもない。あんなえげつない女性への意識など持ったりはしない。

私は自己像を守るために、寡黙（かもく）という砦（とりで）に立てこもり始めます。やがて口やかましい連中がそうした私の特異な姿に気づき始めます。大した悪意からでもなかったでしょうが、「～だよな。エエカッコシーまの」。私の意識がピクンと反応し、軽くにじみ出た恥辱感を〝動じない外面〟でぬり消す。

心の変調

やがて私は、クラスの中で浮いている自分を感じ始めました。この後はお決まりの流れと言えるでし

よう。

「孤高」は「孤独」に変わり、「不安」と「寂しさ」という予定外の感情にとり囲まれます。回りに受け入れられるように路線修正をしようとする焦り。一方で、時折高校近くで見かける女子高生に対して、軽蔑した連中以上に緊迫した自意識にとらわれ、自然な振る舞いができなくなっている自分。

やがて私は、道で女子高生とすれ違うことができなくなります。極度に緊張して冷や汗をかいている自分を見られるのが恐くなったのです。視線に出会う恐れは、誰もいない家の外でさえ、私の体を電波のようにしびれさせ、外出できなくなることがありました。「視線恐怖症」です。また原因不明の頭痛や胸痛を持つようになり、幾つもの医者に見てもらって、深刻な病気を疑われたこともありました。

私は高校生活に絶望を感じ始めました。朝、再び一日を過ごすことへの不安感の中で目覚める日が続きます。朝と夕方の登下校時に、クラスの同級生にどんな挨拶の言葉を交わせるかと思い悩み、うまく行かなくて落ち込んだ気分になる日々。

そんな私を唯一慰めたのは、悲しみの気分でした。

夏の日が落ちて少し時間がたった頃の、まわりが青白く薄暗くなって、人や街の全ての風景が空気に溶け込むような時間、私は悲しみの気分の中で、あてもなく街の中を歩き続けました。

私の頭の中に漠然と、中学時代や、小学校時代の初恋の日々が流れていました。

自分の中に何か失われたものがあって、ただ悲しみの気分だけが、失われた何かにつながっているよ

うな気がして、その中にいたかったのです。青白い空気を通してつながっていた何かは、あたりが暗くなるといなくなってしまい、私は諦めて家に帰っていきます。

青白い空気の中を、悲しみの中で何かを求めて歩き続ける自分…。

これが、私の心の旅の原点の光景となりました。

独立への出立

幸いなことに、私の心の変調は、私の心を完全に征服するには至りませんでした。分断されていた私の心の世界が、逆に功を奏したのかも知れません。相変わらず、そうした心の変調を自分の内面だけに留め、外面では「何ごともない」生活を何とか維持しました。特に、写真に熱中し、写真部の活動などを通して、人の中で積極的に行動する自分が生き続けた感じです。

苦しい心を抱えて、これからの生き方を模索する高校生の私にとって、唯一支えとなったのは、加藤諦三の著書です。今となってはあまり内容を憶えていませんが、人に良く思われることを善しとする平凡への別れを告げ、自己の能力の実現を使命にすることを説くような内容に感銘を受けたと思います。

その中で最も私が影響を受けたのは確か、『幸福に別れを告げよ』という本でした。その中でだったと思います。「人に良く思われるということは、その人の欲求を満足させたということにすぎない。し

かも最もエゴイスティックな人ほど大げさに感謝するのである」といった文章でした。

その頃までに私は、自意識過剰を抜け出そうとして「気にしないように」と考えたところで、結局は「気にしない自分」を人に見せたいからそう考えようとするのだというループ状態に気づいていました。結局人に見られる自分を目あてにした所に出口はないのです。

そんな中で加藤諦三のその言葉に感銘を受け、皆に受け入れられるようにしようとしていたことの馬鹿馬鹿しさを感じました。和を保つなど、その場の人間の欲求を満たすというだけのことでしかない。ならば自分の欲求に従って、それでうまく行けばいいのだ。

そう考えた私は、全ての善悪を否定するような冷徹な哲学の中で、次第に自分を快活な外面で固めるようになって行きます。自由奔放に、思いのままに行動する。

私の内面は苦しみの色の中のままです。加藤諦三が言ったように、ある種の人間は平凡な幸福の中にはいられない運命にある。そのような人間は、幸福に別れを告げ、苦しみを十字架として背負い、自己の能力の実現という使命に生きることしかできないのだ。

それが自分なのだと思いました。

高校2年で写真部の部長を務めました。ちょうどその年、3年に一度の高校祭があり、私は「能力ある者の義務」と感じて高校祭のポスターデザイン募集に応募し、採用されます。写真部の展示も好評な

ものでした。部の展示会場では訪れた女子高生を前に対人恐怖症状態を再現させていましたが……。

高校2年の終わり頃、次の年次の部活動予算を編成する予算委員会への参加を依頼され、副委員長となり、各部長との予算かけ引きなど実務面の中心となり活動しました。

そうした「自己実現に向かった」活動を通して、私の中で、「自由に思いのままに」行動することへの自信のようなものが生まれていました。

高校3年のある日、私はこの新しい生き方に確信を感じます。

この新しい生き方を確実なものとするために、もう人と自分の内面のことを気にしていた過去は振り返りたくない。

そうして、小学校時代からの年賀状や小学校卒業のときのサイン帳、それから高校に入ってから断片的に書き始めていた日記などを、燃やしました。

小学校卒業のときのサイン帳は、初恋の少女とその友だちからのメッセージも書かれていたものでした。

僕は、もう過去に別れを告げる、と。

それから大学1年の終わり頃まで、私の人生の中でまた、断絶された2年間がありました。「今」さえもなく、未来へ向かう時間だけがある日々。冷たいナルシズムの中で、外面を快活に演技し、内面には全く音のない静寂が流れていたという記憶を感じます。男が言うのは小気味悪いでしょうが、自分の美貌だけが唯一の支えであるような感覚もありました。恋愛からはやはり遠い生活です。

受験勉強というものへの反発心もあり、大学の受験勉強はだいぶいい加減でした。休みには少し遠出をして山岳写真を撮りに行ったり、そのころ熱中していたクラシック・ギターの良いものを探しに東京に出かけたりと、ひとりで日々を行動的に過ごしました。

進路については、一時写真家を目指そうなどと考えたこともありましたが、加藤諦三の影響もあり社会学への関心を持つようになりました。幾つか社会学部のある大学を受験し、合格できた東京のある大学へ。当時ではまあ三流大学の中で上位に位置したようなところです。

そして大学1年の終わり頃まで、おもちゃ箱をひっくり返したような賑やかな日々が始まります。

高校3年から大学1年の終わり頃までのこの2年間を、後に私は「躁（そう）の時代」と呼びました。

サークル活動そして社会への戦闘的な視線

大学での所属は、社会学部の中でも応用社会学科マスコミ学専攻というものです。マスコミ学という

響きに惹かれて集まった人間ということか、皆活発な印象の人間達でした。私はその中で快活に振る舞い、学友達ともすぐ仲良くなり、ゼミのさまざまな活動の日々をすごしました。

サークルでは写真部とクラシック・ギタークラブの2つに所属しました。写真部ではサークルの掛け持ちは原則禁止でしたが、上級生の女性に一人テニスサークルとの兼部をしていた人がおり、私も兼部を強行しました。先輩の中でも優しい人は大丈夫と言ってくれましたが、自分の存在が非難されることへの懸念が流れ続けることになります。

この頃私は、自分自身を「苦しむ人間」と捉えていました。苦しみが私のアイデンティティだったのです。

私自身は今、この苦しみの感覚そのものを思い出すことができません。頭に浮かべたそうした言葉が記憶に残っているだけです。そして憶えている記憶として、その年の大学祭、学生運動の残党とも言えるような感じの先輩に促され、時代の流れの証人になるような気分の中で、団交の一群に混ざった時のことだったと思います。その先輩とのふとした会話の折り、「何もないよりは苦しみがあった方がいい」と言った自分の言葉を憶えています。

苦しみを宿命として、そこから何かを生み出していくということに、自分の進むべき運命がある。そんな感覚の中にいたのです。

私は同時に、社会に対する戦闘的とも言える視線を持っていました。自分のような苦しむ人間を生み

出した社会の欺瞞を、自分なりの視点から分析する。それを自分の将来の業とする。そんなイメージも持っていました。ただ、大学1年の半ば頃には、書店に行って関心の持てそうな本を探すと、社会学よりも心理学の方に興味が移ってきているのを自覚していましたが。

躁の時代の終わり

大学1年の夏が終わろうとする頃、私の「躁の時代」にもかげりが出始めていました。ゼミの女の子との会話などの折り、やはり自意識にとらわれようとしている自分を感じ始めたのです。この頃には精神病理学への関心も生まれていたと思います。

自分の中に、何か逃れられないものがあるという感覚を感じ始めていました。

やがて大学祭を終えて冬になろうとする頃、所属した写真部でちょっとした感情的な騒動が持ち上がります。

それがきっかけとなって、私の「躁の時代」に完全に終止符が打たれることになりました。

その騒動とは、3年生の主力メンバーから出された、大学祭への作品出展をはじめ何も協力しなかった、ある3年生部員の除名を求める動議でした。それをめぐって3年生部員が賛成派と反対派に二分され、その対立は感情的なものにまで発展したのです。その対立はあくまでその3年生部員の処分を焦点

としたものでしたが、私は自分の存在も受け入れられるかどうかの瀬戸際に来たという感覚を、主力メンバーへの敵対感の中で持ちました。

そんな中、私と同じようにサークルの掛け持ちをしている女性部員が、反対派の中心の一人でした。清楚な感じでちょっとした憧れを感じさせた女性です。その人がこの感情的対立の中で傷ついているという話を2年生部員から耳にします。

私は、その女性の側に立つべく、自分のサークルへの思い、そしてその女性への信頼などを熱くつづった手紙を送ります。

それは、その感情的軋轢（あつれき）の中で心を痛めているその女性への、あくまで力づけのためという意識でした。しかし実はそれは、心の裏で、私が人生で今まで得ることなく終わっていた、何か濃い人間的なつながりを、その女性との間で得ようとする衝動を隠していたのだと思います。

私の手紙をその女性が開封したであろう時、私の中で封印されていた心の闇への扉も、同時に開封されることになったのです。

開封された自己

手紙を送ったあと、私は自分のしたことへの強い不安におおわれ始めます。自分は一体彼女に何をしたのか。その手紙はなかったことにして下さいと、その女性に伝えようとする衝動に駆られます。

少ししてその女性から来た返事は、私への親身な気持ちに溢れる内容でした。私はそれにほっとしたものの、これからその女性にどのような態度で向かうか、混沌とした恐慌感の中に陥って行きます。空回りのような高揚感と、互いに意識し合っているという強迫的な感覚。そして自分のしたことは実は偽善的な嫌悪すべき行為であり、彼女も結局は「彼ら」の側の人間であって、自分はひとり排斥される人間だというイメージ。一方夢の中には、その女性が裸の姿で近づいてくる幻想が映し出されていました。

意識としてはやはり、何ごともなかったような普通でいる自分を保とうとしました。しかし意識の裏側で起きていた混乱はそれが耐えられる大きさを越えていたのでしょう。

手紙を出した日から1か月経った頃、開かれた部の総会の雰囲気は、元の穏やかなものに戻っていました。緊迫感を増す私の内面とは対照的に。

そして少し久しぶりにその女性に会い、目が合い、身じろぎもできず数秒立ち尽くした時、私は、表に出してはいけない、何かを隠した自分の内面を見せてしまったという感覚に全身を射抜かれます。

内面の狂気

それから数日間、私の内面は狂気的な恐慌状態に陥ります。断片的な記憶だけが残っています。自分がその女性に向けたのは「破壊的な愛」だという感覚。その女性から向けられる不信と嫌悪のイメージ。自分がその女性を「精神的に殺してしまった」という幻想的な恐怖。その女性に対する私の感情は、完全に破綻していました。

写真部に行くことも恐くてできなくなりました。私にできることはただ、全ての行動をやめることでした。

この頃同時に、入学以来の熱い友情を感じていた親友関係が崩れていました。最も仲の良かった親友の一人は、実家の都合で大学から離れがちとなり、もう一人に対しては何かエセ友情のようなものを感じて私の方から心が離れていました。

もうひとつ、私の心理状態を大きく失墜させた出来事が重なりました。顔立ちが何となくごつく変化し、かつての美少年の面影が急速に失われたことです。これは大きな親不知（おやしらず）が4本とも出てきた影響でという、少し珍しい話です。

自分の美貌は、私にとって他人への優越感のためというよりも、自分自身に価値を感じることのでき

る、最後の安全線のようなものでした。今はそれさえも失われようとしている。

私に残されていたのは、心理学の勉強へと進むことだけでした。その大学での心理学系ということで、同じ社会学部内の社会心理学科への転科試験を受け合格。これで入学以来馴れ親しんだゼミの友人達とも別の道へ行くことになります。

こうして、私が「躁の時代」に立ち上がってから得たものの全てが、私の中で音を立てて崩れようとしていました。

私は、自分が狂気の世界に向かおうとしているような孤独感を感じました。目の前に幻覚とも空想ともつかないイメージが現れます。白いもやが流れてきて、全てが消失していく。自分が現実から遊離して、何か宇宙の中へと浮遊して飛散するかのような恐怖。

狂気の世界が、もう視界に見えるところまで来ている…。

私が人生で体験した、最も冷たい、狂気の孤独感でした。

心の旅へ

私は、自分の内面に、完全に打ちのめされていました。私にできることは、全ての行動をやめることでした。

私はもう、「思うままに行動すること」を自分の指針にすることはできなくなりました。その結果が

これだったのです。私が向かうべき先は外界ではなく、自分の内面となりました。

この時、私の「躁の時代」は終わりました。

私にできるのは、自分の心の中を見つめ直すことだけでした。心理学、精神分析学、精神病理学、脳生理学を、むさぼるように勉強し始めました。

そして私は、今までの自分が生きてきた道筋を、日記に向かって書き始めました。

その時私の前に最初に浮かんだのは、高校1年の時の自分が、夕暮れの青白い空気に溶け込む街の中を、悲しみに浸りながらどこへというあてもなく歩いていた、自分の姿でした。

それが私の生まれた姿、原点でした。

私の心の旅は、そこから始まりました。

孤独への旅立ち

大学2年となり、私は知り合いのいない新しい教室に通い始めます。入学時に入った2つのサークルとも退会し、社会心理学の研究会サークルに入りました。家族的な親しみの溢れたサークルの中で、私は傍目からも深く悩みこんでいるのが分かる様子だったようです。

その研究会サークルで過ごした時間は、私にとって心の癒しとなるものでした。しかし私は解決され

ない内面を抱えつづける自分を自覚していました。

その年の大学祭では実行委員の一人として活発に活動し、次期サークル会長にも選出されました。ただこれは次期会長となるべき2年生が私を含めて3人しかおらず、他の2人もかなりの変人という状況の中で、決戦投票までして決まったことです。私が悩みすぎる人間であることを心配した人が多かったと思います。

一方で、心理学の勉強を続けるには、その大学ではあまりにも環境が不足していました。私はそれで、3年次からの編入学が可能で心理学科のある大学の編入学試験を受けることを考え始めます。ただしばらくその決心には至りませんでした。

私の中で、選ばれたサークル会長の役割を1年間果たすことが、何か自分の心の成長として必要なことであるような考えがありました。編入学試験を受けることは、それから逃げることではないかと。

しかし、実際のところ、私がサークル会長をすることは、その当時の私の心の状態では無理があったのです。私はそれを感じ始め、会長を続けるか編入学試験を受けるかという葛藤に陥ります。

一体自分は何ものなのか。今はもうまるで自分自身の中に押し込められたかのような自分。別人のようになってしまった、あの「躁の時代」を生きた自分：。あの自分はどのようにして生まれたのか。

私は燃やしてしまった日記を探して、絶望的に押入れの中をごそごそとはいつくばり、苦しみに唸り

ます。

やがて、再び加藤諦三の『幸福に別れを告げよ』に目を通し、自分を「躁の時代」に立ち上がらせた幾つかの言葉を思い出します。

自分はこれ以上人の和の中で戦々恐々としていることはできない。

私は編入学試験を決意します。それは、「躁の時代」に立ち上がった、孤独への独立の来歴を取り戻すことでもありました。同時にそれは、私が研究会サークルという人の和の中で実現しようとした、最後の「なるべき自分の姿」を放棄することでもありました。

私の最も大きな関心は、精神分析になりました。「自己の真実に向かえ」。心の底から聞こえるその声だけが、最後の賭けのように私に残されたのです。

そして編入学試験に合格。東京六大学の中のひとつでした。

桜の花が舞う、明るい日差しの中を、私は新しい大学へと通い始めます。前の大学とは打ってかわった、華やかな揃いのキャンパス・ファッションに身を包んで、談笑する男女の学生達。その中を一人で歩く自分。自分と同じ年代の人間達への劣等感が色濃く流れ始めていました。

こうして、新しい大学生活の中で、私自身の本格的な自己分析の歩みが始まっていきます。

このあと私が歩んだ道のりを思い返した時、結局私の中には全てがあったのだと、今では感じます。純粋な愛への願いも復讐の怒りに生きようとする憎悪も。傲慢なナルシズムも激しい自己嫌悪も。大きな存在への依存を求める感情も反抗と孤独の鎧の中で人に背を向ける感情も。狂気に届くほどの混沌も外面行動を何とか支障なく制御する自制力も。そして科学の目でそこで起きたことを解明しようとする理性も。

そこから、新しい心理学を作ることが宿命とも言えるような道のりが始まりました。

それは、自分の心の奥深くに迷い込んだ私が、現在の明るい世界に還ってくるまでの、長い心の旅だったのです。

4章

抑圧された感情の開放

（大学3年）

出会い

新しい大学に通い始めた頃、私は真面目で温厚な人間を演じることで精一杯という感じでした。人を前にしての内心の緊張と身構えの中で、自分が何を感じているのかさえはっきりしないようなありさまです。

一方すぐ、私に2つの大きな出会いがありました。

ひとつは、その後の私の自己分析の歩みを大きく導くことになる、ある下級生の女の子との出会いです。

全学部向けの特別教養科目の中で、私が参加した心理学コースで同じチームになった、ひとつ下の学年の女の子でした。所属は社会学部で、共通専門授業も多い心理学に興味を持って参加してきたのです。そのコースは全ての心理学科生が2年生までに履修を義務付けられており、私のような3年次編入生も履修する必要があります。年間を通して同じチームでレポート提出をする演習授業でした。

その下級生の女の子は、いかにも地元の子がそのまま大学に来たという感じの、少し子供っぽく、とても素直で優しい子でした。私はその下級生の子に対して、とにかく素直な育ちで、この上なく優しい

子なんだ、という感想を抱いただけで、それ以上の特別な印象は持ちませんでした。

他の場面では、何かイメージに合う外見の女性に一目で惹き込まれるという感情を私は持つようになっていましたが、その下級生の子に対してはそんな感情も全くありませんでした。

それでも、その子の心底から素直でちょっと幼っぽい優しさを前に、私は時に、自分がどう見られるかという緊迫した自意識にぽっかりと穴をあけることがあったようです。何か無防備な気持ちを心の片隅に感じながら、演習報告のための勉強を図書館で一緒にした時間もあったことが、後の記憶から知ることができます。

もうひとつの大きな出会いとは、編入学後間もない頃に手にした、カレン・ホーナイの精神分析の書物です。

私が初めて手にしたホーナイの著書は『心の葛藤』で、その目次などにある「人に近づく衝動」「人に敵対する衝動」「人から離れる衝動」「自己嫌悪と葛藤」といった言葉は、まさに私自身の内面につながるものに思えました。

それまで私は精神分析の勉強としてフロイト派からの流れが主流の、日本の正統的な精神分析の教科書を主に読んでいました。しかしそれは結局、ほとんど役に立つものではありませんでした。

自己分析初期

精神分析、そしてそれを自分自身で行う自己分析は、基本的にとても難しい作業です。私が誰の助けを得ることもなくその道を歩んだのは、宿命とも言えるそれまでの歩み、そして分断されたまま未統合の自己の中で、多くの感情が深い抑圧を免れていたという条件が揃ってのことであったのでしょう。

それでも、自己分析をしようとする最初の努力が、皮相な自己心理解釈だけで空回りするのは、誰の場合でも同じです。

私に自覚できるのは、他人一般に対して親しみやすく振る舞うことへの強迫と、それと衝突する疎外感くらいなものです。そして時折私を襲うパニック的な緊張感。

それを一生懸命、ホーナイ理論に照らして自己理解したところで、何が変わるわけでもありません。それどころか逆に、人々に対して自分が感じている疎外感は、実のところ他人への全般的な敵意なのだと感じるようになっていました。

そうして、「自己分析によって対人関係を改善する」努力への徒労感が私の中に生まれて来ます。同時に、外面でどう振る舞えるかが重大なのではなく、自分の内面感情そのものに問題があると感じるようになりました。

流れ始めた深層の感情

最初の学期が終わろうとする頃、その後の歩みに影響を与える、大学生活上のちょっとした変化があります。演習授業のチームを、人数調整のため別のチームに変わったことです。

今までのチームの他の4人のメンバーについて、私は、自分とは違って感情表現がストレートで豊かな、人間的に魅力ある人達と感じていました。そんな人達とのつながりを、自分は同じチームという外面の枠でようやく与えられているという意識。そのため、そのチームを変わることは、私にとって、与えられた価値あるつながりを失うような失意を感じさせました。

新しいチームでの授業の最初の日、前のチームのメンバーと会った時です。例の下級生の女の子が、まるで親にはぐれてしまった子供のような表情で、私に「しまのさん、なんで行っちゃったの～」と声をかけてきます。

優しく温和な外面を何とか保つだけの私は、それが自分への非難の言葉ではなく、むしろ好意の言葉であるのを感じるので精一杯です。

しかしその下級生の子のその表情と言葉は、私自身が気づかないまま、私の心の底へと深くしみこんでいくのです。

そんな出来事から数日後、私の中に初めて、深い深層からの感情が流れる体験が起きます。

皮相な自己分析の日々にも疲れ、自分の「人格の成長」への絶望感を抱き始めていた時期でもありま

した。

法事で実家に帰省していた時のことです。集まった大勢の親戚の人達に、酒をくんで挨拶するようにと父から促され、私はかたくなな抵抗感の中で身構えていました。

私はその頃、頭ごなしの躾をしてきた父に対して、硬い抵抗感を抱いていました。しかしこの頃、父の方は急速に穏やかな性格に変化していました。恐らくその頃、父の中で子供を育てる責任の重荷が降ろされたのでしょう。

頑なな態度で身構えていた私に、父が、もういいから飲めやというねぎらいの感じの声をかけた後です。私は自分でもわけの分からない、涙が出るほどの悲しみが込み上げてくるのを感じました。

その時の私は、それを「全く理由の分からない感情」と感じました。鎧のような心の殻を破って、深層から湧き出た感情だったのです。

最初の方向変換

やがて私は幾つかの体験を通して、「対人関係の改善」を求めて自己分析するという姿勢を、はっきりと放棄する方向へと方向変換します。

それを決定づけたのが、大学3年の夏休みに入ってすぐに開催された、文学部の合宿授業への参加でした。

「青年の自己表現と成長」というテーマで、合宿参加で単位を取得できます。自己表現を通しての成長について考える。人生観をぶつけ合うとか、何か濃い人間関係の演習劇のようなものが用意されている雰囲気を感じました。

それに臨もうとする私の感情は、複雑でちぐはぐなものでした。

その合宿を「自己分析によって対人関係を改善する」場と考える一方、いかにも「本音をぶつけ合って最後には心を開く」という筋書きへの抵抗感。それに対して反抗的な態度を取ったら、他の人間達は恨みを抱くだろう…。生徒の心の変化を期待する教授達に感じる権力欲。とうてい心を通じ合わせることなどできない…。

合宿に参加すると、張り詰めた身構えの中で、自分の感情の監視統制を続けます。それはまるで、悪性腫瘍の転移が起きないかといつまでも緊迫した診断を続ける人間のようでした。そうして何とか自分を保つことが、その時の私にとっての「対人関係の改善」だったのです。

1日目。来るまでは不安が強かったが、思ったより和やかでフレンドリーな雰囲気。

しかし夕食後の自己紹介で状況が変わる。全体的に皆かなり緊張している雰囲気。僕は自分の神経症のことも含めて、一応のことは言えた。早口になってしまった。何か孤立感や優越感、逆に罪悪感に対面しなければならないかも知れない。だがむしろそれが今の自分にとっては本当の姿であるのかも知れ

ない…。

2日目。討議の議長をする。終わって虚脱感と虚無感に取りつかれる。自分は一体何をしに来たのかと考える。他のゼミ室からは活発な討議の声が聞こえてくる。一瞬それに参加させてもらうことを考えるがやめる。

合宿に参加した当初の私の様子を、後にこの合宿で親しくなった学友の一人は、「何かあっぷあっぷしているようだった」と語っていました。

私は既に苦しくなっていました。回りの人々は皆善良そうでした。その中で何とか表面の穏やかさを保ちながら、「異人の自分」を支えきれなくなるのを感じていたのです。人々の中にいるのが辛い。自分は人と一緒にいるのが嫌なのだ。そう叫んで逃げ出したい気分でした。

そんな中、合宿の3日目にあるゲーム劇が行われます。「バカ!」と叫びながらボールを相手に投げるというものです。感情表現と身体運動の関係を示すとのこと。

私がそのゲームの演技者として選ばれました。教授の一人がボールを受けます。

私は何気ない風を何とか装いながら、緊張のため「ばか」という声も弱々しく、ボールも相手の胸に真っ直ぐ進まず、あちこちに逸れます。

指導教員から声が飛びます。「もっと気持ちを込めて」「思い切って感情をぶつけるんだ」

私の中に気分の変化が起きていました。もう人前で自分を保つ努力が嫌になってきたのです。脳裏に

は、今までの自分の人生で通り過ぎた全ての人々が、走馬灯のように流れていました。

ばかーっ！……。怒りは全ての人々に、そして世界の全てに向けられたものでした。誰も僕の内面を理解なんてしなかった……。この怒りを解き放てというのか。

理性の杖が外れます。

私は思い切り「ばかっ！」と叫んでボールを投げつけます。ボールは相手の胸の真正面に、構えた両手に吸い込まれるように入りました。拍手が湧き起こります。

私は沈痛な気分の中で元の場所に戻り、黙ったまま座ります。もう誰とも口をききませんでした。

私の心はひとりになりました。もういい……もうこの合宿はやめて、家に帰ろう。

授業が終わると一人で自分の部屋に戻り、ベッドの中にもぐり込みます。疲労感が私をおおっていました。もう皆の前には出られない……。

次の授業に出てこない私を心配してか、一人の男子教員が部屋の中に入ってきました。カウンセラー的な雰囲気のある、穏やかで優しそうな表情に印象を感じていた人物です。実際大学の心理相談員だったかも知れません。

私のベッドに腰掛け、私の顔をちょっと覗き込んでから、私の肩に優しく手を置きます。

その瞬間、私は爆発したように泣き出していました。自分では泣くつもりなどないのに、体全体が鞭を打つように、大きな泣き声と涙が溢れ出して来ます。うわっという泣き声と同時に、大量の空気が胸

から吐き出され、気圧の低くなった肺が再び空気を求めて、ひくっという断絶音が起きる。体全体がエビのようなピストン運動で泣き声と涙を吐き出している。体が震動運動を繰り返している。

実際この時のことを思い返すと、少し奇妙な感覚を覚えます。泣いているのは私自身というよりも、私の体を借りた別の存在が大きな嗚咽を起こしているかのようでした。

暫くして泣き声を吐き出す体のエネルギーが衰えてくると、ようやく泣き声が止み、少し震えながら息をします。気持ちが少し落ち着いてきます。

教員がぽつりと話し始めます。「悔しかったんだね」

その瞬間、私の体の中に普段と同じ力が回復していました。教員への軽い軽蔑感を覚えます。何を言っているんだ……。

何も分かっていない。

私はベッドから身を起こしながら答えます。「いえ、そんなんじゃないです……」。「もう大丈夫ですから」。

授業に合流します。

そこで私を待っていたのは、何も変わることのない、皆の笑顔でした。

合宿の残りの日を、私は他の参加者と打ち解け、楽しく過ごしました。この合宿で同室になった、同

じ心理学科の学友が、私が後々までつき合いを続けることになる、大学時代の唯一の親友になりました。

私は、自分が何か変わったのかも知れないと考えました。抑圧された感情を解放するカタルシス。それが自分に起きたのかも知れない。

合宿から帰って日が経つにつれて、自分が変わっていないことが分かってきます。相変わらず人に対する時の自分の感情が気になり、変わらない不安や緊張が自分の中にあるのを知ります。

それでも、何も変わっていないのでもないことを、はっきりと感じました。自分の「状態」が変わったのではない。自分の進む「方向」が変わったのだ。

はっきりとは意識していませんでしたが、私はこの体験の中から、「心を解き放つ」ことを学んだのです。

対人関係を改善しようとして自己分析する姿勢そのものが、人々を前に身構える武装であり、対人関係を悪化させていた。自己分析さえ放棄し、丸腰になって人々の前に出た時に、自分の中に変化への可能性が生まれる。それを知る体験となりました。

自分の内面を開放するという方向性が、私の中に生まれていました。

しかし開放される感情とは、病んだ感情も含めてということになるのです。

内面の開放に向かって

夏休みはその後、自動車の免許を取るために実家に長い帰省をしました。長い休みを過ごす中、内面の開放へと方向を変えた私の心の中に、再び写真への関心が戻っていました。

また写真を撮りたい。そう思った時、最初に思い浮べたのが、例の下級生の子でした。私自身は人物写真はほとんどやりませんでしたが、実際にその写真ができたかのように、ありありと、その下級生の子がいる風景が浮かんできます。大学のキャンパスの、大きな木の枝の葉に手を伸ばして、こちらを向いて笑みを浮かべている彼女の姿。そして自分の中に、その子を愛しく思う気持ちがあるのに気づきます。

でももうチームも別になってしまった…。人々への疎外感の中で、表面的な親しさへの強迫と緊張の中で精一杯だった私には、その子にどう近づき得るかを考えることさえできません。

大学3年の後期は、私の中で今まで抑圧されていた感情が開放され、自分の中に「実在」する全ての感情への通り道ができたような時期でした。

感情を抑圧し押さえつけることは、単に意識表面ではっきり感じ取れなくするだけでなく、心の中に

危険な火種を抱えているような別の姿へと変えてしまいます。抑圧された感情を開放することは、その歪んだ姿を大元の感情へと戻し、その人間にとって果たして本当にどれだけの意味がある感情なのか、見直すことを可能にします。

そうして私の中で抑圧されたすさんだ感情も、一度ありのままに体験する過程を経て、次第に私の中に収まって行きます。

夏休み明け、私の心の中は、人々への自然な振る舞いのできない自分へのすさんだ感情を湧きあがらせることから歩みを再開しました。愛しさを感じた下級生の子にも、どんな振る舞いをできるかと意識しても、ちぐはぐで何もできない自分。どうせ自分は嫌われるのだ、という絶望的ですさんだ孤独感。自分は一体これからどのように生きていけばいいのか…。

私の頭の中に、他人を憎むことに徹する自分の姿が浮かびます。しかし幸いそれは不完全でした。憎しみに徹することを放棄して、寂しさをさらけ出す自分を思い浮かべた時、あの根源的な悲しみが湧き起こってくる…。

でもそれは暖かいものを前にした時の悲しみなのだ。現実の人間達はまるっきり違う。そうした人間達の前で、僕はまるっきり無力になるより他はないのか…。

私には、自分の容貌への執着の理由が分かったような気がしました。この冷たい世界の中で、せめて自分自身が自分を愛さないとしたら、自分は一体生きるすべを持つのか、と。

この頃に私を覆った感情は、私の生涯の中でも最もすさんだ感情のひとつでした。

一方で、私は分断された自己を抱えたまま、表面では何とか平穏な対人関係を、最後までぎりぎりの状態で維持し続けます。

最初の開放感

秋が深まろうとする頃、私は、自分が何かにつけ他人を軽蔑し、優越感を持とうとしている自己中心的な感情があることを認めるようになりました。また、心理学の授業などに対する、追い詰められた獣のような反抗感情も認めるようになります。

しかし同時に、私はその頃、生まれて初めて体験するような、大きな開放感を体験しました。日々自分が変化している。

それは自分の進んでいる方向が正しいのだという感覚を私に与えるものでした。

残された抑圧の開放

その後私の中で開放されたのは、もはや「対人関係の改善」を目指して自己分析を始めた人間像とは似ても似つかない内面でした。絶対善悪の否定はすでに高校時代に果たしていましたが、それでもまだ

つけ続けていた理想論者の仮面を自らはがしていくような日々が続きます。

ある出来事の中では、「若い女性を憎むことにこれからの人生の目標をおこうか」と考えるほどの屈辱感と憎悪の中に。

そしてこの世界は万人の万人に対する競争なのだという攻撃性の哲学が自分の中にあることを自覚します。心の中が「敵意と軽蔑のモヤ」に覆われていました。

しかし、感情の抑圧に回されていた心のエネルギーは、抑圧の解除に伴って、内面の力として、自ら湧き出る感情のエネルギーとなって回復してきます。

やがて次第に私の中で敵意と軽蔑のモヤが消え、自分の心の中にある幾つかの断片的な感情の構図が見えてきます。傲慢なナルシズム感情への確信と、それとは全く対照的な、自分はみすぼらしい人間だという被軽蔑感。自分の中のサディズム的性衝動に直面し、その中の暴走色を解除すると同時に、残っていた道徳者的仮面を破棄する時も訪れました。

一方で私に、あの下級生の子に対する思慕がより強く感じられるようになってきました。心の中で暗い感情が爆発するのを何とか乗り越えた時、私の心にその子の姿が浮かんできます。そして今までより鮮明に、その子への愛しさを感じるようになって行きました。

大学3年の終わり頃、心の底の感情をふさいでいた、最後の蓋が取り去られたようでした。

それは、人生に対する深い絶望感でした。

もしこのまま自分の容貌の価値さえ失われたら…。
それが最後の〝本丸〟だった。感情は何の意味も持たなかった。感情を材料にしていたのは、〝人生が自分に強制されたから〟にすぎなかった…。
僕にとって本当は人生など何の意味も持っていなかった…。
私は特に大きな感情も感じることなく、ただ自分の中に浮かぶそんな思考を漫然と眺めます。
その底にある、本当の心の闇の姿を知らないまま…。

内面の嵐への船出

大学4年が始まろうとする頃、私の自己分析の歩みももはや行き止まり状態に近づいていました。実際、普通の日常生活の中だけでは、それ以上深い内面へ近づくための誘因が尽きていたのです。
傲慢のナルシズムと被軽蔑感という感情の構図をいくら眺めても、答えは出ません。代わりに見えてきたのは、人生への深い疑問…。
精神分析によって「自己の内面を統合する」ことへの絶望感のようなものが流れ始めていました。

大学4年の授業が始まり、私は空虚感の中で大学の教室へと向かいます。きれいな女の子を目当てに、さまようようにクラス選択に思い悩むだけの自分…。そんな自分があの下級生の子にはふさわしくない男だという自己嫌悪感の中で。

一週間の授業がもう一巡しようとしている木曜日でした。

今日まであの子と一緒になる授業はなかった。彼女とはもう会えないのか…。

私は目に映る全ての場面に、あの子の面影を探します。空虚感と行き詰まりの感覚の中で、その日の最後の授業の教室へ。社会学部からも参加が可能な心理学専門授業の一つでした。

春の嵐のように、空一面がにわかに曇って、大粒のどしゃ降りが音を立てて地面を打ち始めていました。鮮明に記憶に残っています。

席に着いて、親しい新3年男子達と話していると、その子がやってきて、友人と熱心にお喋りし始めます。

その瞬間、私は回りの空気が明るくなったような気がしました。暗い空とは対照的な、明るく暖かい雰囲気の教室の中を、ずっと心臓の鼓動と緊張感を感じながら授業を受けます。授業が終わると、その子は演習チームが一緒だったもうひとりの女の子と、何か嬉しそうな表情でこっちを見ています。私は気づいたか気づかないかのような素振りだけして、背を向けて出て行きます。何かを偽ることになるのが恐くて、そうしかできないと感じながら。

また彼女と会える。私はそのことを、疲労感の中で感謝します。

行き詰まりかけていた歩みの中で、新たな旅路への扉が開かれました。
それは私の心の旅の中でも特別な期間となった、激動の8か月、内面の嵐への船出だったのです。

5
章

解かれたパズル

（大学４年４月～５月）

感情パズルの迷路の中で

大学4年での授業が始まり、私は再びあの下級生の子と同じ授業で会える時間を持つことになりました。それからの私は、もっぱらあの子への感情に取り組んでいきます。

私にとって、恋愛は今まで空想の中でのみ可能なことでした。それを現実の世界での行動とするには、私の前にはあまりにも深い深淵のような不安があったのです。

しかしもうそれでは済まされない。空想の中で抱いた彼女への愛情は、この現実という世界で果たして存在し得るのか。それにこれからの自分の生き方がかかっているかのように。

私はすぐに空想と現実のギャップを思い知ります。

頭ではあの子に笑顔で手を振る自分を描きながらも、現実には緊張し、体が硬くなって、あの子に見つかるまいとして別の方向に向かう、みじめな自分。泣きたくなるような怒り。

根本的には自分は、彼女に認められるだけの価値のない、中身のない人間だと、僕は感じているようだ。僕が持っている、自分の容貌についてのプライドや、いかにも落ち着いた態度でいようとする態度は、それを隠そうとするものなのか…。

そうした後で私をおおい尽くす、離反的な感情。自分から他人に愛想良くあいさつしたり話しかけたりすることは、内心の自信のなさを表す卑下的行為であり、軽蔑に値するものなのだ。

この気分にとって、彼女に何かの働きかけをすることはあり得ない。ただ彼女を無視するしかない…。

私は頭の中で、あの子とはもはや他人でいることに徹する自分を思います。そうしてあの子と同じ授業に出ると、再び、頭で考えたこととあまりに違う自分を知るのです。

自分は彼女に対して悠然とした態度など取れない…。自分は彼女をこんなにも求めている…。

そして私はあの子が最近口紅をつけ、服装のセンスも大分良くなったことを考えます。

それはもしかしたら、彼女が誰か男とつき合っているのではないか。自分が授業中に彼女をこんなにも気にしていることに、彼女は嫌悪感を抱くのではないか。それをめぐる自分と彼女の、互いへの敵意のイメージ…。

一方で、あの子が今まで自分に見せた純真な表情の記憶が、私の心を揺り動かします。彼女も僕のことを思っているのではないか。それに応えることで実現する愛の世界の幻想。その愛を壊したのは自分だという怒り…。

私の感情はあまりにも混沌としていました。

自分のどの感情を信じればいいのか分からない…。

感情パズルのミッシング・リンク

私はやがて、自分が偽りの愛情への激しい嫌悪感を抱いていることを自覚します。幼少期から、誰が優しさを示したとしても、本当には自分のことを気づかってくれているとは感じられなかった。〝自分勝手に愛しているだけ〟と感じた。

自分はそういったものにかなり激しい嫌悪と怒りを感じている。今もそうだ。自分勝手に愛情を示す人ほど嫌いなものはない。そんなものとは全く違う、本当に愛し合うことを、自分はこの上なく純粋なイメージで理想像にしている：。

そうして私は、他人の愛情関係が偽りのものだと激しくあら捜しをする軽蔑衝動が自分の中にあるのを、はっきりと自覚するようになります。

私の感情は、まるで回転灯の映像のように、変化を繰り返していました。

しかしそこには、ミッシング・リンクがありました。私自身には、それが盲点のように見えていません。

ある日見た夢の中に、ミッシング・リンクが明瞭に示されます。

彼女が「わたしは優越感にひたって人を軽蔑することはありません」と言う。僕は「そんな君が一番

好きだ」と。すると彼女は当惑した表情で、「それならなぜ今まで無視して来たの」。僕がそれは大した意味はないと言うと、彼女は「慕い続けていた人に好かれるなんて」と喜びを表して、僕たちは抱き合う。

兄は僕に対して、一人でばかりいないで人と一緒に楽しまなければ駄目だ、と批判の言葉を口にする。しかし僕が彼女と一緒にいるのを見て、口をつぐんだ。

そんな夢です。

私があの子を好きでいたのは、何よりもあの子の純粋性でした。「優越感にひたらない」「人を軽蔑しない」という理想像があったのです。女性としての魅力もあり、その理想の具現者である彼女を手に入れることで、自分に向けられる非難や軽蔑をはね返し、自分の優位性を挽回することができる。そして彼女は辛い心で自分を求めている。

全てが、私自身の衝動ではなく、状況がもたらした結果として映し出されていました。

そこにぽっかりと抜けたミッシング・リンクとは、彼女を手に入れることで優越し、人を見返す勝利を果たそうという、私自身の自分本位な衝動です。

私は決してその衝動を意識上では体験しません。しかし感情を含まない空想まで含めて見ると、明らかにその意図性が意識下にあるのです。

つまり、私が最も激しく嫌悪し軽蔑していた「自分勝手に愛情を示して利己的な満足を得る」人間の

姿とは、まるで写真のネガのように、私自身がそれとは意識しないままの、私自身の姿そのものだったのです。

私自身はこのパラドックスを全く理解していません。しかし自己分析がこのように進む時、頭で理解するより先に、心の底はそのパラドックスに気づき始めているのです。やがてパラドックスが破綻する時が訪れます。

解かれたパズル

私はこの頃、日常生活の中での制止感が大幅に減っているのを自覚しました。笑うことに、つぶやくことに、きれいな女の子の方を向くことに、と。精神的な安定感を感じる時間も増えてきました。

それは同時に、今まで近づけなかったものへと近づく、内面の力が揃ってきたということでしょう。ごくちょっとした出来事を糸口に、私の中に置き去りにされていた感情がいよいよ姿を現すようになります。

あの子と同じ授業が始まる前の空き時間のことでした。

私は図書館にいて、近くにアベックの男女学生を見かけます。男子の方は、女の子の顔をのぞき込んで、さも優しそうな、でも本当はそうではないような表情を絶えず浮かべている。女の子の方は、男の顔を見ずに、少しうつむきかげんで、男の問いかけに時々うなずく程度。

私はこの男子に、かなり激しい軽蔑を向けていました。ずうずうしい態度だ。女の子の方では内心で嫌がっているのではないか。男は、自分本位に女の子を愛しているだけであって、相手の本当の気持ちなど考えてやれる余裕がないのだ。

その直後でした。

「同じ軽蔑は自分にもはね返ってくるのではないか」。その衝撃的なひらめきのような感覚が私の体を貫き、私は茫然としました。

この軽蔑が、あの子に近づこうとする気持ちと対立し、引き止め、また現在も引き止めているものではないのか。では、彼女に対してなら自分の離反を破ってもいいという気持ちに、僕はなぜなったのか。彼女が僕を求めているという感情は、そのためにだったのか！

この時、パズルが解かれたようでした。

もし彼女が自分を好きであれば、自分が彼女を求める気持ちも受け入れられる。しかしそうでない場合、自分は彼女にとって、回りの全ての人間にとって、そして自分自身にとって！いまわしい存在として姿をさらさねばならなくなる。

彼女に近づけるという「行動力」が自分の成長だと思っていた。そうなれば実際に彼女が自分を好きでいるかどうかは大した問題ではないと。

それは間違いだった。自分の破滅をかけるような問題として、彼女が自分を好きでいるかが問題にな

っている。彼女への行動が制止されていたのは、あまりにも当然だ…。

パラドックスの底から現れた異形の感情

私はこの時、自分に向かう軽蔑を実際に体験したわけではありません。しかしそれがあまりに破滅的であることを、私の意識が感じ取ったのです。

私はもはや、自分があの子にどんな感情を持てるだろうかと考えることさえできず、頭の中が真っ白になったような感覚の中で、その教室に向かいます。

解かれたパラドックスの底には、ぽっかりと穴が開いていたようでした。そこから、見慣れない獣のような感情が顔を覗かせます。

あの子はいつにも増して綺麗な感じでした。私の方を見る様子もありません。

その時、私の心の中に突然、乱暴な感情が湧き立ちます。自分の方を向かない彼女を恨み、力づくでも彼女を連れ出そうとする衝動。それは私がそれまでの生涯で抱き続けた自己像に最もそぐわない、暴力的な衝動でした。

私は自分の中に現れたその感情に驚愕し、恐ろしさを感じます。この時の私の心の中の複雑さは、今では思い出すこともできないほどのものだったと思います。私は授業の間その内面を抱え続けることに心身共に疲弊憔悴しました。

とにかく今のままの自分でいることはできない。そう考えるのがやっとでした。

離反への逃げ込み

その日の夜、私は寝床に入っても、自分の中に現れた衝動と自己像との食い違いに、めまいのするような嫌悪感と不安感を感じます。

翌日、私の感情は、まるで要塞に逃げ込んで自ら徹するかのように、全ての他人に背を向ける離反感情へと向かっていました。そうなりたいと願った自分の姿は自己欺瞞の上にあった。

私の心は、自分の本心へと向かうことを強く求めていました。自分は内面の弱さを、彼女に向けていたのだ。もうそれは続けるべきではない。自分はまだこの暗い衝動を克服することはできないのかも知れない。今は自分の中の絶望感に取り組むべき時なのかも知れない：。

そして私の心を、離反感情がおおい尽くします。

自分は今、他人への軽蔑と、他人から向けられる軽蔑と嫌悪への予感、それへの反抗、そして自分自

身への軽蔑、そういったものを背景とした離反の中に、身を固めようとしている。空想の中で描いた彼女との愛の関係も、今となっては異質に思えてくる…。

そして私は、自分が何に絶望して生き始めたのかを振り返り始めます。

純粋で優しい愛情の持ち主であるという理想に僕は挫折し、自分の外見が他人に与える影響を心の中で当てに生きる心を持つようになっていた。それは、他人との信頼関係が永遠に拒否されるという意味を持っていたように思える。全ての人間が潜在的に、自分に敵意と非難を向ける存在になるという意味を…。

来歴の遡りの始まり

同時に、私の中で、来歴の遡りが始まっていました。自分が純粋な愛に挫折したのはいつからだったのか…。

私の来歴への遡りは、既に一度、前の大学から編入学試験を受けることを決意した時、起きていました。高校時代、心の変調から躁の時代へと立ち上がった自分を取り戻したことです。

私の中で、来歴の遡りは、自分で意識することなくその先へと向かうように、中学の頃の自分の記憶へと向かっていきます。

僕の中には、自分の容貌によって女の子に注目させようとする衝動があった。それでいながら、僕は〝恋愛のことしか頭にない〟彼女達に軽蔑を向けていた。

そうなった根底には、自分が女の子と自然に親しくできないことへの挫折感と屈辱感があったように思える。僕は中学の時、心の中では恋愛至上主義のような感情を抱きながら、外では女の子にぎこちない態度しか取れない自分をじれったく感じた。男の子のような活発な女子に対して、きさくで親しみやすい自分を演じようとしたこともあった。だが何となく気後れから、自らその「試み」から「退却」した。以後その女子からは自分が「変な男」という感じで見られるという感覚を僕は持った。

僕は、自分自身が理想的な姿になれなかったから、その原因を他人の中に求めた。僕は自分の不満感を、回りには愛するに値する人間が少なすぎるからだと自分に説明した…。

自己の確立への反攻

自分が他人に向けた激しい軽蔑感の原因は、自分自身の中にあった…。

それを自覚することは、今まで人への軽蔑によってごまかしていた自分自身への軽蔑を、もはや防ぐ手立てなく身に受けることを意味していました。

まるでそれを見越すかのように、私の心の中は、冷淡な苛立ちの気分が広がっています。

親不知が影響した私の顔立ちの歪みは、その頃が最も目立つ状態になっていました。実際、その頃の

自分の写真を見ると、ちょっと別人の趣きを感じるほどです。

髪を切った日、私は、自分自身で精彩を感じられなくなった自分の容貌に、激しい苛立ちを感じます。今までに自分が軽蔑した人間達への軽蔑の全てが、同時に、自分自身に向かってくる…。僕は自分自身に対して、どうしようもないほどの嫌悪感を抱いているようだ…。

しかしこの時、私の中でターニングポイントとも言うべき変化が起きていました。一度、完全に偽りのない自己の本心に立つことで、そこから死にもの狂いで自己を確立しようとする意志が生まれていたのです。

この、どうしようもないほどの自分への怒りに取り組むためには、どうすれば良いのか…。

今まで、「自分の容貌など気にしない」ことが望ましいことだと感じていた。だが結局僕は自分の容貌を気にしているし、美貌であることが自分にとって重要なことだと感じている。この気持ちを断念することなどでは全くないはずだ。

自分の容貌を気にする自分などあの子にふさわしくないと考えていた。だが「容貌など気にしない」ことで、代わりに性格の豊かさが与えられるわけでもない。ならば僕は彼女に与えることができる自分の価値としても、外見を良くする努力をすることの方が正しいように思える。かなり目立つようになってしまったこの顔の歪みは、とにかく何とかしたい…。

そうして私は、歯医者に通い、親不知を抜き始めます。多少期間をかけ、4本とも抜くことになりました。中には結構大変なものもあり、歯科大学病院を紹介されて処置を受けたものもあります。

表向きは親不知が出て来た痛みという健康上の処置でしたが、私の心の中では、実は自分の容貌を自分で何とかするという意志によるものでした。実際、その後私の顔立ちの歪みも消えて、今の大人の私の顔になってきたという経緯があります。

私はこの頃から同時に、服装にもかなり凝るようになります。「躁の時代」が破綻してからの私の服装ときたら、生涯を通して最も地味なものだったのです。

内面を侵す者への怒り

自分自身への反抗者のような苛立ちの気分の日々の中で、私にさまざまなことが見えてきました。対人関係を良くするためには、「相手を個人として尊重して関心を持つ」ことだなどと考えていた。だがそれも結局、他人へのこの離反感情を抱えたまま人に受け入れられようとする、無駄な思考だった。この感情でいる限り、他人への関心など持てるはずはないのだ。

そして私は、他人への苛立ちの中に、今までとは違う怒りが含まれているのをはっきりと自覚するようになります。それは軽蔑されることへの怒りではなく、自分の内面に踏み込まれ、内面を侵されることへの怒りでした。

やがてある日の夢の中で、この怒りが爆発へと達したようでした。自分の内心の恋心などをつづった日記を、昔の友人に見られ、それをごまかそうとする友人への怒りは殺意とも言えるほどのものとして映し出されていました。

その夢を一種のカタルシスにするかのように、私の中で苛立ちの気分が収まっていきます。

自由の獲得

この日々をすごす中で、私の中に「自己の重心」というものが生まれ始めていました。偽りのない自分の本心に立った上で、この現実世界を歩むための基盤とも言えるものです。

あの下級生の子と2週間ぶりに同じ授業に出た日、私の心はもう揺れ動きませんでした。離反の要塞の中で自分が手にした大切なものを、不意をつかれて手離さないよう、無意識の中でしっかりと握りしめていたのです。

しかしその翌日、研究室を出て歩きだした時、私は期待せずにあの子がやってくるのに出くわします。

私の心は無防備でした。あの子も私には気づいていたでしょうが、もはや私から親しみある行動が出ないことを諦めたかのように、少しうつむいてそのまますれ違っていきます。

あれは彼女だった。僕との関係がもう存在していないことを受容してしまったような姿だった。いや、表情がよく思い出せない…。

私の心の中は再び、自分自身への怒りと苦々しさにかき乱されます。あの子への自分の感情を否定して、離反感情の中に閉じこもろうとする衝動が、再び私の心を動かします。

しかし私は既に、離反の要塞の中で得たものを持っています。

あの子への愛情、そして離反の要塞の中で自分が手にしたもの。この2つを自分の目の前に並べるかのように、私は自分に問います。

今日起きたことの意味は何なのか。僕は彼女への感情を、自分の心の中の、自分にとって最も大切な部屋の中に入れて扉を閉め、彼女への現実的な行動への意欲を全て失いつつある。彼女への行動を放棄すると同時に、彼女への感情そのものまでも否定しようとしている自分を見出す。

何のために？

自由。

自由のために愛を犠牲にするということか。様々な非現実的な感情を結びつけることになった、純粋な愛情……なのだろう…。事実今の僕にとっては、たとえ彼女への愛が本当のものであったとしても、それを実現しようとすることよりは、内面の自由を保つために彼女への感情を否定することの方が受け入れやすいことに思える。そして、こうした自分が彼女から愛されることはないだろう。

そうして彼女への行動を放棄したあとに現れてくる、彼女の方から僕に愛を示す幻想…。
しかしその空想の行き着く先は、彼女の愛に貪欲な笑みを浮かべている自分…。
僕はそれに嫌悪感を感じた。そして彼女からの愛を受け入れることができず、葛藤に苦しむ自分…。
彼女が果たして僕を好きだろうかという不安は確かにあるが、本当に信じることができないのはこの自分自身なのだ！

あと半年…。長かった学生生活が、終わりとなる時が近づいている。
決して中途半端なままで終わらせたくない。卒論も、彼女への自分の気持ちにしても…。

「心の自由」。
それこそが、私が来歴を通じて守り通そうとしていた、最大のものでした。それ以外のいかなる価値を前にしても、私は心の自由を失うことよりも、他の価値を失うことを選んでいたのです。
もう私の中からそれが手放されることはありません。そしてそれを失う不安から切り捨てていたものへと、私は近づいて行くのです。

6章

自己の本質への接近

（大学4年6月）

空っぽだった宝の箱

心の自由の代償として失っていたものを探しに行く。その方向へと歩み出した私の気分の開放感は、それまでになく大きなものになっていました。自分が「明るい性格になっている」と感じたほどです。それはやはり必ずしも事実ではなく、開放された気分を仮面の衝動が捉えた表れにすぎませんでしたが。

そんな中、ある気づきが、前へ進もうとする私の意欲を大きく促します。

この数か月、僕は、あの子や人々に近づこうとする感情に含まれる自己欺瞞と拘束に抵抗し、その衝動を放棄してきた。いや克服した。それは間違いではなかっただろう。そしてそのことが、自分の内面の純粋性を守るためのことであったのを、最近になって理解した。

だがこの、自分が守ろうとしている純粋性とは、何の純粋性なのか…。

その瞬間、私は奇妙な感覚に捉われます。

私が守り続けていた純粋性の中身は、空っぽだったのです。ようやく守り通した宝の箱を開けたら、空っぽだった…。そんな感覚でした。

自分が求めた自由とは、自己嫌悪からの自由だった。自分の本当の感情のための自由ではなかった…。

この自覚は私に、自分の内面の感情に忠実であろうという意欲を生み出していました。たとえそれが多少危険なものであっても…。

自己の本質への到達

私の心をまず占領したのは、現実生活という拘束のない、行きずりのような情事への衝動でした。愛を求めながらその拘束を嫌悪する人間の、閉ざされた情愛の衝動。それが、別の授業で見かける美少女へと向けられます。あの下級生の子の優しさはむしろ重荷だと、私はその衝動の中で感じている自分を知ります。

しかしそんな空想を抱いても、いかなる現実行動を考えても、偽りの演技をする自分への嫌悪を感じる自分を、同時に感じます。

そうして閉ざされた情事の空想からも退却した時、私の心は一挙に深い空虚感に向かっていました。女の子に魅力を抱かれる存在だという尊大な感情を抱きながら、目移りしているだけの自分。そんな自分を気にもとめずに過ぎていく人々。同じことが繰り返されていく…。

空虚である。あんな情事の空想に耽ったのも、こんなに空虚だからこそ必要なことなのだ。

結局自分は、あの子に近づくために頼りにすべき自分の感情というものを、持っていないのだ。自分に、彼女に近づくことなど、できないのだ…。

そうして自分の中の無力感をそのまま感じるようになった私の意識が、いままで表面的な理性で隠していたかのような、深い感情に到達します。

私は大学のキャンパスで、前方にあの子が友人と一緒に歩いているのを見ます。自分がもうすぐ彼女らを追い越す。彼女の方を向いて、優しい表情で「さよなら」とあいさつしようか…。もうあの子が目の前に来ています。

しかし震える私の心は、私の体を別の方向へと歩かせ、私はベンチに座り、全身の力が抜けているのを感じていました。

もう自分への怒りは感じませんでした。ただ恐かったために彼女に近づくことのできなかった自分を、私は受け入れていました。

そのまま帰った私の心の中に、あの子へのあまりにも強い思いが湧きます。私は駆られるように、ホーナイの愛についての記述を読みました。自分の心の問題を克服しようという意志の中で。

それは、自己の弱さ、そして強さ、その全てをも委ねた愛の感情でした。他者との競争もない、敵意も軽蔑もない、そして愛が報いられないことへの怒りさえない、愛に身を捧げようとする感情でした。

翌日、私の眠りは浅く、朝5時の静寂の中で目が覚めます。

心の風景がさらに一変していました。もの悲しい気分の中で、18歳頃の美貌の自分へのノルタルジーが湧き起こってきます。彼女への僕の感情は何だったのだろう。それは愛ではなかったのだろうか…。内面の純粋さと優しさ、それをそのまま表したような美貌…。自分はそうであるはずの人間だった。現実がどうであろうと、〝僕〟はその姿そのものだった。それは〝自己像〟と呼べるほど浅はかなものではなかった。

僕は時としてそこから遠ざかる。自分がそんな〝理想化された自己像〟などというものを持ってはいないかのような態度を、現実的なものだと思おうとした。確かにそうなのだろう。でも僕はこれからも幾らかの間は、この最も大切な〝自分自身〟と一緒に生きて行くだろう。今はそれだけしか言えない。でも僕はこうして、自分自身の本質的な部分に近づいている！

ホーナイを勉強し始めた当初、私は、「非現実的な自己理想化像」を追うのをやめることが、この取り組みの方向性だと考えていました。

しかしそれは皮相でした。その意識的努力は、私を何も変えませんでした。

私は逆に、それが現実的であろうと非現実的であろうと、自分の心の中にあって、自分が本当に追い求めたものへの感情の中へと、心の声に引かれるまま深く没入していきます。

それで、正しかったのです。

自己への傍観者の終焉

私は、自分で自分の感情を観察する「自己分析」を越えたものへと踏みこんでいました。自分を観察しようとする自己では届かない、より深い深層へ。

これは私に、大きな「治癒感」をもたらしていました。ひとつの段階が終わった。その実感を後日はっきりと感じました。

今の自分は、自分の感情を他人のように観察するのでなく、感情がそのまま外に表現できるようになっている。僕はもう自分自身に対する傍観者ではなくなった。僕はもう「心理障害者」ではない！

私は、今まで人に積極的に接することを妨げていた、自分の中の離反感情が「解決した」、とさえその時思いました。

しかし人を前にすると、自分に対する非難や嫌悪が向けられるという感覚がしきりとします。それはなぜだろうと、私はいぶかります。

実は、この後に私の中であらわになる感情を心の底が「見越して」いたのなら、自分が非難されるという感覚は当然のことだったのです。

愛と敵意の迷走

自分がもはや健常人だというような開放感の中で、私の中にすぐ現れた感情は、戦闘的な愛の情熱でした。この後の私の心の動きは、まるで現実から離れた世界の中で激しく混迷するような様相を示すようになります。

その日、一学年下の学友とのお喋りの中で、あの下級生の子の話題を聞きます。本当に育ちの良い子ですね。新歓コンパで潰れた男の子を最後まで介抱していたのがあの子でした。最近服装が派手になったという噂です。

私の心は勝手にある状況を思い描きます。良家の子女である彼女は一流エリートとの結婚を定められている。しかし内心では僕のことを思っている。私の心の中に、あの子への愛への、戦闘的な情熱が燃えます。ライバルになる男がいるのなら、戦いも辞さない、と。

しかし私の理性は、それが現実のことではないという事実も保ちます。この感情を行動化することはあり得ない。ならばこの情熱を秘めながら穏やかな態度であの子に近づくのか…。そうしようとする自分もやはり皮相な見せかけであるような、苦い自己軽蔑感によって妨げられることを、私は感じます。

自分の全ての現実行動がそうやって自分自身に挫かれてしまう…。とにかく強くなりたい。これが自分自身なのだという確信をもって行動できるようになりたい。そうでないものは捨ててしまってもいい。

やがて私の感情は平坦に戻り、あの子への強い感情も見えなくなってしまいます。自分は成長の代わりに愛を失ったのか…。

そして私の中に現れたのは、何とか「普通の人」として彼女に近づこうとするような思案です。

暑い夏が近づこうとしていた日の朝、私はあの子に暑中見舞いの葉書でも送ろうと思いつきます。

「最近あまり親しく話したりできませんでしたが、これからもいい友だちでいてくれますか」……。

しかしそれはもはや、自分自身でいることに絶望した人間の、最後の試みのようなものでした。

その日の午後、私の心の中はまるで急激な天候の変化のように、朝の気分とは全く異質な孤立感情に覆われていきます。

自分は他人に対して敵意と、とげとげしい軽蔑感を向けている。苛々した気分の中で、自分の美貌によって軽薄な男子学生や女の子達を見下してやりたい衝動。

孤高の一匹狼の気分の中で、少し面識のある真面目そうな女子学生が来るのを見ます。とっさに感じる、明るく親しそうな自分を演じることへの拘束感。その女子学生は気づかない感じで通りすぎ、今度はそれを「故意に顔をそむけられた」と感じている自分…。自分自身への嘲りの笑いが起きます。

その日の夜、あの下級生の子を思い浮かべた時、私の心の中には苦しみが流れ始めていました。

私の感情は急速に沈んで行きました。結局のところ、自分が駄目だったんだ…。

人に積極的に接しようと思った僕の感情は、にせものだった。恋愛についても、もう自分はこれから自分一人で生きていくという、諦めの感情へと向かっている。だが同時にそこには、〝自分自身に戻っ

てきた〟というような、一種の落ち着きがある…。

混迷の中に消失する感情

離反の要塞で心の自由を獲得してから、ここに至る経緯は、「愛の形態の模索」とでも言えるような時期だったと思います。

心の自由の代償として失っていたものとは、愛でした。心の自由を失う危機は去り、自分が持ち得る愛の形態の模索へと歩みだす。

しかし私のその試みの全てが、自分自身によって挫折したわけです。離反する者の閉ざされた情愛も。戦闘的な愛の情熱も。平凡な温厚を装った卑下的な親愛も。

向かうべき方向を見失った人間の姿が、私の心に現れ始めていました。

翌日、あの子と同じ授業のある木曜日でした。

もはやあの子に近づくことへのあらゆる気持ちを放棄した中で、教室に向かいます。弱い自分…。自分に優しくしてくれる人とだけ生きていきたい…。そんな感傷的な気持ちの中で。

私はあの子の方を向くことさえ恐くてできないのを感じました。身じろぎもできないような感覚の中で、ただ、思いを抱き続けていたあの子のイメージを確かめようとします。

しかしそのイメージの気配が感じられなかった時、私の中に、思いもかけない衝動が湧き起こってい

ました。あの子を軽蔑し、蹴落とそうとするかのような感情です。

僕の心の中にある彼女のあの高い声は聞こえない。あのしゃがれた低い声が彼女なのか。彼女は変わってしまったのか。純粋さを失い、自己中心的な、僕が軽蔑する他の軽薄な女の子たちのように…。

なぜ自分はこんなことを考えるのか…。そういえば僕は小学校の初恋の時も、初めの頃癪に感じてその少女を見下そうとする気持ちを持った…。

何とか気を取り直して、もっと現実的にあの子を見ようと考えます。すると浮かんでくるのは、彼女を蹴落とそうとした自分に対抗するかのように、私に敵意を向けてくるあの子のイメージでした。

もはや、感情の混迷に思考がついていけないような感じでした。

夜、日記に向かいながらその日のことを振り返ります。僕は今どう感じているのだろうか…。もはやはっきりしないのだ。酒を飲んでいるせいか…。あの子に感じた全てのことが、非現実的なことだったという気もしてくる…。

実は、こうした私の感情の迷走は、ある強い感情が抑圧されたままであったのが理由でした。

それが私の心の中で暴露される時が近づいていました。

あばかれた「愛への嫉妬」

抑圧されていた感情とは、苦々しい、激しい嫉妬です。

嫉妬は人間が体験する、最も嫌な感情のひとつです。人は嫉妬の感情の苦々しさを忘れ去ろうとして、しばしば、「そんなもの！」と相手の価値を否定する姿勢をとります。それは同時に、人の中に、価値あるものを否定した結果としての「人生の空虚」と、そして価値ある世界への敵対関係を生み出してしまいます。そして決して捨て去れるものではない人間としての欲求は、相手を破壊衝動の中で欲するという「サディズム」の方向へと、人の情動を変形させてしまいます。

精神分析の中で、人は別の方向へと向かうことができます。

それは、再びこの感情へと還り、そしてさらに、その感情の大元となった、自分の願望へと還ることです。そしてその願望を、「与えられ満たされる」ものではなく、自らの全ての可能性を尽くして努力するものと捉えなおすことです。

それが彼に、人生において彼が本当に求めていたものへと近づき、やがて今まで彼の内面においては彼を追放したものと位置づけられた世界へと還る、和解への道を開くのです。

激しく迷走する心の中で自分自身の感情を見失ったあと、私の心の中で次第にはっきりしてきたのは、自分が「開かれた心」を持てない人間だという、悲嘆の色濃い自己嫌悪感でした。

親しい学友を自宅に招いて談笑している時の、自分の内心の緊張感。それを相手に見取られることへの不安：。そんな自分のことを友人に訴えて、理解を求めようとする自分の姿を思い浮かべます。僕は

今友情や愛情について悩んでるんだ。皆表面上は打ちとけているように見えるけど、本当のところ彼らにとって人間関係って何なんだろう……と。

しかし私はそう「分かってもらった」ところで何の解決にもならないことを、同時に自覚します。なぜなら、打ちとけて落ち着いた様子で振る舞う姿の「基準」を持ち、それを自分に押し付けているのは、他ならぬ自分自身であることが分かっていたからです。

やがて、打ちとけて楽しそうにしている男女達への羨望の感情を自分が持っていることを、さらにそれは激しい嫉妬の感情であることを、私は知ることになります。

同時に私は、私自身の心の深い奥底へと、また一段階降りて行くのです。

羨望の感情の兆候は、実はすでに、あの下級生の子を蹴落とす衝動が現れた前の日に、にじみ出し始めていました。しかし私はそれを、漠然とした自己軽蔑感としてしか感じることができませんでした。

その数日後は、輝かしい感じで楽しそうにしている女の子達を見て、その子達への何かの羨望感と、彼女たちに近づきたいという気持ち、そして同時に流れる何かの挫折感を自覚します。

そして再びあの下級生の子と同じ授業の木曜日へ。

午後になる頃から、私は自分の内面が一段階さらに切迫し始めているのを感じました。漠然とした絶望感の中で、女の子を自分に振り向かせたい衝動、きれいな女の子に近づきたい衝動を感じます。

そのあと私は偶然たて続けに、仲の良い男女学生のカップルを真近にします。そのどれもが、優しく純粋な愛情を交わし合っている感じです。それを前にして、私の心の中に、まるで大きな地殻変動のように、巨大な感情のうねりが起こります。

最初は午後の一般科目の大教室の中で。私の前後とも、そんな感じのカップルでした。私は彼らを軽蔑することができない自分を感じました。彼らの姿が羨ましいものであるのを否定することができませんでした。同時に、何かの巨大な感情のうねりがこみ上げてきます。私はそれにいたたまれず、教室を抜け出します。一体何がこみ上げていたのか。今の僕にはそれをはっきり表現することはできない。直後の日記にそう記します。

それが、私の中で嫉妬の感情が否定され続けていた最後でした。

次の場面は図書館の中でした。合い向かいにやってきて座ったのが、またしても男女学生のカップルです。仲の良さは恋人同士に近い感じでした。女の子は、はっきりした目鼻立ちにあどけなさの残る、あの下級生の子と似たタイプ。マリンなんとかというサークルの、何かの葉書を書く作業を2人で楽しそうにしているのが見えます。少しして女の子が男の子をじっと見ながら「じゃあね」と優しくささやき席を立ちます。

その時私は、自分の感じている感情が何であるのかをはっきりと自覚しました。

僕は彼らへの激しい嫉妬を感じていた：。それは羨ましいという感情を超えていた。彼らへの敵愾心（てきがいしん）は感じなかったが、同じような人間関係を持つべきであった自分にそれがないことへの、激しい怒りだ

った…。

堕ちていく自己像

苦々しい孤独の中で、愛し合う男女を激しく嫉妬する男。それが自分でした。自己分析を通してなろうとしていた、浅ましさのない、落ち着いて、優しく、純真で、おだやかな、心を開いて人とのつながりを持てる人間…。そうはなれませんでした。それとは対極の姿が、自分の現実だったのです。

マリンなんとかというサークル…。それは彼らのようなカップルを出会わせる働きをしているのだ…。中学の時の自分がふと浮かんできます。男子と女子が一緒になって遊んでいるのを前にして抱いていた同じ感情。それは孤独と羨望でした。

その日の終わり、あの下級生の子は授業に来ませんでした。

教室の中の私は、全ての他人に弾劾(だんがい)された人間になっていました。彼女は来ない…。彼女が僕を慕っているという空想も、勝手な妄想でしかなかったということだ。彼女が来ていないということは、僕が彼女の恋人にふさわしくないという烙印であり、この授業はもう魅力がないということなのだ。その烙印は、今まで僕が軽蔑してきた他の女の子も同じように、僕の不純さに対して下したであろう烙印なのだ…。

翌朝、私は漠然とした絶望感の中で目を覚ます。

自分は人々の中で生きていきたかった。でも人に近づくことに抵抗を感じてできなかった…。

感じたくて感じたわけではない。僕は自分が特別に注目される人間だというううさんくさい態度でいたのか。そんな自分に、人々の中で生きていく資格などないという声が聞こえてくるような気がする…。

私は苦しみと、なんとかしなければという焦りを感じました。絶望感へと堕ちていく自分を、何とか助け起こそうとします。そもそも自分はこうした暗い感情と闘うためにこうして来たではないか。今はこの自分を受け入れることが必要なのかも知れない…。

今は心を休めよう…。

夢の声

絶望に堕ちようとする自分を、私は何とか持ちこたえます。相変わらずの容貌への自意識の中で、この日は何とか自分に美貌を感じ取れたこともあります。

私の心の中に、あの下級生の子への狂おしい思慕の情が湧き起こり、でも彼女に近づいたところで破壊的な結果になる…。その葛藤が私を苦しめます。そして再び感情が見えなくなります。

しばらくは自分の感情を静観しよう…。私はそう考えます。

それでも、あの子への感情が、自分の生涯を通じてもう2度とめぐり合うことのない、本当の愛であ

るように、私には思えてくるのです。彼女への狂おしい思慕の裏には、彼女以外にはもう愛せる人に出会えないという、絶望感があった。その絶望感そのものは克服できるかも知れない。でも、これは僕にとって、人生で2度目の深い恋であり、あの初恋から10年を経て生まれたものなのだ…。

あの子に会う可能性のある次の木曜までの、合間の時間が訪れます。
感情の流れが、ぱったりと止まります。

夢を見ました。日曜の朝でした。
すねて、回りから孤立している男の子がいました。私はその子に、「意地を張っていてもどうにもならないよ。そんな意地は捨ててしまっていいんだ」と声をかけます。でもそれだけです。
別の男が、その男の子に、ある話を聞かせてあげます。それは悲しい物語でした。ある実験の中で、ある少年が病原菌に感染してしまう。回りの人々は、表面上では少年に悔やみの言葉をかけたけど、少年のために泣いてあげる人は誰もいなかった。そんな話でした。
男の子は、その話をしてくれた男に、「ありがとう」と言います。
夢の中で、私は自分のことを考えていました。意地を張り続けて、心を開けないでいるのは、この自分なのだ…。そんなひとりぼっちの自分への、哀れみと悲しみが湧き起こってきます。そこで目が醒めます。
自分自身への哀れみと悲しみの感情は、そのまま残っていました。

涙がこみ上げて来ます。しばらくの間、私は枕を濡らしながら泣いていました。

その夢は、私にあることを告げるものでした。

「自分に還れ」、と。失わされた怒りを捨て、本当に求めていたものへと還るのだ。

私にはどうしていいか分かりません。私にできるのは、ただ泣くことだけです。

しかし私の心はその時、夢が示した方向へ、向かい始めていたのです。

遠く置き去りにした過去へ

週が明け、また大学へと向かいました。目の前から大きな感情が見えなくなり、心が少し現実世界から離れているような雰囲気が流れています。

このまま彼女に近づけないで終わる…。それも甘受しようという気持ちの中で、空想が湧いてきます。彼女は実は僕を慕っている。僕はやがて価値をそなえた男に成長している…。この空想は、何かの報復という意味なのか…。

一方で、あの子と演習チームが一緒だった頃が、なぜか懐かしく思い出されます。制止で身動きの取れない自分。その横で安心し切っているあの子…。

私自身はあまり意識しませんでしたが、私の心に少し変化が起きていました。時折、プライドと自意識を放棄した純真な自己像が現れ、同時に、愛されることへの願望が映し出されていたことです。それ

はすぐに、受け入れられないことへの怒りによってかき消されていましたが。

火曜日は、人の心の中にある絶望感が、私の空想の中に映し出されていました。自分は自己を確立する。一方で、多くの他人は自己を見失った絶望的な人間である。あの子の前で、自分は冷静で強い男になる…。

水曜日、私の気分はやや躁状態でした。たとえあの子と結ばれないとしても、社会人としての自分の将来や家庭生活に、希望の感覚が見えてきます。卒論も卓越したものになる。自分はハンサムである…。ひどい高揚感は、むしろ集中困難と感じられるほどでした。

木曜日、大学へ向かう時、私はやはり漠然とした高揚感の中にいました。しかしすぐ、それはむしろ不安ではないかという気がしてきました。何か戦線に躍り出たという感覚です。

大学の中で、さまざまな感情が点滅するように湧いてきます。服装にこだわる自分が皆から孤立する…。こだわりを捨てて皆の中に帰りたい…。親しみを演じることへの抵抗…。それが表面に表れることへの恐れ。やがて漠然とした絶望感…。一体自分がどうなっているのか分からない…。

そのあとのちょっとした引き金はどれも、私を一歩また一歩と絶望感へ進ませます。ちょっと親しみを感じていた社会学の講師とお喋りする、明朗で快活な自分。しかし講師の「今度一緒に食事でもしよう」という言葉に、体の中を流れる冷たい抵抗感。授業のあと逃げるように出て行く、人とのつながりの持てない自分…。漠然とした絶望感の中で、掲示板のガラスに映る、メガネが少し不恰好な自分の容

貌…。

私ははっきりと絶望感を自覚します。あの子も、自分の幸福への前進も、全てが失われていく…。

何とか気を取り直し、最後の授業に出る前、私はちょっと奇妙な行動を取ります。数日前に注文しておいたテニスラケットを店で受け取り、大学へ戻ろうとしたのです。あの子にテニスラケットを持った自分を見せたいという、淡い衝動からでした。あの子はテニスサークルに所属していたのです。

でも店から大学へと向かう自分が、人目を気にし、ぎこちなくなっているのを感じました。やりなれてない人間が格好だけつけている。そんな目が自分に向けられるような感覚…。私はその行動を諦め、一度下宿に帰りそれを置いてから大学へ戻り、教室に向かいます。心には不安が流れ始めていました。もう何も身にまとわない気分の中で、親しい学友が来ても話しかける気になれず、あの子への感情の中でただじっとしています。この時の私にはもう、現実が現実でなくなっていたように思います。あの子への感情が世界の全てになっていました。

あの子はやはり授業に来ませんでした。

それがはっきりするにつれて、私の心の中に、激しい失意が起こります。

彼女は今日も来ない。それが分かってからの僕の感情は……悲しみ。ただそれだけが見えていたのだろうか…。全てのものを投げ捨てたいというような衝動。すぐに教室から出て行ってしまいたいという衝動。

教室の中で、失意に向き合う時間が流れて行きます。

やがて私は自分の感情を受け入れます。今僕の感情は静かなものになり、僕は今何に対しても無感情な自分を見つめている。今彼女に会えないこと、いや、彼女の姿を見られないことでこんな感情を感じたというのに、なぜ僕は彼女を抜きにして自分の幸福について考えたりすることができたのだろうか…。失意が消え、あの子への感情を受け入れて前に進もうという、静かな意志が生まれていました。

同時に私は、遥か遠い過去に、自分が同じ感情を体験していたことに気づきます。小学校5年から6年にかけての、初恋の少女に向けた感情でした。

僕は、あの子への思慕を抱きながらも、自分の胸の内だけに秘めている自分自身に、ある種の安堵を感じた。それは、かつての初恋の時と同じものだった。その時も相手に恋をうち明けることも、何もしなかった。それでいて焦りなどを感じはしなかった。そんなことをできるとさえ感じていなかったような気がする…。

それはなぜだろうか。今、あの子への感情を自分の胸の中だけにしているのと、同じ理由なのだろうか…。

教室の中を、出席表が回されてきます。私はそこに、あの子の友人の名前の下に、代筆でしょうが、まさしくあの子の名前が書かれているのを見ます。

彼女は来ていたのか?

授業が終わり、あの子の友人が先に帰るのを見ます。彼女は後に残ったようだ。他の人々も帰って行く。最後に席を立とうとすると、白いスカートの女の子が横を通って出て行きます。彼女なのか？　横顔が少しそんな感じだった…。

教室を出て廊下へ出ると、その女の子がいて、目が合います。その女の子はすぐ目をふせます。

その瞬間、現実のあの子のイメージが私の中で消失していました。私はあの子の実際の顔をはっきり思い出すことができなくなっていたのです。

かげろうのように通り過ぎるあの子のイメージ…。それは私が夢の中で追い求めた、自分が愛する美しいものの、漠然とした象徴でした。

夜、あの子のイメージそのものが形を失って消えて行ってしまうような感覚がしてきました。去るものは日々に疎し、なのだろうか。悲しみが流れます。あの子は僕にとって一体何なのだろうか…。

翌日、アルバイトの情報などを見るために、授業のない大学へ行きます。ちょっとした知り合いとすれ違う時の自分の感情の揺れなどを自己分析しますが、現実の人との問題があまり自分に迫ってこない感覚が流れていました。

夜、眠れなくて酒を飲みます。

私の心はある場所に到着しています。

その世界の空気が、私の中にふわ～と広がってきます。それは小学校6年の頃に自分を包んでいた空気でした。

いろんなことが思い出されてきます。自分が空想の中で生きようとした、『レ・ミゼラブル』のマリウスとコゼットの世界：。放課後に残った教室の窓から見た、校庭のプラタナスの木：。あたりは夕方の青白いときだった：。教室には僕と何人かの友人がいて、あの初恋の少女はいなかったけど、美少女の友人がいた：。

本当に透き通っていて、美しい時代だったと思う。あの頃がなつかしい：。

そして私は、初恋の少女と、その少女といつも一緒にいた美少女の、私の小学校時代に輝きを添えていた、2人の美しい少女達の名前を浮かべます。

彼女達が今もこの世の中に生きているのだと考えると、不思議な気がする。彼女達は今、どこで、何をしているのだろうか：。

私の心は、現実世界を離れて、心の奥のある場所へ急速に向かっていました。

遠く置き去りにした、はるかなる過去へ：。

7章

遠く置き去りにした過去へ

（大学４年７月）

自己分析を超えて

新しい大学への3年次編入学とともに開始され、大学4年、再びあの下級生の子に会える機会を得て、あの子への感情の中で本格化した自己分析は、私を予想もしないところへと導いていました。

苦々しい孤独の中で、愛し合う男女を激しく嫉妬する男：。それが私の現実でした。絶望へと堕ちていこうとする自分を何とか支え、ただあの子を思う気持ちの中で前を向くことができる自分を見出した時、私の中に、はるか遠い過去に置き去りにした感情が蘇り、あの子の現実的なイメージはかげろうのように消失していきます。

別れを告げた過去

遠い自分が一瞬蘇ったあと、目の前から問題が見えなくなりました。私は一瞬、自分があの子に近づいてもいいように考えました。

しかし翌日目を覚ました時、その考えももはや力を失っていました。あの子のイメージそのものが、薄れていこうとしているように思えました。愛しく感じたあの子の姿も、もう過去の記憶の中に収めてもいいのかも知れない：。かつての初恋と同じように：。

初恋は私にとって、別れを告げた自己でした。あの「躁の時代」の中で、私は、私自身の明確な意志によって、初恋の時代に別れを告げたのです。

これからの自分の可能性の実現のためだけに生きる。もう過去は振り返らない。

それが、苦しみという十字架を背負いながら、生きるために私が行った選択でした。初恋が何か深刻な恋愛だったかのように思い出そうとする自分への浅薄感を嫌ったこともあります。後悔する自己という可能性を消滅させる。

そうして私は高校3年のある日、小学校卒業の時のサイン帳を捨てました。

初恋の少女の現実感は既に失われ、その少女に抱いた、あのあまりに特別で澄んだ感情を思い出すこともなく、そうした時期があったことさえ、自分とは無関係なこととするかのように。

高校2年、一度初恋の日々の一場面を日記に書いたこともあります。しかしそれは自分の「いまわしい自意識」の最初の現れがあったという、硬い内省の言葉でした。

それでも、その頃の歌謡曲のメロディを思い出すと、何かがふわ～と体の中に蘇ってくる‥。

それは憧れのように安心した、澄んだ空気の記憶‥。それは、自分がその中で生きていた、ある別の世界の空気の記憶でした。

消えていく日々

今現在のあの子に対して、僕はもう他の女の子に対してと同じ感情しか向けることができないような気がする…。そんな思いの中で大学に向かいます。

そこで知るのは、一瞬あの子かと思い違った女の子を見たあと、激しく動悸している自分の心臓でした。僕はやはりあの子への葛藤の中に陥っているということか…。

日曜日、私の心を、立ち止まった旅人のような哀愁の気分がおおいます。自分が何を考えようとしているのかは分からない。ただ考えていたいのだ。悪い気分ではない。今まで自分がやってきたことを静かに振り返り、もの思いに耽っていたい…。

私の中で、何かが消えて行こうとしていました。

それはあの子への感情ではなく、内面の苦悩の中で冷たい自己統制の格闘をしていた、高校時代以来の自分自身でした。

さまざまな追想が、それ以前の少年時代へと向かっていきます。

一度見かけた、テニスラケットを持ってどこかへ急ぐあの子の姿…。使いなれないラケットを持ち歩く自分。湧き上がる自己軽蔑感…。

小学校6年の時、黒のブレザーを着て行った日…。初恋の少女もよく着ていて、憧れを感じていた黒

のブレザーを、叔父からお下がりでもらい着て行きます。しかし小学校に行った私は、それが小学校6年の男子としては過度におめかしの格好であることを自覚して、恥辱感を感じました。初恋の少女へ向けた心の世界で、私は自分を飾ろうとする淡い衝動を抱き、現実世界の中で、そんな自分を恥じたのです。

その日の午後、私は漠然と考えていました。街で見かけた、自分の外見を勝ち誇るように歩いていた女の子：。今まで僕には信念のようなものがあった。あの女の子みたいに、自分の外見を勝ち誇るような生き方は、幸福につながらない。自信は内面から生まれるものだと。

それも結局は、自分を偽ったステレオタイプの信条であったような気がする。この現代とは、彼女のような生き方で通用する時代なのだ：。

自己分析によって目指した、人格の成長。そして自分を飾ろうとする自己への恥辱：。

全てが、この現実世界にたち打ちするための心の鎧でした。でも本当に追い求めたものは、そこにはなかったのです。

閉じこもる自己

夏休みが近づき、授業もまばらになってきました。次の木曜の終わりの授業が、前期の最後の授業に

なります。

教室の中で私はずっと、緊張感と恐怖感に包まれながら、あの子への感情の中でじっとしています。あの子はやはり授業には来ませんでした。

授業では、「シゾイド（分裂病質）論」が講義されていました。

シゾイド的人間は、親密な関係を持っても、すぐそこから引きこもってしまう。愛することが相手を破壊することになってしまう。そして自分の殻の中に閉じこもる。

それは自分だ…。教室の学友達が、そしてあの子が、「シゾイド的人間」として僕のことを思い浮かべている…。こんな空想も、僕が自分の閉じこもり傾向を軽蔑しているということか。そうなのだろう。だが今まで僕は、自分の閉じこもりを頭ごなしに落胆しただけだった。閉じこもることの価値と、人との関係を持つこととの価値を、公平に比較したわけではなかった…。

人に背を向け、自己の中に閉じこもる自分。そこにはそうするだけの理由がありました。

それが何なのかはっきりとは分からないまま、私の心はそれを受け入れ始めていました。

前期の授業が、これで全て終わりました。

無垢な自己の台頭

大学4年の夏休みは、長い自由時間があった3年とは異なり、卒業論文の執筆や就職活動の準備に多くの時間を当てる予定でした。夏休み終わり頃には就職活動が本格化し、後期の始まりとはあまり境目がありません。学生生活も終わりに近づいているのです。

夏休みが始まり、自分があの子への大きな感情の未解決の中にあることを感じながら、具体的な感情は見えなくなっていきます。卒論の執筆とホーナイの勉強だけに明け暮れる数日間の中で、心に現れるのは、混沌として、方向性のない、過去の自分や来歴の追想と、意味のよく分からない、印象的な夢。そして断片的な対人緊張感。

自分の部屋に飽きて大学の図書館へ向かう時は、意味の不明な恐慌感に私は襲われます。自分の心の底に、何か自分自身で触れることを恐れているものがある。そんな漠然した、しかし確かな感覚が流れ始めていました。その時は、あの子と自分のことを考えるどころではないという感覚に陥っている自分を、私はいぶかります。

夏休みに入って一週間が過ぎた木曜日、私は久しぶりに高揚感を感じました。

開放感だけがあり、他には何の感情も伴いません。どんな意味なのか全く分かりませんでした。自分の閉じこもり傾向への自己嫌悪感情が消えていること。自分の容貌に自信が感じられていること。分かるのはそれだけです。

この開放感は、私の中に初めて生まれた、ありのままの自分で生きていこうとする自己の台頭を示し

ていたものであったと思えます。自己統制の鎧を脱ぎ捨て、無垢な感情に従って生きる。意識がそれを捉え、進むことができるという感覚が湧き立ちます。

しかしそれは、ある戦いの始まりだったのです。

内面の戦いの始まり

その日私は、次の日あたりに一度短い帰省をしようと考えていました。7月も下旬です。その前に、仲の良い一つ下の学年の学友に電話をかけようとします。コートが取れたら今度一緒にテニスをしようと伝えるためでした。その行動は、自己を監視統制することなく、ありのままの自分で友人を作っていくという、初めて芽生えた感情の表れのようでもありました。

人とのつながりをサークルや同期といった外枠に頼っていた、今までの私には考えられない行動です。

その時です。私は自分の中に、自分自身に向けられた冷淡な目があることに気づきます。

「何をお前が友人など作ろうとしていやがる！」と。

その時私はその感情が、今まで自分が感じてきた自己軽蔑感とは異質なものであることを、直感的に

感じ取りました。僕自身の中に、僕を監視し、僕を見張っている、もうひとつの目がある：。

一方で私は、この自己嫌悪感情の異質さの意味を、知的には理解していませんでした。実際当時の心理学では不足があったのです。今まで感じてきた自己嫌悪感情と同じように、それが主に自分と他人との関係についてのことのように考えます。

僕は同じ目を今まで他人に向けたことがあった：。人々は本当は心の底では結ばれていないのに、表面上でだけ親しく振る舞って、安心感とさまざまな利益を得ているだけではないのか！　僕はそう彼らを軽蔑し、非難した。同時に、彼らとの間に敵意が生じないわけにはいかなかった：。

背後にある心の圧制

実のところ、対立は他人との間に起きているのではなく、自分自身との間に起きていました。今私の中で、ありのままの自分で生きていこうとする新しい自己が、その歩みのために本格的に立ち上がろうとし始めていました。

しかしそれは、今まで私の人生を支配してきた自己と、共存し得るものではなかったのです。追い求めたものを失わされたこの現実世界を前に、自己の欠損をかこち、自分にないものを与えられた他人を嫉み、なるべき自己の姿を掲げ、冷徹な自己統制の鎧をつけ走り続けようとした自己。それは、私を苦しめてきたものであると同時に、私の今までの人生を支えていたものでもありました。

そしてその根底には、人の幼少期から蓄積された、恐怖と怒りの膿と、それをばねに発動する心の圧

制とも言うべきものがありました。それはあたかも独裁者による恐怖政治にも似て、人が忠誠を失い、自由を求めるようになった時初めて、隠し持っていた強大な毒牙を現すのです。「何を勝手に生きようとしていやがる！」と。

私が自分自身の中に感じ取った冷淡な目は、その毒牙の現れの、まだ小さく、静かな合図でしかありませんでした。

自分の心の中に流れる不安を少し見つめたあと、私は学友の家に電話をかけます。

一瞬、相手の家族に対して自分が何か許されざる存在であるような感覚が流れました。

つかの間の前進

翌日、帰省する日の朝、私はやや躁状態の中にいました。

頭の中を、あの子と交際するという考えが駆けめぐります。自分が何を考えているのか後でよく思い出せないようなありさまです。

少し冷静になったのは、帰省に向かう電車の中でした。自分がこうするとあの子に好かれなくなってしまう…。そうあれこれと気にしている自分に気がつきます。

家に帰ったら、家族に対する自分の態度を変えよう、と私は考えます。自分が近づきたい人々のように、家族にも明るい態度で接する自分の姿へ…。そこに、ここ数か月の自己分析を経て得た自分の成長

と、これからの新しい自分の未来があるような気がしました。

毒ある自己嫌悪への転落

家に着くと、何も変わっていない自分がいました。

家族の中で、ひとり気難しい気分の中で心を閉ざすような態度の自分。母の言葉に対しても、喉を詰まらせて滞った、言葉少ない返答。自分はあの子には好かれない、という観念が頭の中をおおいます。

地元のデパートに寄り、すらりとした足のきれいな女の子が目にとまると、近づいて相手の気を引きたい衝動に駆られます。追い越しざまにその女の子の視線をものにすると、何気ない素振りをしてじらす…。

苦々しい感情が体の中をめぐります。この行動がどう成功しようと、それは僕に自己軽蔑を感じさせるようだ。実際のところ、女の子が去った後僕は自己軽蔑を感じた。自分の中にまるで価値あるものが何もないという気分だ…。今まで、自分が美貌だと思えることがこの自己軽蔑への対抗打になっていると思っていた。だがこの自己軽蔑は、根本的に自分のパーソナリティにかかわっているようだ…。

翌日も、毒々しい自己軽蔑感が私を苦しめます。自分のスタイルが悪いというような、体がしびれるような注察感。それは単に外見上の欠点ではなく、自分の外見に不自然な不恰好さ、精神的に軽蔑に値するものが現れているという感覚だ…。

否定された家族

帰省して3日目の夜、私は日記に向かい、この短い滞在の間に見えてきた感情を振り返っていました。

翌日いったん東京に戻り、数日後にまた帰省して、父と北アルプスへの登山に出かけたり、母の教会のキャンプに母と出かける予定がありました。

毒々しい自己軽蔑感…。そしてもうひとつは、家族への深い疎外感でした。

帰省して2日目、一つ違いの兄が私より1日遅れて帰省し、婚約の報告をします。兄の結婚話で賑やかな家族たち。妹を含めて5人家族です。

私はその輪の中にいませんでした。家族の輪の中に入ることが、抵抗感のためにどうしてもできませんでした。小さい頃、冬のこたつの四辺が他の家族で占められ、自分が入る場所がないと感じたのを思い出します。

この家族は今は大分和やかだ…。だが僕の心は何も解決されないまま、家族の団欒（だんらん）が演じられていく…。

これは僕にとって本当の〝家族〟ではない。そんな思いが湧きます。僕はこの家族の価値の何かを否定しているのか…。

小さい頃、僕は家族への愛情表現に抵抗を感じた。その結果としての無愛想な態度が、この20年の生活史を通してあまりにも当たり前のものになってしまった。こんな自分など最も受け入れたくないものだったのに…。

自分の心の中に起きていたことがはっきりと見えてきます。ホーナイの本にあった英語の文がそのまま浮かびます。I should not love them, because they do not love me. 彼らを愛してはいけない。なぜなら彼らは自分を愛さないのだから。

家族から離れ、自分の感情を小さな紙片に書き記す私の中に、強い悲しみが流れます。人の中に入ることへの絶望は自棄的な感情を引き起こす。それを捨てようとした時、あの根源的な悲しみが見える…。

ノスタルジーと抵抗

はっきりと見えてきたもうひとつの感情は、小学校6年生頃へのノスタルジーでした。

帰省して3日目の夕方、私は自分の中に流れる悲しみへの慰めを探すかのように、あの下級生の子に似た面影の店員の女の子がいる近所の本屋に向かいます。以前そんな子がそこにいるのを見つけ、その顔を見ようと、目が合う緊張を押して近づいたこともあります。しかし今は少し遠くからその店員の子の姿を見るだけで精一杯です。

あたりには青白い空気が流れていました。
少し暗くなった空の下を、私は諦めるように家に帰っていきます。

家に帰ると、私は自然と、置きっぱなしにしていた自分の写真アルバムに手を伸ばします。
そこには、私が初恋を向けた少女の姿があります。小学校6年の修学旅行の写真…。
初恋の頃のさまざまな思い出がありありと蘇ってきます。それはまるで昨日のことのようでした。小学校卒業も間近な頃初恋の少女の友だちにしてしまった無神経ないたずら…。今からそれを謝る手紙を出そうと、その友だちの子の住所を知っていそうな同窓生のアルバイト先に思わず車で行きかけたほどです。

とても輝いていて、美しい日々だった…。それを確かめる誰かとの対話が欲しい。
あの少女が初恋の対象であったこと。本当に美しい時代だったこと。今どこかにいる初恋の女性に、そのことを話したい気持ちを感じました。あの頃を懐かしむ気持ちは、彼女の方でも変わらないのではないか。
あの頃そのままの形で、初恋の女性への親近感が感じられます。自分の少年時代にそんな輝いていた日々があったことを、少し誇らしく感じる感覚もありました。

しかしその感覚が逆に、私の気持ちを冷まさせます。

彼女たちにとってはそれほど美しい時代だったというわけでもないかも知れない…。だいいち僕は彼女らにそんなに近いわけではなかった…。周辺にいた僕が勝手に美化しているだけなのかも知れない…。

そう考え、誰かと話そうという気持ちが醒めるのを感じます。今まで通り、彼女らに対して特別の関心はない自分を装おうとする気分…。

いや、確かにあの頃は美しい時代だった。彼女たちにとってもそうだったはずだ。

この不確実感は、その美しい時の流れに、自分が積極的に加わっていなかったという気後れなのかも知れない。だからと言って、今さら加わるなどという形を取るわけにもいかないのだ…。

いずれにせよ、終わったことだ。

もうこれでいいだろう…。

そうして日記を書き終え、寝床につきます。

翌日は早めに東京に戻るつもりでした。

心のすき間に向かって

翌朝起きた時、前日の思考とは裏腹に、私の心の中は、何かを求める青白く澄んだ空気に満たされていました。

自分が生きていた別の世界が、すぐ近くにあるのを感じます。まるで、そこから吹いてくる風が頬に当たるのがありありと感じられるかのようです。

早めの電車に乗るのを諦め、日記に向かい、自分に何が起きているのかを見つめます。

今日は東京に戻る。

僕の心の中を占めているのは、Minemura Takakoというあの少女のこと、そしてあの時代のことだ。なぜ自分があの頃のことにこんなにも心をおもむかせようとするのか。そうすることが自分にとってどんな意味を持つのか。自分でも分からない。確かにあの少女は実在したし、あの時代は実在したのだ。

僕はそれを確かめたい衝動を感じている。

心の中に何かのすき間があって、そこから吹いてくる風が、僕の心を過去におもむかせようとする。もし僕が、あの、全てを切り離そうとした時代に、小学校の頃のサイン帳を捨てたりしなかったら、こんなやるせなさのようなものも感じることもないのだろうか…。

私は一瞬手を止め、正面を見据えます。

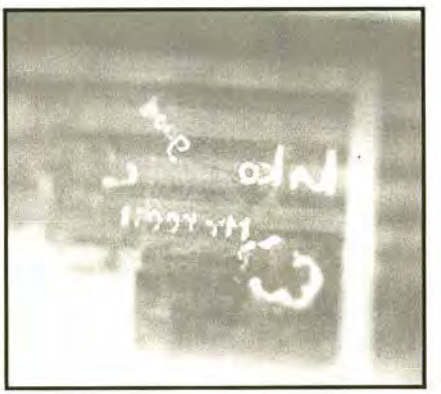
そして再び日記に向かい、力強くはっきりと記します。

僕はあの頃の時代に別れを告げていない！

母の自転車を借り、小学校へと走って行きました。

8章

蘇った自己



（大学4年7月末）

蘇った自己

僕はあの頃の時代に別れを告げていない！

私ははっきりと日記に書くと、母の自転車を借りて小学校へと走って行きました。

夏休み中で誰もいない小学校に行くと、少し開いているドアから中に入ることができました。全てがあの頃のままでした。普通の小学校の教室の風景。特に初恋の少女の記憶につながるものはありません。

それでもひとつだけありました。教室の後ろに、縦横の木の枠だけで仕切られたロッカーがあり、自分の図画工作を置いておいた日のことを思い出します。

僕はそのロッカーの近くにいた…。あの少女は僕の方に来かけて、はにかんだように行ってしまった。確か僕の図画工作の中に、彼女が何かの50円を僕に返そうとして、僕がいいと言った50円玉を入れておいたなんてことがあった…。

それから、その少女が住んでいたはずの家に行ってみます。友達との遊び帰りにたまたま通りがかった家の前にその少女がいて、恥ずかしそうに家の中に入ってしまったのを見た記憶がありました。

もう誰も住んでいませんでした。かなり月日が経ったようで、だいぶ荒れています。全てが記憶にあ

るよりも小さく見えます。

背の高い草でおおわれた庭に入って、部屋の窓から中を見ようとします。中は暗くてよく見えません。

窓に、内側から白いマジックで文字が書いてあるのに気がつきます。

『Ｋａｋｏ』。

カコ……カコ……タカコ……。彼女の名前だ。彼女が自分で書いたのに違いない。

別の文字は、『Ｍｙ　ｒｏｏｍ』『ｇｏｏｄ』それに雲の絵が描いてありました。

そこが彼女の暮らした部屋だったのだ‥。

あの少女は実在したのだ。

言い表せないような感慨と、小さな達成感の中で、家に戻ります。すぐ支度をして東京に戻るつもりでした。

家に戻っても、何かすっきりしない気分が残ります。もう少し何か分かるのではないか。彼女を偲ばせる、もっと具体的なものはないだろうか。

結局私はそのあと2回、その少女がいた家に行き直しました。最初は隣の家に年配の女性がいたのを思い出して、隣家の行き先を尋ねに戻りました。引越し先は分かりませんでした。

次にはカメラを持って戻りました。家の風景を何枚か撮り、さらに庭の隅の草を分け、放置されていた机を見つけます。

引き出しを覗いて見ると、年賀状の束がひとつあります。嶺村隆之、京子様。

彼女の父親と母親の名前だろう。その年に嶺村家はここを去ったのだろうか…。僕が中3かあるいは高1の頃だ。彼女が東京の中学へ行ったのも、あるいはいつか嶺村家がここを去ることを見通してのことだったのかも知れない。

あの家族は、そして彼女は、今どこにいるのだろうか。今も東京のどこかに住んでいるのだろうか…。

来歴のつながりへ

東京に戻ると、私は日記に向かい、思い出せるありったけの思い出を書いていきます。

暖かく軽快な雰囲気の中で、思い出が駆けめぐっていきます。いつもクラスの皆で何かをしていたこと。初恋の子とのさまざまな場面…。家庭科料理の材料を打ち合わせた日…。オルガンに2人で座って弾いていた時…。遠くの火山が噴火して小学校の屋上に火山砂が降り積もった日…。あの少女は僕が屋上で火山砂を集めていたのを知っていた。僕が家の顕微鏡で見るんだと言うと、「何か分かったら教えてね」と言ってた…。

思い出を書く作業が一段落し始めると、私の心に漠然と苦しみが流れ始めます。あの日々の光景は薄

い残骸のように消え始め、質素な下宿の部屋の光景が重なり始めます。

鉛筆の動きは遅くなり、私は何かにすがるように、初恋の女性に出す手紙の文面を空想していました。

「あの美しい日々は、本当にあったんですよね！

〃全てが僕の空想だけが作り出したものではなかったろうか〃。そうではなかったですよね。

僕は君がとても好きでした。あなたも僕が好きだったのではありませんか。僕たちは、あの美しい日々が本当にあったのだという思い出を、信じてもいいのですよね。」

私を見守る初恋の少女の気配が消え、部屋の風景だけになります。あの日々の光景は無機質な残像のように心の底に沈みます。

私の中に苦しみが流れます。小学校卒業の時のサイン帳を捨ててしまったことが、まるで自分の体の重要な一部を失ったかのように、あるべからざる事として迫ってきます。この苦しみは何なのだろう。耐え難い感情だ…。

私はうつぶして、唸って、床を腕でたたきつけます。

それから私は、1年半前に転入学試験を決断する葛藤の中でそうしたのとまるっきり同じように、ないはずのサイン帳を探して押入れの中をはいつくばります。今となっては、同じ行動をした1年半前の自分が、10年前の自分よりも遠いかのようでした。

一体僕はこの10年間に何をしていたのか。何とか自分を落ち着かせ、日記に向かって、小学校を卒業してから高校に至る来歴を振り返り始めました。

中学1年：。2年：。僕はまだ子供だった。だから中学3年頃次第に自分をつき動かし始めるようになった、自己の霧の世界から目ざめて来た使者達を、冷静に省みることなどできるわけもなかった。僕はその使者に乗り移られて行くことによって、あの淡い日々とは確かに別の、ある屈折に満ちた世界に出発したのだ。

僕はそれに対して死にもの狂いで戦わねばならなかった。あの淡い日々の思い出に目をやるだけの余裕はなかったのだ。

高校への入学とともに、僕の自己は破綻をきたし、僕は苦悩へと陥る。それと同時に、現在の自己に通ずる新たな自己が活動を開始した。高校3年の時、僕は反抗的独立の中に、自分の進む道を見出した。僕は過去からの執着を捨てようとした。自己の霧の世界を、払い消そうとした。日記を燃やし、サイン帳も捨てた。それは〝それ以前の自分に別れを告げる〟ためだった。

その時の僕にとって、あの日々のことは、美しい思い出ではなかった。あの日々の自分は、その時の自分にとって異質的なものでしかなかったのだ。

あのサイン帳を捨てるだけの来歴を、僕は歩んでいたのだ：。

私の中で、全ての来歴がつながり始め、同時に苦しみが和らいでいました。

サイン帳を捨ててしまったのは確かに大きな損失だったとは思う。だが事故や病によって自己の財産

の何ものかを失ってしまうということは、不可避なことなのだと思う。
僕は心の病に陥っていたのだ。

過去への回帰の旅立ち

東京に戻って2日目。
サイン帳を捨てたことへの苦しみはもうないようでした。代わりに私の頭の中を、初恋の女性に会うという考えが駆けめぐります。明星中学校に行って卒業生名簿を調べれば、彼女の足跡をたどることができるはずだ。
何のために？　自分でもよく分からない。だけど、彼女がいたからこそ、あの日々は暖かくて美しい日々だったのだ。僕はあの日々が自分の心の故郷のような感情を感じる。

そして私は、確信の中で、自分が取り戻した記憶を再びなぞります。
今こうして日記を書いている僕の机の上には、小学校の卒業記念アルバムがある。僕はその上に、あの茶色い海図のサイン帳が重ねられているのを、ありありと思い描くことができる。
僕はサイン帳を手に取って、ページをめくってみる。僕は実際にそれを見ているように、思い出すことができる。宮原：。藤田：。峰崎：。竹川：。大杉：。そして嶺村隆子、石田美由季：。

自分でも自覚することなく、日記の書き方にひとつ変化が起きていました。人物の名前をそのまま漢字で書くようになったことです。今まで日記に書くことがまるで観衆の目にさらされた脚本でもあるかのような感覚があり、人の名前をそのまま書くことに抵抗感がありました。

今初めて私は、自分のありのままの心を、自分自身だけのために日記に書き綴っていました。

もうこのくらい思い出せれば十分ではないか。私は自分にそう言い聞かせ、東京に戻ってきた目的のレポート作業に取りかかろうとします。夏休み中に提出期限のあるものが一つありました。

いや、まだ何かが足りない。それはあの頃に僕を包んでいた雰囲気そのものなのだ。

僕はそれを追い求める。こんど帰ったら、あの頃の友人に会おう。あの頃の雰囲気を自分に伝えてくれるものを、探し続けるのだ。それはまさに過去への回帰の旅立ちだろう。それがいつか未来への前進に変わるまで、僕はあの日々の思い出を切り捨てることはできない。

私の心は再び、思い出の日々をめぐり始めます。初恋の少女の父親に自分自身にも似た人物像を重ね、初恋の少女がその中で育ってきたであろう静かで暖かな家庭が浮かんできます。

あの頃の雰囲気が蘇る…。僕もその頃は頭がいいと皆から特別視されていた。それが僕の心を暖かく支えていたのかも知れない。夢に溢れて、将来への心配も何もなく、自分の心を満たしてくれるものがそこにはあった…。

彼女は、大人っぽくて頭も良かった。彼女には、優しいとか情熱的とか感傷的とか、特定の言葉は当

てはまらない気がする。僕にとって彼女は、何よりも彼女自身だった。
僕は純粋だった。そして彼女も純粋だった。全てが純粋な光の中で、輝いていた…。

そうしてしばらく思い出に耽り、私はようやくレポートに取りかかり始めました。

崩れていく幻想

東京に戻って2日目の午後。
しばらくレポートの作業をしているうちに、私は次第に苦しくなってきました。心の闇の穴から、何かが自分をひきずり込もうとしているかのようです。やがてレポートを続けることができなくなります。私には何が苦しいのかよく分かりません。
心の底は既に知っているのです。思い描いた世界が必ずしも現実ではないことを。
曇りひとつない美しい追憶によって、苦汁に満ちた自己の現実を覆い隠そうとした一時の平安。その裏には、未解決の恐怖と、内面の矛盾に苦しむ人間の姿がありました。

残された冷静な目が、自分に何が起きているのかを把えようとします。
僕はレポートを書きながら、自分の現在の姿を考えていた…。何の問題もない、聡明な研究者としての自分…。あの淡く美しい日々の中で、皆から仲の良い好意を寄せられていた自分からつながるものと

しての、現在の自分…。それを守るためには僕の目の前にあのサイン帳があり、僕はそれを読むことができなくてはならない！

毒々しい苦しみが強まり、机に座っていることもできずに、座布団に頭をうずめて唸ります。

残された理性で、自分の心に浮かぶものを凝視します。

皆に愛され支えられていた自分の姿…。自分を支えてくれる人々…。皆が自分を支えていた世界…。

それが答えなのか…。

締めつけていたものが消えるかのように、苦しみがすっと薄らいでいきます。

始まっていた現実

するとなぜか今までとは対照的に、冷淡な雰囲気の記憶が蘇ってきます。

別の女子のサイン帳に書いた文句…。「さようならさようならカバになった人」。これはその女子のあだなが「カバ」だったのと、都はるみの歌に引っかけたものだ。卒業のサインとしてはまるで最低だな。それに、美少女の友人にしたたちの悪いいたずら…。身勝手な男子を見る女子の白い目。そんなものは意に介さない素振りの自分…。

僕はあの頃は女の子に思いやりのないことをしていたのだな。今の自分とあまり変わらないな…。皆に支えられていた自分など現実ではなかったように思えてきます。

嶺村さんとの思い出にしても、あの頃の僕は心の中で切り離して体験していただけだったのかもしれない。彼女への思いやりも、実際の現実場面の中では存在していなかったようにも思える。身勝手な恋だったのだ。

再び、あの日々の、そして初恋の少女の思い出の現実感が薄れてきます。

卒業式の思い出が浮かびます。壇上に出ようとする僕に、ひとりだけ白いスーツの彼女が声をかける。「たあ坊のばか」。何か僕への願望と諦めを同時に含んだような口調だった…。記憶の中では、彼女はその場面で僕ひとりだけに声をかけたのだ。

これは僕の想像が作りあげたものなのではないのだろうか。彼女は、僕の自分勝手な態度を非難して、あの言葉を言ったのかも知れない。はっきりと自分の恋を彼女に伝えなかった僕に…。

彼女との時の全てが、あまりにも遠い世界のことのように感じられる…。

だけど僕はそれを昨日のことのようにありありと思い出すことができる。彼女は確かに実在したのだ。記憶は鮮明なまま、全てが一つの作り話か夢物語であったかのようにも思えてくる。

そして彼女が今だに、僕自身の中の何かの象徴として、大きな光で輝いているのを感じるのだ。今も変わらない彼女が、僕のことを見守っていてくれるという気持ちが、心のどこかに残っている。

全てが終わってしまった、過ぎ去った世界の出来事なのだと思おうとする気持ちと同時に…。

2日目の夜も大分更けていました。

追い求めたものを失った現実世界と、それでも輝きを失わないままの少女の記憶…。

宙に浮くようなあやふやな感覚の中で、寝床につきます。現在という時の流れから離れ、追憶の世界に惹きこまれたまま…。

自分が生きていた、憧れのように安心した空気が流れた世界。そして自分の感情を全て否定して、何もないような顔で生きていた自分。この2日間とも、私の心は2つの世界を往復したようです。2つの世界につながりはないままでした。

ひとつの答えは、次の日に現れました。

続いていた思い

東京に戻って3日目。翌日には再び帰省の予定です。

朝起きてから、私は初恋の女性に出す手紙の文面についてあれこれと考えていました。しかし大学に向かおうとする頃、初恋の少女への感情が全て見えなくなっているのを感じます。

大学に向かって歩いている途中、私の中に予期せぬ事態が起きていました。初恋の頃と変わらない気持ちのまま、その女性に今も愛情を向ける気持ちがあるのを自覚したのです。

寂しさを抱え続けた自分の人生の中で、唯一純粋に心が通ったのがその少女だった。そんな思いの中で、これからもその女性だけを愛していきたいという感情…。

大学でレポートの作業をしながら、現実性を欠いたその感情を醒まそうとします。この感情は、自分と一心同体の人を求める要求が作り出したものに思える。自分と彼女が純粋に気持ちを交わし合っていたという感覚も、あの頃の僕の身勝手な恋が作り出した感情であって、現実的なものではなかっただろう…。

書きながら漠然とした悲しみが流れます。何が悲しいのかは分からない…。

初恋の少女が、今あの下級生の子に向けるのと同じ感情の相手であるかのように浮かんできます。

私は再び、あの日々の意味を問います。

サイン帳そのものには、もうあまり特別な感情はないようでした。サイン帳を通して知ることができる自分も、今の自分へと至る連続した時の流れの中の、子供の頃の自分の姿に過ぎないのだ。

それでも、あの日々の記憶の中にはやはり、今の自分とは別の自分の姿があるのだ。グループ構成だった小学校生活の中に、ありのままにとけ込んでいた自分…。その中で初恋の少女と一緒にいた思い出は、あまりにも美しいものとして蘇ってくる…。

あの頃に帰りたい！　僕は心の中で泣きながら、今までのいつよりもその気持ちを強く感じている…。

再び、私の心の中に淡い空気の世界がひろがり、新しい記憶も蘇ってきます。僕は自分があの学校生

活を送ったのだということを、今ははっきりと実感を持って感じることができる‥。

消し去られた矛盾への探索

東京に戻って3日目の夕方。私は大学から下宿に戻ります。青白い空気が流れ始めていました。

私の中で、あの思い出の過去に何があったのかがはっきりしてきました。追い求めたものを失った現実世界。その中でも確実に存在した何か。それがあの少女を接点にするかのように繋がっていたようでした。

私はそれを突き止めるための歩みへと進みます。日記に鉛筆を走らせながら、消し去られていた記憶の探索へ。今度は、自らの意志によって。

私には一つの問いがありました。「それは本当に愛だったのか」。本当の愛であれば、現実において相手との関係を築くことに繋がるはずだ。少なくともその意志を持つはずだ。その考えが、あの下級生の子への自分の感情の中で、現実的な愛と別のものを分けるための指針でもありました。

初恋の少女に向けた自分の感情には、それでは済まないものがある。それはあの下級生の子への感情を解くための鍵でもあるようでした。

嶺村隆子。

彼女は僕にとって何だったのだろう…。

彼女に対する僕の感情は、あの頃から既に矛盾していた。僕は彼女がとても好きだと感じていたが、自分から彼女に近づくことは決してしなかった。彼女を抱きしめたいほどの思慕を向けたのは、空想の中だけでだった。僕はそんな強い感情を、彼女との関係において、そして彼女自身に対して、否定していたのだ。

この矛盾は小学校を卒業してからさらに極端になった。僕の心の中で、彼女の姿は比類ないほど大きなものになり、彼女よりも価値を持つものは何もなかった。彼女は人間ではなかったのではないだろうか。そんな風に考えたほど、彼女は僕にとって特別な存在だった。

ところがそれとは全く矛盾したこともあった。友人達とのお喋りの中で彼女の話題が出た時、僕は常に徹底して無関心を装った。それだけではない。中1の夏休みだったと思うが、僕は彼女と偶然会っていたのだ。

僕が兄と一緒に自転車で走っていた時、向こうから小さな女の子と自転車で走ってくる彼女がいた。彼女はあら！　と驚いたように口に手をあてた。僕は心の中の動揺を隠すように、兄と喋る声を大きくした。すれ違う時にはもう、彼女の表情も見なかった。つまり僕は彼女を無視したのだ。その時はそうすることに自己非難さえ感じなかった。

これが実際の彼女の思い出の最後のものだ。

それから彼女の思い出は現実世界から完全に切り離されていった。やがて僕は実際に彼女に会うということを、むしろ恐れるようになった。自意識の轍から抜け出ようと格闘していた高校時代の僕にとって、彼女がもし身近に現れたらと空想した時、彼女は軽蔑すべき自己を際立たせる存在であり、親しみよりも恐れの対象だった。

初恋の日々においてさえ、僕は現実世界の中で彼女への感情を否定していた。自分の中の離反的人格が命じるままに。何の疑問を抱くこともなくだ！

少年時代の私には、今よりもはるかに徹底した離反型人格があったのです。

愛と離反の真実

3日目の夜。

自分の来歴が私に分かってきました。それは私自身の人格構造を、私自身が把握した瞬間でもありました。

私の目からさ迷う人間の表情が消え、心理学研究者の目が軽い驚きと共に凝視します。

心の中だけの愛情の世界。何ごともない外面を維持した平静。そして孤独に閉じこもる離反。この3

つの別人格が、完全な「区画化」によって衝突を免れていた。一方で人を愛す感情も抑圧されておらず、いつか葛藤を起こすことが運命だった。

3日前にはただかつての美しい思い出が蘇ってきただけと思っていた。しかしそれは離反型人格におおわれたものだった。それが僕が初恋の少女に近づこうともしなかった理由だ。置き去りにされたこの自分自身が、あの下級生の子へのこの4か月の感情の変化を経て、初恋の時と同じ感情状態に至り、全てが蘇り、全てが明らかになった。一体これは何ということだろう！

私は再び内面の放浪者の表情に戻ります。初恋の少女への感情は、本当に愛だったのか？

離反におおわれ、現実の関係を築くことのない愛情：。それは本当の愛ではないのではないか。

だが、離反によって、心の中だけに閉じ込められた感情とは何なのか。

それは真の感情でした。現実世界で行動をした時、自己卑下や拘束への抵抗などの忌まわしい自己の別面のために、閉じ込めざるを得なかったのです。閉じ込めたまさにその部分において、それは真の感情でした。

私はそのことに確信を感じます。

嶺村隆子、そして恵藤由佳里。この2人に自分が抱いたものは本当の愛情だった。

僕は嶺村隆子を愛していた。そして今は恵藤由佳里を愛している。これももはや過去となろうとして

いるのかも知れないが。
たとえその愛が本当であっても、僕は何もすることができない。僕は精神だけの存在だ。
あの日の愛が、今になって、恵藤由佳里への愛が真の感情であることを教えるために蘇って来てくれたのだろうか…。
今まで自分が様々な女性に向けた感情もそうだったのかも知れない。しかしそれは精神において真であり、偽の形によって混乱の中に消え去ったのだ。

全てが真実でした。内面に閉じ込められた感情が愛であったことも、外面においてそれが如何なる形を取り得ないことも。
私はそのどちらが真実なのかを知ろうとする歩みの中で翻弄されてきました。しかし答えは別のところにあったのです。両方が真実だった。それが答えでした。

閉ざされた記憶の中の歩みが終わったようです。
私の心が、現実という時の流れへと戻り始めます。

集中が解けた軽い弛緩と、穏やかな疲労感の中で、カクテルを飲みます。
家族のような親しみに溢れた、大学2年の時の研究会サークルの人々の姿が浮かんできます。
また、あの人たちに、会いたいな…。

追憶への別れ

東京に戻って4日目の朝。再び帰省へと発つ日です。それは同時に、私の心の中で、私が追憶に別れを告げ、現実という時の流れへと再び旅立つ時でもありました。

これから故郷の地に立つであろう自分が、もはや3日前の自分とは違うことが私には分かっていました。ただ美しい思い出という感覚の中で訪ねることも、もうないでしょう。

しかしそれは、再び過去を置き去りにすることではありません。私の心は一瞬にして、全ての思い出を駆け、置き去りにした自分があの日々の中で追い求めたものを、私自身の心に、深く刻み込むのです。

もう、あの日々の雰囲気は、あまり積極的には蘇ってこなくなった…。

忘れようとすれば忘れられるだろうし、もう落ち着けなくなることもないだろう。それでも僕はあの日々のことを思い出し、そこに今の自分とは別の自分を見出すのだ。

それは、内面の矛盾に引き裂かれた今の自分にとって、決して得られるはずもない安らぎと幸福が、あの学校生活の中にあったということなのかも知れない。

僕はやはりそれを追いつづけるのだ。

サイン帳への未練は、今も時として僕を苦しめる。それはあの淡い日々の証しとしての意味を持つのだろうし、それが失われたことは同時に、あの穏やかな日々がもうどこにもないことを意味しているのかも知れない。

その一方で、あの淡い日々の中で初恋の少女と過ごした記憶は、もはや現在の現実の中で何を探しても見出せるものではなく、僕の心の中だけに存在するものであるような気もしてくる。

だからこそ僕は今、あの淡い日々の続きとして、大人になった自分が、大人になったあの少女と一緒に、穏やかな日々を送っている場面を夢想することができる。

場所は、小さくて暖かい雰囲気の事務所のようなところだ。僕達はそこで一緒に仕事をしている。

僕は、彼女が木の机に座って、彼女が時々、僕に向かって表情を向けてくるのを思い描く。

それ以外には何も必要ない…。ただそれだけの時間が、いつまでも続いて行く…。

そう空想しながら、僕の胸の中に熱い思いがこみ上げてきて、僕は子供のように泣きたい衝動を感じるのだ…。

心の奥底へ

再び帰省への電車に乗りながら、私は初恋の少女を思い返していました。あの日々に彼女を愛したことは、今でも変わらない。彼女は、僕が自分の人生の中で出会った、僕の愛する女性だ。僕はいつまでも彼女を忘れない。

そこには、そんな自分を誇らしく感じる感覚も伴っているようでした。

電車に揺られているうちに、私の心に疑問が流れてきます。読んでいるホーナイの本には、空想恋愛の症例が書かれていました。僕は愛したなどと言えるような実際の関係を、彼女との間に持っていたのだろうか…。

帰省先に着いた時には、全ての景色が、記憶の蘇る以前のものに戻っていました。感情は全て消えていました。僕は夢の中で彼女を愛したのだ。全て夢だったのだな…。

私はこの日も初恋の少女の家や小学校に行ってみました。もう3日前のような感慨はありませんでした。

小学校近くの神社の公園の脇を通り過ぎる時、一つだけ新しい記憶が蘇ってきました。初恋の少女が他の女の子や男の子達と遊んでいた時、少年の自分の中に流れていた屈折した寂しさと悔しさの感情でした。実際僕は、彼女に対してもかなり対立した感情を抱いていたのだ…。

次の日にはもう、全てがいつもの帰省先でのただの時間に戻っていました。小学校の同窓生に会ってあの頃のことを話そうという気持ちもなくなっていました。

自分の容貌に魅力を感じることもできず、他人に愛を求めない冷徹な自己像と、閉ざされた感情が私を包み始めます。明らかに私の精神状態は急変していました。

威厳ある、冷徹で頭脳の鋭い精悍な男という自己像の中で、地元のデパートに寄ります。鏡に映る自分を見ると、空想したのとは違う、精彩の感じられない容貌の自分がいます。

自分にはもはや何の魅力もないように思えました。

買い物を済ませている私の頭の中に、自殺という観念が浮かびます。

これほどはっきりとそのことを考えたのは初めてでした。強い衝動を伴っているわけではないけれども、今の自分には、それを否定できるだけの幸福感はない：。

もし自分が自殺したら：。激しく悲しむ母の姿や、兄や妹の人生への影響が浮かびます。自分には不可能だと思えました。

少しして角度の加減などでハンサムに映っている自分の姿を見ると、感情が少し楽になるのを感じます。

その時、その鏡の向こうには、あの下級生の子の面影がありました。

結局僕の自己評価は、人から見られることに依存しているのか：。

私自身は、こうして自殺を思い浮かべた時の自分の感情を、今は思い出すことができません。思い出せない理由があります。その時の私は、もういないからです。

このあと私の心は、さらに開放されていく内面の力が増す一方で、心の奥底のより深い闇への階段を降りていく、2つの様相を示すようになっていました。

私の中で、ひとりの人間が死に、別の新しい人間が再生される時が、近づいていました。

9
章

心の罠の中へ

（大学４年８月）

前進への意志

自己の真実へと向かう歩みの中で見出した、別の世界を生きていた自分…。

その追憶に別れを告げた時、私は心の闇へのより深い一歩を歩み出していました。自殺という観念が初めて、深刻な重みで私の脳裏に浮かびます。

心の毒は翌日には過ぎ去っていたようでした。私は蘇った自己の謎のさらに先へと進みます。

なぜ自分は、最初の時点で初恋の少女に近づけるとも思わなかったのか…。そこには何かの絶望感が関係しているように思えました。

同時に私は、今まで自分があの下級生の子に近づき得るかと考えていた時、自分があまりに残酷な基準で自分自身を誹謗し、軽蔑し、叱責していたことを直感的に感じます。それはあまりに理不尽であったため、私はそれに気づいた瞬間、その姿勢を捨てます。

自分が魅力的な女性の相手に値しないという感覚は、その姿勢が生み出した感覚でもあったようでした。自分と女性との間にあった冷たい壁が、少し薄れるのを感じます。

あの子と交際しよう。私の中に前進への意志が生まれていました。

たとえ自分の中に利己的な衝動があったとしても、あの子に対してそれを抑えるだけの強さを僕はも

う持っているはずだ。

再帰省をしてからの8月初旬、父と一緒に出かけた北アルプス登山の間、私はあの子を思いながら歩きます。夏休みの間にあの子に手紙を出そう。もし彼女が僕を好きだとしても、それで全てが解決する訳ではなく、内面の試練はむしろその後始まるだろう…。

私は明らかに新たな段階へと進んでいました。来歴を取り戻した自己の内面の底堅さの感覚、そして自分の感情のままに行動できるという感覚が生まれています。

しかし山から下りる頃、都会的なファッションの目立つ麓（ふもと）の駅にいると、自分の容貌への自意識と自己嫌悪感情にやはりとらわれている自分を自覚します。するとあの子と一緒になろうという意欲もかすれてきます。

その一方で自分の中にあの子が欲しいという感情があるのを自覚する時、私の心に苦しみが流れ始めていました。

断念された愛

ようやく私の中に形を見せ始めたあの子への前進の意欲でしたが、それもすぐに、自らによって完全に否定される出来事へと向かいます。

それは同時に、全ての来歴を取り戻した私が、自らの人間としての存在さえ賭けた内面の闘いの地

に、今足を踏み入れた自分の姿を知ることでもあるのです。

登山から帰ったあと、母と2人で参加した、母の所属している教会のバイブル・キャンプでした。一般参加が可能な、教会の勧誘行事です。小さい頃から科学好きで育った私にとって、本格的な信仰は無理な話でしたが、それでも心の平安を求める気持ちが、少しキリスト教への関心を持たせていました。

最初私は、自分でも意外なほど同年代の人達と仲良くしようとする気持ちでいる自分を感じました。まるで自分の問題が全てなくなっているかのようです。

回りの人々は皆真面目なキリスト教信者で、追従的な人々のように見えました。それが私に、自分ひとりが自由堂々とした人間のような気にさせます。積極的な気分が、私に自己表現への意欲を起こさせます。

あの初恋と、そして今あの下級生の子への思い：。そんな豊かな感情に生きている自分。心の片隅で浅薄なナルシズムを感じながらも、グループ討論会では恋愛問題に取り組んでいる自分を語ります。そんな自分が参加者の女の子に憧れられているという感覚さえ起きていました。明るい態度の自分：。歌を歌っている自分：。皆のいる所で得意なギターを弾いている自分：。

しかし実際のところ、やや派手な服装で、制止が消えた勢いで、討論会におあつらえのように内面を語る人間を演じた私の姿は、外見ばかりで自己顕示的で、そのくせ堅く馴染みにくいという印象の、女

の子に嫌悪感を与えやすい姿だったかも知れません。私自身が薄氷の上の高揚感のようなものを感じ始めていました。自分がどう人に見られているかが次第に気になってきます。

2日目が終わろうとする頃、私の中で何かが変化していました。皆と積極的に親しくしようとする自然な感情が湧き出なくなっているのを自覚します。一人になりたいという感情が混ざり始め、身につまされるような感覚に取り囲まれます。まるで罠にはめられたのを知るような、嫌な感覚です。

実際私は、自分自身の心の罠にはめられたのです。

キャンプの3日目。堂々とした気分は緊張感へと入れ替わっていました。そして心の底で恐れていたことが起きます。否、実際には何事もない些細な出来事を、恐れていたこととして自ら捕らえるのです。

休憩時間に立ち聞きしたのは、討論会で同じグループの女の子が、夜のティータイムは別のグループに移りたいと言っている、という話でした。青ざめるような感覚の中で、見る間に気分が落ちていくのを感じます。

僕と同じグループでいるのが嫌なんだ。

実際そんな話だったのか、確認すべくもありません。しかし実際のところ、しばしば人に注目される資質も持ちながら自己の内面にとらわれたこの人間が、人の中に入ろうとして積極的に自己表現をした時、自己陶酔的で傲慢だという嫌悪に迎えられる。それが私の、心の底で抱え続けていた自己像だった

のです。

どうせ自分は一人だけ皆の中に入って行くことができない人間だ。回りの人々からも、ひとり善がりで、自己中心的で、うわべだけ親しそうにしながらも心を閉ざした、扱いにくい人間だと見られている。そう僕は感じているようだ…。

結局僕は、自分が嫌悪に値する人間であることを自分自身でよく知っていたという訳だ…。

キャンプの最終日。自己に閉じこもる気分におおわれた私の感情は、人々との鮮烈な疎隔感の中で硬くなっていきます。それでも外面だけは体が自動的に演じる温厚さに、疲労感が増してきました。自分は人と自然に一緒にいることが根本的にできない人間なのだ…。そんな自分に向けられる不信の怒りの感覚…。

人の罪が許されるという教会。その教会でさえも、人々は自分を軽蔑する存在だった…。小さい時の記憶が蘇ります。

母に連れられて教会のクリスマスパーティに行った時の記憶でした。くじ引きで私がピクニック用のお皿のようなものを引くと、司会者、「まんざらでもない」。一同が小さい私を見てどっと笑います。

小さな私には、人々がなぜ自分を見て笑っているのか理解できませんでした。皆が僕を笑っている。僕のことを変な子だと笑っている。僕はそこから逃げ出したかった…。

キャンプから実家に帰って数日の間、私はこの出来事を引きずった気分の中で考えていました。

やがてあの子に近づき得る自分を自ら完全に否定します。

僕はこの感情体験の中で、彼女との関係はやはり切られるものだ、という考えを持った。さっきは、彼女への今までの自分の思いは全て非現実的なものだったのだ、彼女との関係は全て終わったのだと、心の中で言っている自分を見出した…。

あの子への思いそのものが終わったのではないことは、私には十分に分かっていました。しかし大学卒業後の進路という、大きな課題が迫ってきています。前に進むためには、これ以上あの子への感情に揺れるだけでいることはできない。それを自分自身に対して宣言する必要がありました。

再び後期の授業であの子を見た時、自分はまた絶望感に打ちひしがれるかも知れない…。

そうなのだろう。少なくともこの大学にいる間、僕は心の中で彼女を求め続けるような気がする…。

そうして現実の人々の世界から浅薄な自己の身を引くことが、私が自尊心を保つための、せめてもの手段だったのです。

それによって自分が何から逃れようとしているのか、その真の正体を知らないまま…。

ひとりきりの世界へ

私はそれから東京に戻ります。実家に置いたままだったアルバムを一緒に持ち帰りました。

表紙に風景写真をあしらった高級そうなアルバムを買い、自分が生まれた時からの写真を丁寧に整理

し始めました。

そうして数日を過ごしていると、やがて写真は小学校6年の頃のものになります。湘南への修学旅行の写真…。

あの頃に自分を包んでいた感情が、一瞬よみがえる…。それはあの少女がその中にいることで作られた、ひとつの世界だった。僕はその世界と、その時の流れに入ってゆき、身を委ねる…。あの頃の感情がこうして蘇ったのも、あの淡い世界に身を委ねることによって得ていた幸福を、今なお求めようとする気持ちがあるからなのかも知れない。

ただ近くにいるだけで自分を幸せな気持ちにしてくれる、そんな女性を、そんな美しい世界を、僕は心の底で抱き続けているのかも知れない。そしてあの少女がそうだったのだ…。

再び一つの疑問が私をとらえます。僕は自分の心の世界だけでその思いを抱き、現実世界では彼女にさえ無関心な態度を取っていた。だが僕の心の世界にいる彼女は、澄んだ目で僕を見る、僕と心が通い合った少女の姿だ。そして実際、彼女と寄り添った時間、僕はそんな彼女を現実世界において感じていた…。

それは一体何だったのか…。彼女自身はどう感じていたのだろうか…。

彼女との時間、彼女も僕の気持ちの一部は共有していたように思える。一方で、現実世界では僕との関係は淡白なことを、彼女も分かっていたような気がする。そして少なくとも彼女は、僕のように彼女のことしか考えられないという風ではなかっただろう…。

そして私はある結論に至ります。

この夏に蘇った、10年前のあの淡い世界は、僕の心の中だけに存在したものだった。そしてあの少女は、その心の世界と現実との接点だったのだ。

彼女は僕との関係において何者だったのか…。

今はこう答えよう。僕の心の中で、心の世界と現実とがある時において接触していた。それはそのまま、彼女の心にも映されていただろう。

しかし、恐らく、彼女は僕よりもずっと現実の中で生きていた、と…。

現実世界の中で、僕は自分自身であることができない。その感覚が鮮明に私をとらえていました。

今の僕が現実にあの子に近づくことはあり得ない。夏休みの内に彼女に手紙を出そうという考えも、今のところ実行する気はない。

その理由は、今の自分が、ひとりきりの世界に住んでいるということだ。

根本的に、僕は誰かと共にいようという態度を取っていない。そして僕を制止し続けたもの、さらに僕にとっての最も大きな罪とは、それを偽って、〝人との世界〟の住人であるかのような態度を装う、その身を削るような浅薄さなのだ…。

ひとりきりの世界に住む自分。心に隠し続けたその命題を自らに宣言した時、私は何かの一線を踏み越えたようでした。

翌日私は、新しく一日を迎えることへの不安の中で目覚めます。漠然とした不安の中で朝を迎えたのは、対人恐怖に陥った高校時代、そして研究会サークル会長という立場の中で精神的安定を失った大学2年の終わり頃に次いで、人生で3度目のことでした。

大学の門のところで「しまのさん……さよなら」と小さい声で言ったあの子の姿が浮かんできます。その映像の中に現れる彼女は、僕に愛を求めている…。同じように「どうして行っちゃったのお」と言った彼女の姿を思い出して、僕は胸の痛みを覚えるのだ…。

あの子の面影を振り切るようにして、卒業論文にとりかかると、次第に戦闘的な感情が私をとらえます。卒論は、人間の全ての心理現象を、下位から上位へと階層構造の中で積み重ねられる神経構造として説明したもので、学部学生の論文としては異質な独自性のものでした。

自分の論文が画期的な重要性を持つものだと評価され、そのことを家族に話している自分の姿が浮かんできます。

空想が暴走します。自分が何か凡人が普通につき合える人間ではないと見られる。そんな目の友人に

対して浮かんでくる、確信の自意識の言葉。

いわく。僕は本質的には普通の皆と同じ人間なのだが、たまたま天才と評価されるような仕事を、この自分が行っているという状況だ。そう考えれば、この目まいのような高揚感が分かるだろう。神に選ばれたる者の恍惚と不安、そんな感じだ。

あまりにもひどい高揚感のために、そもそものきっかけの卒論を書けなくなっている自分に気づきます。

自己の真実に向かうという指針だけに導かれていた私にとって、もはや全ての感情が真実のものに思えていました。理性では自分の感情が現実離れしていることを認めても、それに見合うだけの特別な現実が、そこにあると感じるのです。

心の罠が、私をその手中に捉えつつありました。

見えない壁

そんな中、再びあの子への思いが一瞬かき立てられる出来事が起きます。誰もいない研究室で、置いてあったアルバムの中に、あの子が偶然写っている写真を見つけたことです。

新入学生へのオリエンテーション行事の一場面のようです。今から2年ほど前の…。去年演習チームが一緒だった頃と全く変わらない、長い髪と澄んだ目で溢れるような笑顔の彼女の姿…。私はその1枚

を引き抜き持ち帰ります。
写真を見ているうちに、あの子への思慕が強く湧き起こってきます。私は再び苦しくなります。
自分と彼女とは愛し合えるのではないか…。それを自ら押しとどめざるを得ない状況にある自分…。
どちらが本当の感情であるのか分からない…。

夜になると、あの子を思う穏やかな気持ちに落ち着いてきます。これが本当の自分の感情なのか…。
しかし彼女が僕を慕っているというのが、ひどく現実的に思えてしまう部分がある。現に僕は彼女が僕を慕っていると感じているのなら、このまま何もしないのは自分の感情を否定することになるのではないか…。
あの子に近づくことが、自分の進む方向として正しいという感覚が一瞬起こります。しかしその先はまるで深淵のようです。
翌日になると、写真を見ても強い感情が起きなくなっています。全てが自分のナルシスティックなプライドをめぐって起きたことではないか…。そうなら昨日考えたことも全て無意味になる…。
そうして浮かんでくるのは、卒業前にあの子に会う空想でした。ただ穏やかに、彼女に出会ったことが自分にとって大きな意味を持ったことを伝える…。

現実世界の中で自分の何かを踏み出すことが、巨大な壁のようなものに阻まれています。
現実にあの子に近づく行動を取る自分というものを、私は見出すことができません。

努力の受容

8月も下旬になっていました。あの子に近づき得る自分を模索する歩みが行き止まりかけていました。

私はただ目の前の生活場面で起きる、自分の心の揺れを自己分析し続けます。

そこには、自分の対人行動能力への劣等感が色濃く流れているようでした。

販売勧誘の電話に怒りを感じ、穏やかな口調ができず自己嫌悪で動揺する自分。アパートの共同玄関から自分の新品の靴がなくなり、疑わしい隣人にどう対処しようかと苛立ちの中で疲労していく自分。生きていくのが嫌になる……そんな感情さえ起きます。

その翌日、私は自分の進むべき新しい方向を見出します。

それは正しく、極めて重要な一歩でした。

私は仲の良い一学年下の学友と電話で話し、数日後に彼が下宿に遊びにくる約束をします。

電話で話している間、私は何となく苛立ちを感じていました。親しそうにお喋りする姿が自分に押し付けられ、意味のないお喋りをさせられているような苛立ち。それが彼の方にも気取られ、気まずい状態になるという感覚…。

もう彼に会いづらい……そんな感情さえ流れそうになる自分を、私は何とか立て直します。以前の私は、こんな心労の中で、上辺だけの親しさへの疑問を訴える空想をしたりしました。本当の人間関係って何だろう、と。

だが問題が全て僕自身が持つ基準からの拘束感やそれへの苛立ちからくるのなら、それを彼に表明したところで、彼は困惑するだけで、事態をますます悪くしてしまうだろう：。

ならば今は、自分の理想像通りに振る舞うのに徹した方が良いのではないか。現に僕は、無理せずあるがままの自分で人とつき合える状態というのを知らないのが現状なのだ。

ある程度の無理をしなくてはならないのは仕方のないことだ。

失われていた他者像

私は何かの光を見出したかのように感じました。彼を快く迎えるために、彼に見せる北アルプス登山の時の写真の整理に熱中し始めます。そうして友人のために積極的に行動している自分への高揚感も感じます。

しかし次の瞬間、一瞬にして高揚感が冷まされる思考が私の中に起きます。

「僕は一体何を求めているのだ」。

私は何か幻滅を感じました。そのあと、もの悲しい気分に包まれます。この感情の変化が何を表しているのか、僕には分からない‥。

断片的な思考が流れます。もしあの子に現実に会ったら……色んなことが彼女の僕への愛情を冷ましてしまう‥。何よりも僕がこうして自信を持てないでいることが、何よりも彼女に軽蔑される気がする‥。彼との友情は表面的でしかない‥。表面的に会話が弾んだから会い続けているだけなのだ。彼は本当の僕に好意を持っているわけではない。表面的に「お喋りを楽しむ」ことを要求するだけの、強圧的存在のように感じてしまう。それに反発する自分‥。

それは、「現実」という感覚でした。何かを失った現実‥。心の表面しか見ない他者像‥。僕の中には、表面的に楽しそうに振る舞うことを求めて、本当には何の思いやりもない他者像というのがある。それは既に幼少期に、酒を飲んで騒ぐ大人達に抱いたものだった。僕はその他者像を、ほんとうに僅かの例外を除く全ての人間に抱き続けていたのだ‥。

去年の演習授業の頃、緊張した身構えの中で表面上だけ皆に合わせていた自分‥。そんな僕のことを、僕がチームを抜けた後でも、好意的なものだろうが皆でよく噂していたらしい。あの子も僕のことを表面的に見ただけではなかったのか‥。

そう考えて僕は彼女への思慕を否定し、感じなくなる‥。

夕食に出ると、置いてあった里中満智子の漫画が自分の感情に重なります。美しいことへの憧れ…。いつまでも美しくありたいという願望。幸福な家庭という夢を幻滅させるような現実。そしてひとりで生きて行こうとする女性…。

夕食後、アイドルの歌番組を漠然と眺めます。

自分には、あんな風に積極的に人と交わったり言葉を交わしたりということを、自分自身の自然な願望や態度としている自己というものがない。僕にとってそれは義務感や、自分が人前で畏縮する人間ではないというプライドからでしかなかった…。

そんな自分には、決して人と楽しい時間を過ごしたり、幸福な家庭を作ったりすることはできない…。

心の罠の中へ

やがて私の中に、重く静かな感情が流れ始めます。

僕は悪い精神状態にいたというわけではなかった…。ただ自分の人生への意気込みが徒労であるような気がしていた。そしてごく穏やかに、自殺という考えが浮かんでいた…。

そうすれば、この精神的な疲労感も、ということはやはり悪い精神状態にいたということだが……それもなくなるだろう…。

もはや、悲しむ母の姿なども、それを押しとどめるものと感じることはできませんでした。

なぜなら、これは僕の生活の問題なのだから。自殺も〝生き方〟のひとつなのだ。それ自体を絶対的に否定しようとしたって無理なことだ。

漫然と自殺念慮に耽ることを善しとしない理性も私にはありました。今幸福感を感じられなくとも、一応生きる努力を続けることだ。幸福感を持たない人間への軽蔑というものもあったのだろう。他の社会人に感じる惰性的な生き方という軽蔑も、それを外化したものかも知れない…。

しかしそれはあまり役に立つものではありませんでした。

白いシャツにネクタイをつけて、スーツを着て、ある程度さまになっているとは思う一方、皆の注目を奪うような容貌の自分というものを求める気持ちを、何となく断念する気分を僕は感じた。そして自分はごく普通のありふれたサラリーマンに……。

次に僕は、もはや仕事や将来というものに、これまで持っていたほどの情熱を感じられなくなっていることに気づいた。そんな自分が果たして採用されるのだろうか…。以前参加したマスコミ就職講座の〝元気な学生〟達を思い出し、彼らに比べたら、自分は消極的だという評価をされるような気がした。

将来の目標を見失った自分をなじる父や兄の姿が浮かんできます。いっそ見せつけの自殺でもしようか。そんなことをしたって何の役にも立たないことは分かっている…。

全てが単なる重荷にしか感じられない。死んだ方がずっと楽だ。自殺するとしたら、やはりタイマーを使っての感電死が最も適切だろう。この考えには現実感を感じる…。

翌朝、私は苛立ちの中で目覚めます。高校時代の写真を見て、今の自分が全く劣っていることを〝確認した〟。

こうした悪い精神状態の中で、僕は、こんな自分があの子に愛されることなんてない、と自暴自棄的に考える。

だがそれは一種のひねくれであって、そう考えながらも実は彼女は僕を愛していて、自分のしていることはただ彼女を困らせているだけだ、と心の片隅では感じているのだ…。

午後買物に出かけた時、私の精神状態は最も悪いものになっていました。

何もかもが無意味に思えた。全てが単なる重荷か義務でしかなかった。卒論の残りも単なる苦痛としか思えないような気がした。結局、本当の自分の願望でやっていたのではないような気がした…。

最悪の精神状態の中で下宿に戻ると、玄関でばったりと、紛失した靴について疑惑の隣人に出くわします。

もしその隣人に会ったら、落ち着いて冷厳な態度で…。そう考えていた姿はそこにはなく、私の実際の姿は、体が震えながら追従的に愛想良さを演じるのが精一杯の、不様なものでした。

しかし私はそんな自分に幻滅しながらも、何となく気が楽になるのを感じます。

少し我に返るように、前を向くことのできる自分を確かめます。今、僕にとっての生活の目標は、や

はり一つは社会の中の一員としての仕事を通して、人間として成長して行きたいということだと思う。
そしてもう一つ、幸福な家庭を作りたい：。

私は不様でした。それでもその姿は、心の罠の中で陥りかけていた冷酷な自己像に比べれば遥かにましな、現実世界の中で人に接している、暖かい人間の血が通った姿だったのです。

私をおおった重苦しい感情は、このあとしばらく見えなくなります。
しかしそれは消え去ったのではなく、心の闇の巨大で冷たい牙が、私の全てを飲み尽くそうとして力を蓄えようとしていました。

私の進んできた方向は、間違ってはいなかったはずです。一体どうしたのか。

確かに私の進んで来た方向は、正しいものでした。しかし私は2つの大きな誤りを犯していました。ひとつは、全ての感情を信じ切ってしまったことです。私は自分の心の中心へと近づいていました。しかしそこには、今までその真の力を隠していた、巨大な心の罠がひそんでいたのです。
今まで私の人生を支配し、そして苦しめ続けていた自己。失わされた世界を見返すために、なるべき自分の姿を掲げ、走り続けようとした自己。それは、ありのままの現実を生きようとして立ち上がり始めた無垢な自己に、その座をあけ渡すことを決して許そうとはしません。この心の圧制者は、そのため

ならば自らの人生を捨てることをささやくのです。

そしてもうひとつ、私の犯した誤りとは、この戦いの先に何が起きるのかを知らないでいたことです。

しかしこの2つとも、当時の心理学の限界でもありました。遥か後に、私は自ら作る新しい心理学によって全てを知ることになります。

私の中で力をつけ始めた無垢な自己が、この巨大な心の罠との本格的な対決の時を迎えます。敵は強大でした。私の理性はこの敵を知り、無垢な自己に力を加担しなければならなかったのです。しかし私の理性は戦わずして、この心の罠に敗れていました。

残された無垢な自己は、私の理性という護衛兵を失ったまま、この心の罠との戦いを開始します。私の心に、巨大なうねりが始まろうとしていました。

10章

前進と後退

（大学４年９月上中旬）

反攻

大学4年夏休み前半の8月が終わる頃、ありのままの現実世界での努力を受容した私に、心の圧制者は静かな刺客を送り出していました。

最悪の精神状態の中で疑惑の隣人に出くわし、不様な自分の姿を目の当たりにした時、私の気持ちはむしろ少し楽になります。それは心の罠の中に見えた冷酷な自己像に比べれば遥かにましな、暖かい人間の血が通った姿だったのです。

それから私の思考に断絶が起きました。自己分析の内容は途切れ、ただの日常生活の中で日記もほとんど書かない2日間が過ぎて行きます。

9月に入った日、少し続いていた寝酒を前日はやめた効果もあり、私はさわやかな朝を迎えます。そしてこの数日間の自分を振り返りました。

ここ数日、僕の精神状態は良くなかった…。

就職への重圧感などから、無気力な感情と、そんな自分への自己嫌悪が起きていた。

今朝はもう脱出していると言えそうだ。むしろ、さわやかな朝を迎えたことに、一種の自己満足も感じる。こんな自分が人から賞賛されるという感覚もある…。

私は相変わらず心の罠の中にいました。自分でそのことに気づき始めてさえいました。こうして自己分析していること自体が、何かの自己理想化像を実現し、他人に優越し勝とうとする衝動の中にあるのかも知れない。その衝動が捨て去られる時、ホーナイが指摘するように、自己分析を続けていいものか真剣に問う時というのが訪れるかも知れない…。

私の自己把握は極めて正確でした。しかしやがて何が起きるのかの推測は完全に的を外れていました。そんな生易しいことではなかったのです。

それでも現実を生きようとする内面の力は今、息を吹き返し、本格的な開放の時を迎えます。

この日一学年下の学友から電話があり、下宿に来るのは3日後ということになります。受話器を置いたとたん、不安が湧き起こります。自分が無理して親しくしていると感じ取られることへの不安。それを和らげようとさらに無理な演技をする拘束感に耐えられず、離れたくなる…。しかし私はそのあと、不安よりもむしろ積極的な気分を感じました。多少の無理は許容して、彼に明るく接していく。

今度の積極的な感情は、崩れ去るものではありませんでした。

私は再び、あの下級生の子に近づこうという気持ちを感じました。8月初旬の思いが、さらに現実へ

と近づきます。

あの子への愛情が時間をかけて形づくられ、一時的なものでないこと。彼女に出会ったことで、今の自分にまで成長できたこと。実際に彼女に会って、彼女への愛情が不本意に消えてしまう危険はないように思える。

同時に誇大空想も流れます。色んなものを彼女に与え得る自分の姿。自分の容貌。人生に対する態度。彼女のこれからの長い人生への生き方についてアドバイスする自分の姿…。

前進

それから私は、上昇した気分の中で、大学卒業後の進路について考え始めます。

就職はマスコミ系を意識しており、まず大手広告代理店を考えます。外面内面共に揃ったトータルな人材として自分をアピールする。

高揚感が疾走し始めます。自分がそこに就職できるのが当然のような感覚。優秀な社員としてスーパースターのような輝きの自分が、あの子に愛される。

私の理性は、数日前の自分と、この高揚感の中にいる自分との極端な違いにも気がつきます。

今はまさに情熱的なやる気を感じたが、あの時は全てが重荷にしか感じられなかった。この違いは一体何だ。

あの時は、皆に注目される自分という感覚が消えたことが、やる気をなくしたきっかけになっていたようだ。皆に注目された時にやる気を感じるということか。ではそれを抜きにして自分が本当にやりたいと思っていることは何なのか…。

自分の中には、一刻も早く「本当の感情」を見つけ出さなくてはという焦りのようなものがあるようだ。反対に、感情が本物でありさえすれば全てが解決したかのような気分になってしまう。

どこかで仕事をしたいとか、あの子に近づきたいとか。その時、実現までに実際に何をやるか、ということはもはや頭の中から消えているかのような感じだ…。

考えているうちにかなり疲れてしまった…。

日が替わると、今度は大学院への進学意欲が起きてきます。

自分なりに捉えた心理学について知識を人々に伝えるということに、非常に大きなやりがいを感じる。教壇に立つ、魅力的な自分の姿。教室にはぎっしりと生徒達。僕がキャンパスを歩く時は、いつも同僚や生徒達にとり囲まれている。他の教授からは、〝天才の出現〟と評される自分…。

こうして誰もが魅力を感じるような自分の姿というものから、やる気の一部も来ているのかも知れない…。

「神経症的人間」の終焉

こうした前進への気分の中で、私は自分の心の治癒が本格的段階に至ったのを自覚しました。以前の私には明らかに、人の視線への病的過敏さがありました。しかし今は、街の女子高生や若い女の子の視野に自分が入っていくことに、全く不安や躊躇のような感覚を感じません。女の子に見られたと感じた時相手を見返そうとする、今思い返すと陰険な衝動もない。

今はもうはっきりと、街の人々がただそれだけのものとして見える。男も女も。若者も年寄りも。

感情は流れ出るもの

私はもうひとつ、大きな新しい感覚を見出します。「感情は流れ出るもの」だという感覚です。それは私の新たな旅立ちを示す道標ともいえるものでした。

それは一学年下の学友が下宿に遊びにきた日でした。私は少し緊張していて、それでいて表面的な穏やかさを決して崩そうとはしない態度でいました。

何だか外見的には3年の初めの頃と同じだな、と私は感じます。

人々に対する自分の姿は、この1年半で結局変化はなかった……。いや変化や動揺はあったけれども、進歩はなかった……のかも知れない。でも深い部分において、自分は全く変わったという気がする。それはもちろん良い方に、自分が確実なものになっているということだ。

今日も疲労感はあった。それはこれから取り組まなければならない問題だ。だが今まで自分が目指した目標そのものに、何か誤りがあった気がしてきている。

人に対する感情が本当のものか。それは偽りの愛ではないか。そんな厳しい目を僕は自分自身に向け続けていて、感情が深いところから現れてくる出口を自ら押さえつけて、そもそも自分にどんな感情や願望があるのか分からなくなっていたのだ。

今は、人に対する感情や願望が、本来は自己規制の全くないところから出てくるものなのだという感じがしている。

そうだとすると、その感情とは、非常に流動的なものだ。

今まで自分はその流動性を恐れていたのだ…。

戻ったイメージ

ふた月ほど遡る大学4年前期、あの下級生の子への感情を通して自己の深奥へと向かい始めた私に、奇妙な現象が起きていました。

あの子の実際の顔や表情をよく思い出すことができなくなってしまったことです。

最初の兆候は、私が離反の要塞の中で「心の自由」を獲得しようとしていた日、思いがけずあの子とすれ違った心の動揺の中で起きていました。あれは彼女だった。いや、表情がよく思い出せない…。

そして前期が終わりに近い木曜の授業の日、出席票に名前が書かれたあの子の姿を求めて教室を出た時、私の中であの子の現実的なイメージが失われたのです。あの子のイメージはかげろうのように過ぎ去り、私が夢の中で追い求めた美しいものの象徴のように漠然としたイメージになっていました。

私の中で、あの子の現実感そのものが失われていました。今現在のあの子は、一体どんな姿だったのか。私に思慕を向け、やがて硬い私を前にうつむいて通り過ぎたあの子のイメージ：。服装が派手になり、私が愛しさを感じた同じチームの頃の面影を失った、他の女の子と似た女性のイメージ：。

変化するあの子のイメージと、変化する自分自身の感情。それが私の行動を不可能なものにした一つの原因でした。

「感情は流れ出るもの」と感じた翌日の9月上旬月曜日。私の中で、ついにあの子に近づく意志が現実のものになります。

あの子に近づこう！　この考えが確実になっている。

心の歯車が、新たに回り始めます。一瞬湧き起こる、自分がとんでもない厚かましいことをしようとしているという不安。理由の分からない制止感。

奇妙な空想が湧き起こってきます。僕があの子に近づくのを躊躇していたため、手紙を出した時すでに彼女は別の男と恋人同士になっている。その男は包容力のない男で、彼女はその男とつき合うことで生気をなくしてしまった。僕の手紙を読んで、幸福になる夢が再びかき立てられるが、男への思いやり

から別れることができなくて泣いている。

久しぶりに大学に行くと、偶然3人の学友と会います。女子学友と話している時、私は内心の緊張感を気にし、男子学友と話している時は、少し高揚感の中で純真そうに話す自分を、何か見せびらかしていたと気になります。焦燥感が私をおおっています。

〃人との世界〃に踊り出た緊迫感とも言えるものだったのでしょう。あの子のことを考えても、〃どうでもいい〃ような感覚。あの子に近づくと決めたことはどうなったのか。何とも嫌な、中途半端な気分です。

下宿に戻り、今日返そうとして結局返さなかったあの子の写真を見ると、あの子への熱い思いが湧き上がってきます。

私はまた苦しくなってきました。「最近で最も苦しい時間」。あの子への強い思いを抱きながら、それを自ら抑えるものがあることが、苦しみを生み出しているようだ…。

私は苦しみながら問います。本当の愛とは何なんだ！　どうすれば自分に愛の能力があると確信できるんだ！

やがて突然閃光のように、ある自覚が起きます。

僕は自分に愛の能力がなければならないという強い圧力をかけている！

その瞬間、苦しみがぷっつりと消えます。

突然嵐が去ったように、楽な気分になります。

あの子への手紙の下書きを書こうと、机に座り、あの子を思い浮かべます。

不思議なことに、この3か月私の心に映されていた、私との関係で何か思いつめているあの子の姿が消えています。浮かんでくるのは、以前のままの、話しかけると喜んで応じてくる、ただ普通の女の子としてのあの子の姿でした。

1通目の手紙

私は今まで考えていた手紙の文章を、鉛筆で下書きします。大体こんな内容でした。

手紙を出したのは君との関係をこのままで終わらせたくなかったから。君の方でも僕のことを気にかけてくれているのを少し感じていたので。

また君が変わって欲しくないと思った。実際君は大分変わったようですね。僕自身大分変わりましたが。純真な心は失って欲しくないし、僕自身失いたくない。そのためには、自分の夢の適切さを常に検討しながらも、可能性を信じることです。

実験が同じ頃をよく思い出します。でも現実に恵藤さんがどんな人なのか、自分はよく分かっていないのだなと感じます。僕自身、今は自分自身に取り組むことに四苦八苦しています。君が実際にどんなことを感じていたのか、教えてくれませんか?

今読み返すと冷や汗が出ます。

この下書きは、その後便箋に書き写されることはありませんでした。

現実への旅立ち

翌日の火曜日、私はいよいよ将来の進路に向けての活動に着手しました。

最初は、間もなく秋に入学試験のある大学院です。戦闘的な高揚感の中で、出願書類を書き始めます。自分の卒論を読んで興奮する神経学教授の姿。精神分析学教授を論駁する自分の姿。すぐ私は疲労消耗してしまいます。

自分の正しさの証明にまさに全力を使い尽くすといった感じだ。自分が少しでも力を抜けば負けだというような緊迫感がある。疲労感はそこからくるのか…。

将来の進路という現実に踏み出した私に、今まで空想の世界でおおい隠していたさまざまな感覚が湧き出ていました。

一瞬頭をよぎる、あの子を勝手に自分に思いを寄せる女の子として描き上げ、ひとりよがりの尊大な愛情を押しつけている自分という感覚。そんな僕に怒りと軽蔑が向けられる…。以前とはもう違うあの

子が僕の手紙を見て、薄気味悪く感じる…。

彼女の気持ちはどうなのか。実際に会ってみないと分からない…。

寝しなには再び熱い感情が湧きます。いや、愛を求めたのは僕自身だ…。彼女の笑顔と優しさが欲しい。彼女の傍にいたい。なぜ僕はこの気持ちを認めることができなかったのか。この気持ちを直接手紙に書く…。

水曜そして木曜と、私の心は次第に混迷の姿を示し始めます。

あの子に近づき得ると一度確実に感じた直後、突然消えているあの子への感情。人々に迫害される夢から目覚めて、発作のような悲しみにむせび泣いている自分…。電車の中で見た、おどおどした態度の女性を見て湧き上がる破壊的な軽蔑感…。

金曜日、秋期大学院受験に早くもつまずきが起きます。その大学院では教育科目を履修していないと受験は難しいとのこと。私は教育科目を何も取っていませんでした。

何としてでも自分の業績を認めさせ便宜を図ってもらおうという衝動。やがて大学を1年留年して教育関係の授業を受けるという考え。

下宿に戻ると、大学院への意欲が薄れています。出版なり広告なり就職をして、平凡な生活の中にもやりがいが感じられるのではないか。

午後、静かな平穏の中で人と親しむ暖かさを思い浮かべながら過ごします。こんな穏やかな気持ちの中で空想する、お茶を飲みながら人とお喋りする暖かい雰囲気…。あの子を思い浮かべ抱く、穏やかな思慕。これが僕にとって最も本当の感情なのかも知れない。

思考が次第に自分の中に沈んでいきます。自分は誰に対しても積極的に交流していけるような性格ではないのだ…。自分の中に閉じこもる性格の自分…。自分はどこへも就職できないのではないか…。

今僕は軽い絶望感を感じたようだ…。

こうして、9月頭の10日間ほど続いた前進への勢いが、行き止まりに近づきました。

私の心の中は、立ち止まった人間が見る風景へと変わっていきます。

変わったのは自分だった

この夜、私の心は過去に向いていました。この1年半が思い返されてきます。

私はあの子のイメージの変化について考えていました。再び戻ってきた、去年チームが同じだった頃の少女のように純真だったあの子のイメージ。服装が派手になり別人の面影があるイメージ。そしてうつむいて通り過ぎた、心を閉ざしてしまったあの子のイメージ。

同時に私の心には、3年はじめからの自分自身の変化が映されていました。表面的な温厚さを捨て、

自己の内面に向かい、ひとりきりの世界へ。
僕があの子に見せる態度も、寒々としたものになっていただろう‥。

その瞬間、なぜあの子の態度が変わったのか分かったような気がしました。
僕は自分自身の変化に応じて相手の態度も当然変わったのを見て、相手がまるで〝人が変わった〟かのように感じていたのか！
自分の馬鹿さ加減への笑いがこみ上げてきます。涙と一緒のような笑いが溢れ、そして静かになります。

あの子のイメージがさらに現実感を増してくるのを感じました。
僕は寛大そうな態度だった。優しくしていれば彼女も喜んでいた。それだけだったようなイメージ‥。

近づく現実

翌日起きた時、私を醒めた感情がおおっていました。
自分がなぜあの子に近づこうとできなかったのか、ひとつの理由がはっきり分かった。僕は人に愛想良くする時、何よりも自分自身が嫌になっていたのだ。
あの子に対してもそうだった。あの子に対して本当に心の底から自然に現れてきた感情を表現する以

外のことをしている自分自身が、僕は嫌だった。

そうして僕は人に近づくのをやめた。もし彼女以外の人間だったら、その時点で相手との関係もよそよそしいものになった。だが彼女だけは違った。彼女が僕の中に残したものだけは消えなかった。

ホーナイについて学生達に教えたりしながら、ひとりで生きていく…。

それが今僕の抱くことのできる、自分の将来像だ。

それでも、胸の中にあの子への思いが溢れる。うつむいたまま僕の横を過ぎて行ったあの子の姿が、目の前に浮かんでくる。変わったのは僕の方なのだ。

街に出ると、私は女子高生の顔などをひとりひとり見入るような衝動を感じました。偽りのない感情に生きる自分…。自分がただ真実に生きる、威厳ある人格と容貌だという感覚…。

あの子への狂おしい思慕が湧き、少ししてそれは消えます。安定した現実感の中で、あの子に手紙を書こうとします。なぜか筆が進みませんでした。

あの子との関係が、急に現実味を帯びて感じられてきました。

彼女が実体として感じられるようになった。現実に何の関係もないのに愛を寄せ合っているというような感覚が消えた。

そうしてあの子が現実的に感じられると同時に自覚するのは、自分が彼女に与え得るものの貧弱さだった。

僕には、実質的な感情表現というものは、ほとんどなかった。実際に彼女に会ってみて、僕は会話をうまく持たせる自信がないのだ…。

後退へ

日曜日も一日中あの子への感情について考え続けます。なぜか初恋の女性が思い出されても来ました。

あの少女の落ち着いた美しさと優しさに抱いた自分の愛情が、もはや自分の人生で超えることができないもののように思えてくる。変な話だ…。10年前のあの少女が、20歳のあの子よりも大人っぽかった感じがしてくる…。

自分は今でも初恋の女性を愛している。それも正しいのかも知れない。

でもそれは僕の心の中だけのことであって、現実の他者との愛とは別のことだ。現実の愛は、自ら自分の感情を相手に誠実に伝えていくことの中にあると思う。

その点で僕はあの子を愛することは現実にはそれほどできなかった。それができたのはあの子の方だったのだろう…。

月曜日、健康診断のため大学へ向かいます。9月も半分が過ぎようとしていました。

あの子に対する自分の感情が分からない。はっきり彼女を愛せるという確信のないことが、彼女への

行動を全て思いとどまらせてしまう。

僕の行動は、心を通わせた相手に対して取ろうとするものか、そうでない表面だけのものかの、どちらかしかないのかも知れない。2つの間には、中間も移行もないのだ。

大学はまだ夏休み中でしたが、沢山の学生がいました。

私の感情はすさんだものになり始めていました。女性を見ると性的な刺激だけが視界に入ってくるように感じます。

研究室に寄ると、よく見かける明るい女の子がいます。僕は彼女に鋭い視線を向けていた。彼女と何か真剣な話でもするのを空想した。挑戦的な感覚があった。

敵が大勢いる中を、鎧をつけて歩いているような気分。

親しそうな男女を見た時、何とかして彼らの関係の浅薄さを軽蔑しようとした。自分の〝本当の愛〟を求める態度が、他人やあの子の尊敬を得て、他の男達に勝つ‥。

つながらない過去

火曜朝起きた時、私は沈滞した感情の中にいました。すさんだ性欲の感覚を感じます。

女の子への性的な関心、それを満たすための自分自身の容貌や性的魅力。それだけが自分にとって本当であるかのような気分。こんな自分は、あの子と一緒だった頃の自分とは、あまりに違いすぎる‥。

だから僕は、自分が彼女と親しんだり彼女を好きだったりしたことを、すべて過去の出来事として切り去ろうとする。もう関係のない他人として彼女を見ようとする自分を思い描く。
そしてふと、何の疑惑も抱かずに困惑する彼女の姿が浮かぶ。
そして僕は心の痛みを覚える…。

書類の用事で、前の大学に行きました。入学して間もない頃を思い出します。
僕は落ち着いていて、頭の切れる人間のように生きていた。仲間がすぐにできて、生き生きとしていた。2つのサークル活動の日々。大学祭の頃…。そして写真部ではあの問題が起きて……。
あの頃の自分が何か素晴らしく活気に満ちた、〝良い時代〟を生きていた気がする。
思い出すと、この4年間の大学生活が、とてつもなく長く、さまざまな出来事に満ちていたような気がする。その中で生きていた自分が、何か今の自分とは別の人間であったかのような錯覚さえ感じる。
2年の研究会サークルでの生活。サークル室で議論をしたり酒を飲んだりした日々…。そして編入学。あの子との出会い。ひとりきりの自分へ…。

こうして今の自分から、あのさまざまな人々の中で生きていたさまざまな自分を思い返す時、僕は、本当の自分は何なんだという思いに取られる。
全ての出来事がまるで夢の中のことだったかのように、今の自分との結びつきを感じることができない…。

僕はそれを探し求める。

泣き虫になった僕

翌日水曜日。9月が後半に入ります。

私は大学で、大学3年夏休みの合宿以来の親友に会います。色々な話をする中で、名前は出さないままあの子への自分の気持ちについて少し話します。私がその話を僅かでもした唯一の人間が彼でした。深刻そうにならないよう話していると、自分が何か普通の恋愛感情の話をしているような気分になってきます。

彼は、私を前向きな人間だと、だからきっと実際に彼女に近づくと思う、と言います。

別れた後、私自身そう思えてきます。とにかく前向きに行動するのが自分だ。

しかし同時に疲労感を感じました。自分が絶えず前進していなければならないと追い立てられているような疲労感…。

その後下宿に帰って、懸案の秋期大学院受験の準備をしようとします。

疲労感ばかりで、はかどりません。秋の受験は諦めるか。そう考えると少し疲労感も和らぐ。

一体自分にとって大学院へ進むとはどういうことか。自らに問います。

僕の心理学への本当の関心は、ホーナイを暇な時に読む程度なのだ。実際行きたい大学院などないの

が本当の気持ちなのだ…。

そう考えた私は、当面の目標を就職に切りかえます。今はまず自分で食べていけるようになるのが重要だ。そして暖かい自分の家庭が欲しい。

すぐ就職雑誌を買ってきて、目を通し始めました。「会社訪問で良い印象を与えるために」「遅れを取らない行動を」そんな内容の記事が満載です。

しかしそれをすぐ放り出してしまいます。

焦りと不安。

気の焦りと疲労感ばかりが湧き上がってくる。マスコミ時事英語の問題を見た時には、本当に頭が痛くなる感じだった。ほとんど分からなかったのだ。

就職への準備で大きな遅れを取ったことは、まぎれもない現実でした。今まで私は自分の内面のことで精一杯で、そもそも大学卒業後の進路について現実感がなかったのです。何もせずに過ぎてしまった時間の長さが、私の脳裏をかすめます。

重苦しい感情が流れて、うまく考えることができなくなっています。

やがて私は救いを求めるかのように、机に座り日記に向かいます。自分に今訪れていることは一体何なのか。

僕は、全てを放棄してしまいたいという感情に陥ったのかも知れない。例えば〝一流企業に入るこ

と〃をだ。その圧力的な基準に背を向けようとした時、もう自分には〃落ちこぼれた〃ところしかないという自己像が現れていた。

同時に僕の中には、あの子から見放されるというイメージが起きていた。僕は「一流企業」という圧力的基準にあの子を結びつけていたのだ。条件のいい男を見つけて結婚して安定しようとする女の子として。僕自身がそうしてすぐ結婚してくれる女性を求めていたのかも知れない！　それがあの子の別のイメージを作り出し、あの子への行動を不可能にしていたひとつだった。

「一流企業」という観念にとりつかれて前進しようとしていた時、僕は、自分の心の中の、安らぐ故郷のようなものを見失っていた。

僕はそれを思い浮かべた。小さな会社でもいい。そこは〃僕の場所〃だ。

心の故郷：。それはこの夏に蘇った心の世界でした。あの淡い日々を生きていた自分が、大人になったあの少女と一緒に、穏やかな日々を送っている：。場所は小さくて暖かい雰囲気の事務所のようなところだ：。

その〃心の故郷〃の中にいる人が、絶望におびえている僕に言う。〃いいんだよ。こんな小さなところでもいいんだよ。〃

僕はそこに戻り、自分のために泣くのだ！

私は泣きながら寝床につきます。やがて私はあの子との性愛を思い描きます。

慰めあう官能の空想に浸った後、私は〝僕の場所〟に戻った自分の心への満足感を感じます。心の故郷を見出し、自分にふさわしい仕事と愛する女性を持つ自分…。人の目にはそれが羨ましく映る…。

窮地

翌日木曜日。私の感情は少し醒めたものでした。

心の故郷に戻った自分というのは、あるいはひとつの自己理想化像なのかも知れない…。

あの子は僕をその〝心の故郷〟に連れ戻した。しかし同時に、あの子はやはり〝現実〟の中のひとりの人間でしかないのだ。

きのうの空想の中の自分は、あの子に慕われていると当然のように考えて触れようとするだけで、何だか彼女を食いものにしているような気もしてくる。

求人情報を見に大学へ行きます。朝から女性に対して〝欲求不満〟な自分を感じます。

前の大学の求人情報も見に行きます。すれ違う女性を、性的魅力という色メガネで見ている自分。

以前研究会サークルにいた下級生に偶然会います。名前は忘れていました。ひとしきり明るそうに振る舞ったあと、彼への親しみの感情などない自分の心を見ます。自分の態度はまさに〝Out of sight, out of mind〟でしかない。

僕はshallowな人間だ。自暴自棄的な気分が湧いてきます。こんな自分があの子に近づくことはそぐわない。

自分の研究が認められて、遠くの大学から招きを受け東京を離れる…。そう思い浮かべた瞬間湧き上がる、あの子を失いたくないという強い感情。

〝僕の場所となるべき手頃な広告会社〟など、ありはしませんでした。小さな会社の求人情報を通して見えるのは、従業員も少なく給料も安い、薄汚い事務所の中の拘束的な人間関係…。

偶然会った学友に聞くと、大手広告会社も回り書類などを受け取っているらしい。

自分は完全に立ち遅れている。この分ではどこへも入れないかも知れない。マスコミ系以外の内定を取っておくべきではなかったか。

今からメーカー系の就職活動が可能か、就職課に相談しようと思い立ちます。

就職課に行くと、担当課長の顔が見えます。その瞬間、私は踵を返して出ていきます。自分が蔑まれるという感覚。それに反抗するかのような虚勢の姿勢。

下宿に戻り、自分に向き合います。

僕は生活能力のない自分という自己像に動揺させられて、本当の自分というものを見失っているのではないか。

心理学の教員になるという以前の意志も、それによる心の支えも、僕はもう全く失っている…。

結局僕には、競争的な社会を勝ち抜くための自分を鞭打つような努力の全てが、自分の願望とは別のものに感じられるのだ。

実際、僕はもう何もやりたくなかった。それでは生きて行けないのなら……。

再び自殺という観念が浮かんできます。時間が欲しい。自殺を考えるほど深刻な問題なのだから。そう母に訴えるのを空想します。

悲しくなってきます。それから前の日と同じように、私はしばらく泣いていました。

やがて私の心の中に、重苦しい感情のうねりが行き交います。私は頭を働かせることがよくできません。

少しして落ち着き、机に座って日記に向かいます。

今は何とか落ち着いたが、さっきは本当に苦しかった…。

色々な感情が現れた…。

自分は何をするにしても、就職にしても、〝愛〟にしても、自分を駆り立てなくてはだめだ、という感情があった。〝やる気〟を見せなければ、人は僕を受け入れてくれない。

〝やる気ある自分〟という圧力的な自己イメージがあまりにも漠然としていただけに、それに対する抵抗は、完全に不活発な自己像を作っていた。

今思うのだが、積極的に自分を示さなければならないという拘束ほど、自己を深く押し込めるものが

あるだろうか。例えば小さな子供を前にして、僕は積極的に愛情を示さなければと感じる。その拘束に抵抗し、結局子供の愛情を失う。

その抵抗の底には、本当は自分には何も幸福なものは与えられないという感情があった。

あの子への感情も動揺した…。他の人は考えられない重要な相手として互いに求め合っているという空想が、彼女への思慕をかき立てる。その一方で、自分達は単なる知人であり、そのような態度を装わねばならないという自制。

そして何よりも、こうしてあの子に葛藤を抱いていることそのものが、何かあまりにもひとりよがりで、本当の愛などではないように思えた。

悲しみの人生

その夜私は一度眠りに入りますが、すぐに目を覚まします。

午前3時半。起きてしまった…。

静寂の中で漠然と思い出すのは、中学や高校の頃雑誌で読んだ性体験の記事でした。何となく性的な飢餓感が流れるのを感じます。

あの頃の自分が、そうした話に異様なほどの興奮を感じていたのを思い出す…。

だが、僕は結局そんな体験を持つこともなかった。全てが空想の中で行われたにすぎなかった。今も性的な飢餓感を感じながら、何もせずに終わっている自分。それは僕が浅薄な異性関係に軽蔑を向けた

からでもあった。だがその代わりに精神的な深い愛を得たわけでもなかった。

立派に働いているビジネスマンも、僕にとっては夢のひとつだった。それも今は遠ざかって行く…。結局このまま本の知識だけを相手にするような生活を送るのか。

恵まれていると羨ましいような目で見られたこともあった。それを否定するような気難しい僕の表情は、単なるポーズに見えたかもしれない。しかしその内側で、僕の心は遥かに多くのものを失っていた。

損な人生だ…。考えているうちに、また泣けてくる。ただ、あまりにも悲しい。自分の人生が。

あの子に手紙を出すのを空想する。自分の辛さを彼女に分かって欲しい。

でもそんなことをしていいのか。〝何も気にしない〟風にしていなければならないのではないか。その感情が僕を制止する。

この日私は再び帰省に向かいます。就職活動で必要な書類の用事でした。

実家へと向かう電車に揺られながら、大学を1年間留年するという考えが現実的になってくるのを感じます。

今の自分は混乱していて、そこから来る苦しい嫌悪感が、僕に時間が必要なことを告げているように思える。それに1年留年してあの子と一緒に卒業するようにすれば、もう少し安定した気持ちで彼女に近づけるかも知れない。

それが今の自分が、〝自分自身のために〟本当にできる唯一の事なのかも知れない。そんな思いが私の目に涙をにじませます。

涙に暮れることが多くなりました。

今まで私がその中で生きようとしてもがいていた、そして同時に私を苦しめてきた生き方というものが、もうこれ以上続けることはできない時が近づいていました。

私に、人生の危機が近づいていました。

11
章

病んだ心の崩壊

（大学４年９月下旬）

社会への願い

大学卒業後の進路、そしてあの下級生の子への自分の気持ち。2つの現実に近づき始めた私の心は、見る間に窮地へと追い込まれていました。

9月下旬に入った金曜日、帰省先への電車に揺られながら、私は大学を1年間留年するという考えに現実性を感じ始めます。

翌朝実家で目が覚めた私の心に、一瞬、自分が何かの破滅に向かおうとしているかのような感覚が流れていました。

体がだるい…。朝起きた時、自分の感情の不安定さに少し苦しみを感じた…。

それでも帰省先の空気が少しは気分転換になったのでしょう。精神的窮地に向かったここ数日よりも、少しは地に足のついた考え方ができるようになります。それが再び私の心に、上昇への小さな芽を与えたようでした。

やはり社会の中で働きたいのが、自分の願望ではないだろうか。

今は中小の出版社がいいと考えている。大きな企業にはあまり入りたくない気持ちがある。手ごたえのある仕事と、ある程度の自由が欲しい。僕は大企業での〝大きな仕事〟の重圧を恐れているのかも知れない…。

あの子に対しては、自分の気持ちをそのまま伝えたい。それが強い意志になっているのを感じる。

東京へと戻る日曜日、あの子に手紙を出すという気持ちが、確実な決心とも言えるものになっているのを感じます。

気持ちが昂ぶってきます。東京に向かう電車の中では、自分が何か感情表現豊かで天真爛漫な人間のような気分でした。

しかし東京に戻ると、すぐ沈んだ気分に戻ります。ちょっとした自分の〝欠点〟を自覚すると、あの子に近づこうという意欲も薄れてしまう。自分は彼女自身を求めたのではなく、彼女を愛する自信に満ちた自分を求めているのか…。

捨て去った全能感

週が明け、私は漠然とした不安感を抱えながら、就職活動に向けた行動を再開します。

私はさらに一歩、ありのままの現実を生きる上での前進をします。それは同時に、それを許そうとはしない心の圧制者との戦いにおいても、ついにその前線に踏み出すことを意味していました。

月曜日。沈滞した感情と、漠然とした不安感の中で目覚める。こんな〝暗い感情〟の中にいる自分を、あの子は好きではなくなってしまうのではないか…。

午前、各種の証明書をもらいに大学へ。午後、小さな出版社について調べようと思い立ってまた大学へ。結局何も分からなかった。

流れる不安。自分はどこにも入れないのではないか…。

大学では顔見知りの女性に何人か会います。特に言葉も交わさず、〝交友のない人間〟という自己像。苦々しい自己軽蔑の感情の中を、下宿に帰ります。自分は特別に素晴らしく魅力ある人間だと思おうとしているけど、実際には何も大したことはない…。自分には結局、何も楽しいことはないまま人生が過ぎ去って行くのか…。

下宿に戻ると日記に向かい、気持ちを整理します。

今は、自分がやりたいのは出版の仕事でしかないと感じている。少なくとも、一般企業で組織の歯車になるのだけは嫌だ。広告はやればできるのではないかという程度だ。

広告代理店ではなく、出版社…。

この時私に、苦しいながらも、現実的な自分の進路を定めていくという感覚が見えてきたと思います。同時に、今までそれを見えなくしていたものも。

僕には今まで、〝何でもできる自分〟というイメージがあった…。土方からウェイター、コックにガラス磨き、それからセールスマンからビジネスマン。一応自分はやればできるのであって、その上で本当に自分がやりたい職業を選ぶのでなければ、と考えていた。

だが今は、〝これは苦手だ〟というものがいくらあってもいいのではないかと思う。あって当然なの

かも知れない。

僕は一般的なサラリーマンではなく、やはり編集の業務や特定の知識の仕事に向いていると思うのだ。これは僕が今までに歩んできた人生を考えると、実感として感じられる。

あの高校時代の意識格闘も、数日前は今の自分とまるでつながりがないように感じたが、今はあの日々が今の自分を作ったのだと感じることができる。

心が落ち着いてきます。自己評価も上昇してきたのを感じる。あの子に近づき得るという感情も戻って来た…。

今はむしろ、自分が〝社会常識を脱した独自な存在〟であること、そして自分のものの考え方や趣味などに、何となく自信のようなものを感じている…。

そう日記に書いて夕食に出かけます。

一日の短い時間の間に自分が体験した、深い自己軽蔑感と自信感。その極端な感情の違いに、私自身が少し納得できないものを感じていたかも知れません。

私の中で、2つの自己の戦いの火蓋がついに切られたのは、この直後でした。

闇の牙の命令

日記を閉じ夕食に出かけてから、私の精神状態に予期せぬ変化が起きていました。
夕食を終える頃から、私は漠然とした悲しみを感じました。何が理由なのかはっきり分かりません。
そのあと街を歩きながら何を考えたのか、記憶が少し飛んでいます。あの子に近づくのを断念する……人との関係で、自分にとっては何にもならなかった……そんな観念が溢れるように行き交います。
自分が何を考えているのかはっきり自覚したのは、自分自身が心の中で叫ぶ声を聞いた時でした。

死のう！
飛び交っていた観念がひとつに収束します。僕は実感としてそう思った：。
悲しくなってきます。涙があふれてきました。下宿に戻ってから少しの時間泣きます。

ありのままの現実を生きようとする無垢な自己を許さず、心の圧制者の牙が下した命令。それはもはや漠然とした人生への徒労感ではなく、明瞭な「死への意志」だったのです。

少しして落ち着くと、私の心は静かな悲しみの世界に切り変わっていました。
ホーナイやプルーストの勉強などをして、生きていきたい：。

あの子には、自分の気持ちをそのまま伝えたい：。

静かだった夢

私の意識には何も見えないまま、私の中で、無垢な自己と心の圧制者の、互いの存在を賭けた戦いが始まったようでした。

その夜私は眠りかけながら、あの子と自分の関係など皆自分勝手な思い込みにすぎない！と自らを責める自分を感じます。少し苦しみが流れていました。

しかしそれから私が見た夢は、不思議と静かなものでした。

夢の中で、私は中学1年生でした。その時の若い女の先生に何かを頼まれていた：。僕は〝女性の乳房を思い浮かべていて〟、何を頼まれたのかよく分からないまま外に出てしまった。そのあと〝小僧〟みたいな服装に着替えて教室に戻って、皆を笑わせた。

もうひとつの場面。とても高価な服が展示してある。〝みねむらたかこ〟というブランド札がついている。僕は小学校からの友達に、「みねむらさんはこれを学校に着て来るかなあ」と話している。そのあと、少し離れた所で、女性が薄いカーテンの向こうで着替えをしている。初恋の女性らしい。

起きた時、私は漠然とした不安を感じていました。静かな夢とは対照的な動揺に満ちた、起きている時間が始まります。

会社訪問のためにこれから電話をする…。進路選択の時期をこれから迎えて、自分がどうなってしまうか分からないような不安。ホーナイの研究家として生きていこうという気持ちが強くなる。

進路のこと、そしてあの子への感情について、さまざまな思いがめまぐるしく流れていきます。

漠然とした不安が常に続いている……。就職を本当にやめるという考えが現れると、不安も出現するようだ……。あの子への感情に、ある程度偽りのものが混ざってもしかたがない……現に自分は彼女に思いを寄せているのだから、彼女に近づいてもいいのではないか……そうすることに実感として恐さがある……。

夜、漠然と今までの自分の人生を思います。私の中に、この歩みが一つの終わりに近づいているという感覚が生まれ始めていました。

今は全てが連続したものとして感じられる…。

小学校6年の時の初恋。中学の3年間。高校時代の苦しみと意識格闘。大学1年の活動的な毎日。2年の研究会サークル。そして編入学。あの子との出会い…。

この4年間を思い起こすと、胸が熱くなってくる。大学に入学する直前、僕は大学への進学そのものに否定的だった。大学生活でこれほどのものが与えられるとは思っていなかった…。

終わりへの予感

翌日水曜日の朝、私は夢の中で、どこかの夕暮れの街の中をひとりで歩いていました。街の風景の中には、ひとりの女性がいた：。それはあの子だったのかも知れない。

その後僕は2年の時の研究会のサークルボックスにいた。中心的存在だった2人の3年生がいる。僕がよく書き込んでいた雑記帳を見たりして、「このノートからは影響を受けたなあ」などと言っている。目が覚めた時、私は研究会サークルの人達に会う場面を空想していました。彼らが、「あ～、あ～！しまのくんだ～！」などと言っているのを想像しながら、僕は笑い顔になっている。

心の圧制者はまだ鳴りをひそめているようでした。無垢な自己が一歩前進します。

私は親友の紹介で、その大学の社会学部にいた、ある著名な教授を訪ねました。自分の研究に重なるものがあるのではないかという期待からです。

話の内容は期待外れでしたが、親しい学友に紹介された勢いもあったのでしょう、私は積極的で明るい態度で接することができました。有名教授に会うことや、会社訪問をすることは、自分にとってそれほど恐くないことだ。そんな感覚が生まれていました。

さまざまな表情を向けてきたあの子の姿を思い浮かべます。彼女に会いたい：。

翌日木曜日。土曜日から後期の授業が始まります。またあの子と会う可能性のある日々が近づいてきました。

今、自分はあの子にどんな感情を持ち得るのか。この夏休みに大きな心の変遷を経た自分は、今どこに立つのか。それを見定めるべき時が訪れました。

それは同時に、無垢な自己と心の圧制者との、この内面の戦いの地をおおう朝の霧が晴れ、両者の布陣が露わになる時でもあったのでしょう。

漠然とした連想から、あの子への感情の整理が始まります。

今日は祝日で、外は雨が降っている…。

隣の家はカーテンが閉めっぱなしで、ふと、こうした日に朝からＳｅｘにふけっている若いカップルもいるだろうなどと空想する。

そうした人々に僕は〝浅薄さ〟を感じ、あの子はそんなことはできない人だと感じる。すると彼女と自分が結ばれるべきだという感情が流れる。

一方で、彼女も〝軽薄に男との関係を求める〟女の子に変わってしまったのではないかという空想も湧く。派手な服を着て教室を出て行こうとする彼女の後ろ姿…。その姿だけを思い浮かべると、自分と

彼女とは〝もう無関係だ〟という感情が湧く。

でも素直な感情を僕に向けてきた彼女も、やはり同じ彼女なのだ…。すると、それはもう〝終わってしまった〟ことなのだ、と感じている自分を見出す。

自分は結局あの子にそれほど関わっていたわけではなかった…。この傍観者的な気分が、何かの自己軽蔑と関係があるのかも知れない。それで自分には彼女に近づく資格がない、という感覚が生まれるのか…。

まだ自分がどう彼女に接すればいいのか分からない。そうした否定的な彼女のイメージが現実にある限り、何とかそれを乗り越えなければ事態は進展しない…。

今の気分としては、彼女に近づきたいという気持ちを感じることはできない。

だが彼女に対する思いが消えたわけではない。心の一部は、〝消えるわけがない！〟と叫んでいる。

自分のハンサムな顔を見たりすると、別の空想が現れる。あの子がひたすら僕を思っていて、僕からの働きかけを待っている…。

これは自分の容貌の欠点が見えなくなったという条件のものだ。現実の欠点を認めようとしない態度でいる限り、自分の欠点の自覚は、一挙に、彼女に近づくことのできない自分と、僕には無関係な彼女というイメージを引き起こすのだ。

始まった崩壊

私の中で変化が起きます。

断片的な感情の関係を心の中で繰り返し吟味することで、何が起きているのかを頭では理解しないまま、心の底で何かが解けるのです。精神分析とはそういうものです。

今の日記を書いてから、僕に冷淡なあの子のイメージが消えた。それを信じよう！

現実に彼女に近づこうという意志が強くなってくる：。

そう思えたのはほんの一瞬でした。底をおおっていたベールが破られるように、予期せぬ感情が溢れ出してきます。私は自分の中にパニックが流れるのを感じました。

僕は何かの恐慌感を感じた：。浮かんでくるのは、あの子に実際に会って、動揺してうろたえてしまう自分。そんな自分に対して向けられる、あの子からの激しい軽蔑。〃本当は相手への思いやりなど全くない、自己中心性のかたまり！〃。

頭が働かなくなります。

直後に電話があります。自分の心に静かに向き合っていたこの男の頭は強制的に上を向かされ、私の

目から自分の心の視界が消えます。
私の心の中で、今までは何とか感情にまとまりを持たせていた保護膜が取り去られたようでした。
脈絡のない感情が私の心を突き動かし始めます。

前の大学の1年の時のクラスメートでした。何か仏教の活動をしていて、最近誘いの電話をよくしてくる男です。近所の喫茶店で合流します。
私にとって何の気構えもいらない相手で、これ以上ないような快活そうな自分を演じながら彼とお喋りします。
向かい側の椅子に座っているひとりの男がこっちを見ています。その瞬間、私はその男が自分に激しい怒りを向けていると感じました。

このあと私の神経は少し昂ぶっていました。
子供向けＴＶアニメを見て泣き、あの子と寄り添う自分の空想に耽ります。
夕食のあとゲームセンターで些細なことに苛立ちます。コインランドリーの鏡に映った、〝優しさの欠けた〟自分の容貌に、何か苦い感情を感じます。
自分の心が〝ぐしゃぐしゃに〟なっているような、嫌な気分を感じました。

就寝前、あの子への穏やかな思慕に鎮まります。この感情は僕に、とても落ち着いた気分を与える‥。

あの子に対して矛盾した自分を見せてしまうことを、僕は恐れているのか…。

置き去りにした悲しみ

翌日金曜日。私の中で何かが宙に浮いたままでした。

朝見た夢はやはり静かなものでした。TVアイドル女性に一方的に好かれる夢を見ます。私は無感情でした。自分が本当に愛しているのは初恋の女性だ、と考えていました。

私はまるで予定された事を行うだけの自動機械のように、次の日の心理学専門講座で提出するレポートを書く作業に入り始めていました。

突然それをやめてしまいます。私は泣き出していました。

自分でもはっきりした理由は分からない。〝自分の人生は何なんだ！〟という大きな感情が僕を襲ったのだ。

僕は死にたいと何度も思った。自分はほんの小さい時にすでに死んでいたのだ。

何が悲しいのかはっきり自覚できているわけではない。何をどうやっても、結局求めているものは自分には拒まれるのだ、という感情だろうか…。ただ悲しかった。

私は何かを吐き出すように泣いていました。胸から血を吐き出すような涙でした。

対決へ

翌日土曜日の朝。後期最初の授業が始まります。
私の心は、悲しみの洪水が去ったあとの、醒めた静けさの中にありました。

きのうの涙は、まさに嗚咽という感じだった…。
涙の中で僕が自覚したのは、僕にとって〝愛〟とは、絶望への同情だということだった。自暴自棄な絶望の中にいる自分を見せつけ、慰めを強引に引き出そうと…。
朝起きた時、〝どこか別の世界に行きたい〟とでもいうような気分だった。
あの子への感情は愛ではなかった。はっきりそう思った。
研究者になろうという気持ちも消えていた。もう東京に残ることはない。ささやかな仕事でもやって、帰省先の本屋にいた、あの子に似た女性のような人と結婚すれば…。
だがその考えもあまり現実的ではないのを感じた。それから考えるのは自殺のことばかりだった…。

大学に行った私の感情は、朝の思考とは全く逆でした。私は空ろな心の中で、至るところであの子を探していました。
しかし実際にあの子に会えるとは思っていませんでした。

心理学専門講座の教室に行くと、黒板に休講との連絡が書いてあります。
教室の中で一つ下の学友達と話していると、あの子が来ます。
その瞬間、私の心は、青白い悲しみの感情から、白い現実に対面した身構えへと逆転します。その感覚の中には、いきなり目の前に現れた獲物に慌てふためいた獣のような感覚が、かすかに含まれていたと思います。
心臓が激しく打ち始めます。

教室に入ってきたあの子は、入り口近くにいた私には全く注意しない素振りで、演習が同じチームだったもう一人の女の子を見つけ、座って喋り始めます。この授業にあの子が出たのは初めてでした。
あの子は〝以前のあの子〟でした。私に対しては心を閉ざしているように思えました。
心の動揺が少し収まってくる頃、同じチームだった3年男子があの子に声を掛けに行きます。私はあの子を中心にしたお喋りの輪に入る振りをして、あの子に近づきます。

真近で彼女の横顔を見ます。見ることを許されないものを見るような感覚が流れました。

私が傍に来たことで、彼女は少し黙りがちになったように思えました。私は離れて元の席に戻ります。

少ししてあの子が帰ります。その時彼女が私の方を向いて手を振り、〝ばいばい〟と言いました。私は微笑みます。

その後私は教室を出て、あの子たちが前を行くのから別れて、図書館へ向かいます。

私はこみ上げる感情の中、全力で走ります。

一人になってから、私は少し興奮気味でした。今日起きたことについて、今の僕は現実的な評価を下せる状態にはない：。

僕の心の中には2つの方向への力が働いているようだ。

ひとつは、あの子がいままで僕のことをどう思っていたか考えようとするものだ。この中には、彼女が僕のことをずっと思って心を痛めていたとか、関心をなくしていたけど久しぶりに会って〝また関心を持ってみた〟とか、幾つかある。

もうひとつは、彼女の内面についてあれこれ考えるのはやめて、今の自分で彼女を理解していこうというものだ。

自分を押し上げる無垢な自己の力と心の圧制者の力を、私は見分けることができません。

やがて高揚感が私をおおいつくします。美術雑誌出版社の求人票を見つけ、その美術雑誌を買い、収録された絵画に覚える感動。入社したい意欲。応募する自分をあれこれ空想する高揚感。自分はきっと

入れるに違いない。
空想がさらに上昇します。あの子は僕をずっと好きだった。自分も〝情熱的な態度〟を示して、2人が結ばれ合う。
だが彼女が今までこの授業に出ていなかったということは、僕に会いたいという気持ちを彼女がそれほど持っていなかったということではないか…。空想は浮力を失い、中途半端に宙に浮きます。

夜、ようやく気分が落ち着きます。静かに自分に向き合う自分。この〝落ち着いている自分〟は、さっきの〝情熱的な自分〟とは全く別人のようだ…。

自己像の走馬灯

翌日日曜日。私は異なる自己像と感情の中を駆けめぐりました。
前の日に私を押し上げた高揚感が残っていました。少し戦闘的な気分から始まっていました。

母に紹介された聖書の英語サークルに体験参加をする。その後原宿に寄る。街を歩く、華やかな外見の若者達…。
彼らは外見によって〝勝ち誇ろう〟としている…。それに対抗しようとする〝何事にも動じない〟自己像。あの子とは友人としての関係を取り戻すべきだ…。自分の容貌への軽い軽蔑感…。

昼過ぎ、髪をカットする。下宿に帰ってきて鏡を見るうち、自分の容貌の精彩に高揚感を感じると、それを人に見せつける自分の空想が湧いてくる。あの子さえも、僕の美貌に無力感を抱く姿‥。

すぐあと鏡の映り方で精彩のない自分を見る。自分への幻滅感。あの子との〝愛情〟について考える意志も失せた。彼女が〝自分から離れていった〟のも当然のことだ‥。

自分の容貌にこだわりすぎていた。人に近づく積極的な気持ちがない自分への軽蔑感。〝社交性〟のない自分‥。ホーナイや理論心理学の研究者としてやっていくという考えが浮かぶ。

あの子とは〝友人としての態度〟の上で結ばれるという空想‥。それが消えた時、〝悲しみの絶望〟が起きる‥。

悲しみは私を無垢な自己に近づけます。しかし心の圧制者はそれを逆手に取ります。

夕方、あの子が映った写真の複製を頼みに写真屋へ。漠然とした高揚感。自分があの子に出会ったことで人間として成長できた。感動の気分。自分が非凡な人間であっただけに、自分が好きになる女性も特異な輝きを持っていたという自己満足感。

下宿に戻り鏡を見て、何となく野暮ったい自分の髪型。漠然とした自己軽蔑感。〝全てのものを求めるのを断念する〟かのような気分‥。話しかけてくるあの子に静かに返答するだけの自己像‥。

現実を生きることができていません。空想の世界で生きています。

この青年にとって生きるとは、どんな自己像を抱くことができ、どんな感情を感じることができるかなのです。

そしてひとつの自己像から別の自己像に移り変わる一貫性のなさに、彼は困惑を感じることができません。問題はどれが本当かだけです。なぜなら感性は分裂した人格のひとつの中でしか働かず、分裂した人格をまたがっては働かないからです。

事実、「現実」こそが、心の圧制者の忌み嫌うものでした。

この下らない現実はお前の生きる世界ではない。お前が特別な存在であり続けることができる空想の世界こそが、お前の生きる世界なのだ。

そうして心の圧制者は、この人間に「自己像を生きる」という一つの人間の存在様式と、分裂した人格を強制します。栄光ある自己像を描けないのであれば、世界から迫害された異端者の絶望さえも望むところなのです。

「愛」は深淵でした。それはこの分裂した自己に疲れた人間が、自己像を忘れて身を委ねる、最後の幻想になり得ます。同時に、現実を生きようとする彼の意志を導く、救いにもなり得ます。

僕にとって、〝成長〟とは、人からの尊敬を目当てにしたことでしかなかった…。あの子には〝愛〟を期待した…。自分には〝本当にやりたいこと〟なんてない…。〝仕事〟なんてやりたくない…。〝将来なんてない〟という絶望感を抱いている自分への悲しみ。小さい時、〝何もやらなくてもいいん

だよ〟と言ってくれる人はいなかった…。
あの子だけがこんな自分を分かってくれる気がする…。

心の圧制者は、愛を前に、奇妙に静かなまま、狡猾そうな目を光らせているだけのようでした。

分岐路の前へ

週が明けた月曜日。私はあの子の夢を見ました。あの子について〝いい夢〟は初めてと思えました。雪でおおわれた山の中の小屋にいました。階段を上っていくと、あの子が後ろから寄り添ってきます。あの子の手を取って、部屋の中に入ります。そんな夢でした。
目が覚めた私は、しばらくあの子と見つめ合う空想に浸っていました。

大学では学友と〝現実的に打ちとけている〟ことができる自分を感じます。こんな風に表面的に親しい態度を取れていれば、人々から好意を寄せられるという自己満足感…。でもここには、今まで抱いていた〝感情の深いところでのあの子との関係〟が欠けている。
〝表面的になれ合う〟のではない、あの子への真剣な感情…。その深く特別な感情を心の中に思い浮かべる…。
自分はこんな表面的な態度であの子にも接するのが正しいのだろうか。それとも彼女へのあの特別な

感情を肯定すべきなのか。つまり自分の気持ちをそのまま彼女に伝えるべきなのか。
全く相容れない衝動が、全く収拾のつかないままに現れてくる。
彼女の気持ちを実際に確かめたい：。

孤高の受容

火曜日。愛を前にしても私は身動きが取れないままです。
あの子に近づく希望を失った自分への憐憫。自分が彼女のことを、心の底ではとても大切に思っていることだけは彼女に知っていて欲しい：。
あの子の全ての姿が思い浮かぶ……彼女は僕のことをどう思っていたのだろうか……僕は……心から愛している。
そう書いた瞬間、逃げ出したいような恐怖感：。

心の圧制者が再び、現実世界を見下すことを私に囁きます。この日また下宿に遊びに来た一学年下の学友とお喋りをしていた時でした。
美術雑誌の絵を見せたりしながら和んでいました。
学友がふとした言葉を口にします。「いい絵ですね。今度の年賀状にでも使おうかな。毎年どんな絵にしようか困るんですよね」。

その時、私は冷たく沈んでいく自分の心を感じました。彼にはそうした、僕とは別の、〝あたりまえの交友関係〟があるのだ…。自分にはそれがない。自分がその中にいることが自然で重要な、人々の輪の世界…。あの子にもそうしたあたりまえの、人々に囲まれた世界があるのだろう…。

あの子のことで今まで色々と考えてきたことが、何かばかげたことだったように思えてきます。あの子に何かを求めるのを全て放棄し、あの子に穏やかに話しかけているだけの自己像…。

落胆は深いものではありませんでした。むしろ何かが吹っ切れたような前進の感覚が湧いてきます。自分が平凡な人間ではないことは、小さい頃から身に染みている。もしあの子が普通の友人達に囲まれた普通の男を望むのであれば、自分はあの子の相手ではない。その〝覚悟〟は最初から最後まで私にありました。

そうだ。お前は平凡な現実に生きる人間ではない。特別な人間なのだ。私の意識の裏で、心の圧制者はそう囁いているようでした。

夜、出版社に提出する作文を書いていると、社会心理について講義する自分の姿が浮かんできます。そうしたことにやりがいが感じられると、あの子と離れることもそれほど辛くない気がしてくる…。

こうして私の中に、戦闘的とも言える高揚感への、最後の上昇への芽が生まれます。

私の中で生きていたこの人間はもういなくなる。その意味で「最後の」でした。

水曜日。愛におもねる自己を切り捨てたこの人間の、幻想的歓喜の世界が姿を現します。

起きた時、私はやや躁状態でした。何となく自分に〝自信〟があるような気分。自分が容姿の点からも独自な存在だとか、自意識の少ない純真な人間だとか。これは明らかに自分を買いかぶっているが。あの子とは友人としての親しさの中で現実の関係を育てていきたい。

「自意識が少ない」とは、自己に閉ざされたこの人間にあって、買いかぶりどころではない、現実から乖離（かいり）した自己像でした。

やがて卒論の新たな章を書き始めた私に、頭が割れるような高揚感が現れてきます。これは自分が〝人を威圧するような衝動〟を抱いていることの現れか。

あまりの高揚感。何か目まいのするような、自分が安定した地盤を失ってしまったような、嫌な気分だ。気分転換に外出しても、これはぬぐえないような気がする。

夜、次の一日がいよいよ近くなると、私の頭の中は狂乱的歓喜のような躁状態になります。今まで隠されていた躁的な気分や考えが、現れはじめている。

空想の中で、自分の子供ができてはしゃぎ回る自分。親からゆずり受ける自分の土地に〝精神分析研

究所〟などというのを建てて、僕がその運営をやるとかいった考えが浮かんで、笑い顔になる。

私の表の理性は、次の日にあの子に会った結果がどうであろうと、自分が特に大きく変わるわけではないと踏んでいます。今まで現実に大した関わりを持てたわけではない。まずは友人としての親しさを作っていくところから、現実の彼女との関係を考えていけばいいのだ。

しかし心の裏で、今まで私を支えてきた、あの子と自分との関係についての幻想が、もはや心の中で抱く空想だけに留めておくことはそれ以上できない時が、来ていたのです。幻想を現実と変えるか。それとも幻想が現実によって破れるのか。

それは私の中で、今まで交わることのない現実と空想の世界、そして相容れない勝利と愛のベクトル、その全てが一点に交わる時を意味していたのかも知れません。

もはや躁的恐慌とも言える精神状態でした。この日の最後どんな感情になったのか、今私は思い出すことができません。

「ちょっとした困難に出会うとすぐ放棄する」という絶望感。

それは僕の場合、何よりも人間関係に現れていた。自分に対するちょっとした否定的兆候を見ただけで、相手との関係はもうなくなってしまったと感じていたのだ。

それが、この空想に生きた者が書いた最後の言葉でした。

病んだ心の崩壊

翌日木曜日。9月最後の日でした。

私の心の現実は、表の理性が考えたものとは全く違うものでした。

大学に行くと、私の心はただあの子を求めていました。

あの子を求める気持ちが強くなっている。彼女に会えないことが、とても寂しい。

表面的には学友達と明るくお喋りしていても、心の底に何か空虚なものが残っている。それを満たすことができるのは彼女だけだ。僕は彼女に何を求めているのだろうか…。

寄り添える人が欲しい。そしてあの子に寄り添って欲しい…。

それから3日間、私の日記はほとんど途切れました。ごく短く、断片的な言葉だけが記されます。何が起きたのかを振り返って日記に書いたのは4日後のことでした。

木曜日、最後の授業へ。

教室に入ってから一度トイレに行き、それから教室に戻った。ちょうどあの子の友達が来て、同時に

教室に入ることになった。

あの子は来ていた。

あの子の友達の後ろから教室に入る時、教室にいた別の友達が手を振ります。私はメガネを外していて、あの子かと思い一瞬ビクっとします。緊張した笑顔を作ったつもりで自分の席へ。

あとから来た学友と話しながら、真横で少し離れた席にいるあの子の顔を見ます。

あの子は私の方をほとんど見ませんでした。目が合いそうになると、すぐに顔を逸らすように見えます。

その時私の中で、今まで心の片隅で抱き続けていた、あの子が自分に特別な思いを向けているという期待が、冷たく壊れるのが感じられました。

意識の上では、動揺はあまりありませんでした。現実がそんなものであることは多少とも予想しているつもりでした。やはりこれが現実なのだ。あの、思いを寄せ合う映像は、ただの空想だったのだ。

私の中で保たれ続けていた幻想が崩れたのはこの時ではありませんでした。この後、あの子が示した仕草を見てからでした。

少しして、あの子が席を立って後ろの方に行きます。去年演習のチームが同じだった、ハンサムで気の優しい男子の横を通る時、あの子は親しそうな、いたずらっぽい笑顔で、彼の服の腕のところをつま

んでいきます。一度教室を出て、帰って来る時には、またいたずらっぽい笑顔で彼の髪の毛をくしゃくしゃっとつまんでから席に戻ります。

彼には公認の美人フィアンセがいました。あの子のその仕草は、何の恋愛感情も含まない、何の目的もないものであるのは明らかでした。

そこには、ただ、天真な幼な子のように、ただ人に愛を向けることを喜ぶ、純真な人間の姿がありました。それは私がもうこの現実世界にはあり得ないものであるかのように感じていた姿だったのです。

その姿を見た時、私は自分の中で失意が起こっているのをはっきり感じました。恐らく、彼女が誰よりも自分のことを大切に思っているという期待が、この時完全に破られた。後でそう振り返っています。

ただしそれもあくまで失意であって、ショックではなかった。僕はその失意に耐えられるだけの進歩をしていたのだろうと思う‥。

私はその失意の中で、彼女に手紙を出すことを考えていました。あの子が自分に対して違和感を感じていることを諦めた上で、自分の誠意を分かってもらいたい、と。下書きを少し手帳に書きます。

一方で、私はあの子に対して、実際には何かを求めていながら、何も求めていない風に装おうとする自分の矛盾を感じました。僕は彼女に対して自分がどうあるべきかに捉われて、本当の自分がどうあるのかを見ることができなくなっていたのだ‥。

2通目の手紙

夜、私は便箋に向かって、ペンで彼女への手紙を書きます。
とにかくあの子に、〝自分への理解〟を求めようとしていました。遠く映し出され始めた絶望感を背に、まだ生きようともがいている人間のように。
おそよこんな内容で。

僕は恵藤さんが好きです。1年前からそうだったのですが、そのためにかえって君に近づくことができなくなっていたのです。
僕は今、生まれて初めて、〝本当の自分の人生〟や〝自分の愛〟といったことに直面しています。今は〝最終戦〟とでも言うべき苦しい時期が来ています。それで、自分の心を少しでも楽にしたいのです。もし恵藤さんが僕のことを単に〝よそよそしくなった〟とだけ感じているとすれば、それは辛いことですから。ただ僕が君のことを大切に思っているということを知っていてもらえれば、それが僕に少しの心の安らぎを与えてくれるようです。
最も愛するものに最も背を向けなければならなかったのが自分の人生だったなんて！
だけど、いつまでもこんな状態でいようとは思わないし、変化は確実に僕に訪れています。

結局、この手紙も実際に投函されることはありませんでした。

完全なる絶望

翌日金曜日。授業はなく、午後に出版社への会社訪問をします。

私は少し呆然とした感覚の中で、あの子のことについて、そして自分が一体何に失意を感じたのかと考えていました。

私は漠然と、自分が絶望したのは、あの子との関係そのものではなく、全く一方的かつ受身的に愛を求めることしかできなかった、愛への可能性を持たない自分自身にではないかと感じました。

愛を示すことが、僕にとって異質的なことだったのか。確かにそうなのだ。小さい時から、僕はそれに絶望していた。それなしに、他人の愛を自分のものにする手段を選んで生きてきたのだ…。訪問先の会社へと歩きながら、そんな思いの中で涙をにじませます。

夜、私は何を考えるわけでもなく、悲しみの気分にひたりながらクラシック・ギターを弾きました。「アルハンブラ宮殿の思い出」のような哀愁感強い曲です。

深い悲しみがだんだんと湧き出してきます。もはや醒めた視線で自分を見る目もなく、悲しみだけが全てをおおい尽くします。

私は声を殺してむせび泣きます。自分はもう生きていても何にもならない。死のう。この考えに異議をとなえるものは、もう何もない。

家族へのメッセージを考えます。母に、自分を愛してくれるのは十分感じるが、それを十分に受けとめることができない性格に、自分はなってしまった。ごめんなさいと。兄に、僕が自殺をしたことで何か社会上の障害を起こしてしまうことになるけれども、あなたは強い人ですからそれを乗り越えるはずですと。

少し気持ちが落ち着くと、日記に向かって短い文章を書きます。

今までの何よりもはるかに深い絶望感が、今僕に訪れている。

深い悲しみと涙は、もはやとどまることを知らない。泣きながら、死ぬことを考えた。今までのように、それを思いとどまらせようとするものは、もはやあまりなかった。

幸福になるために、死ぬのだ。

私はこの時、自らの心の罠に、敗れました。

短い日記を書いたあと、手元にあった睡眠薬4錠を皆飲んで床に入ります。以前母が知り合いの医者からもらってきたものの残りでした。何もそれで死ぬとは無論考えませんでしたが、そうすることがそ

の時の感情に似合っていました。もしビン入りの睡眠薬でもあったら自分は全てそれを飲み込んでいたかも知れない……と。

エドガーのように

翌日土曜日。

起きてから、沈んだ気分の中で死を決意した自分のことを日記に短く記します。

僕を知っている多くの人は、僕が自殺をしたことに大きな驚きを覚えるだろう。外から見ている限り、僕には何でも与えられていると思うかも知れない。僕にできないただひとつのこととは、自分が愛するものと心を通わせるということなのだ。

僕が本気で自殺をしようと思ったのは、きのうが生まれて初めてだ。今は深い悲しみや自殺への激情はないけれども、これ以上生きてゆくという考えはない。

自殺をするとしても、あと数週間は延ばさなくてはならないだろう。その間に、僕は、自分がなぜ自殺をするのか、そのいきさつ、それに人々へのメッセージを書いておかなければならないだろう。

私の心は、ただ、静かでした。死を選択した確信によって、全ての心の動揺が消え去っています。

私は自殺の具体的な方法について考えていました。どこか心の静まる自然の中で、手首を切るのがいいだろう。

朝の霧に濡れた草原の中がいい……『ポーの一族』の最後の場面で、エドガーが草の中に横たわったように……。

私はその場所として房総半島の南端の白浜あたりを選びました。この日、そのあたりのガイドブックを買うつもりでした。

自分の手首を切る。それで果たして死ねるだろうか…。

痛みはあまり恐くはない気がしました。それを確かめようと、自分の左手の人差し指を、カッターナイフで小さく切りつけます。血が少しにじんできます。

痛みはありましたが、痛むことに対して何の恐れも抱いていない自分を感じました。

ひとつ目の偶然

心理学専門講座の授業に出るため、大学に向かいます。他の全ての行動が意味を失った中で、あまり考えないまま、あの子に会う可能性がある教室へと向かっていました。

何となく体がふらふらしているのを感じます。睡眠薬のせいだろうか。

教室に着き、チームが同じだった2人の男子と少し言葉を交わしてから、少し離れた席へ。

授業の開始を待っていると、ハンサムくんが「恵藤さん来てるみたいだよ」と言っているのが聞こえます。少ししてあの子が来て、私の方に近づいてきます。

私が何か対応したものかと思いあぐねていると、あの子は私にあまり注意しない素振りで、すぐ斜め前の席に座ります。回りには他に知り合いはいませんでした。

授業中、あの子は誰かへの手紙を書いているようでした。「岸本さんへ」。そんな冒頭の文字が見えます。時々手鏡を取り出してのぞき込んだりしています。

その手紙は男性へのものだろうか。彼女の入っているサークルの人との関わりなのだろうか。彼女にはそのような、僕とは全く関係のない別の人々との関わりの世界があるのだ…。

その一方で、私の中に、この機会に、前期のノートのことなどで声をかけてみようかという考えが起きます。

授業が終わった時、私はあまり意識しないままにその通りの行動をしていました。

あの子は去年と全く変わりない、打ちとけた様子でした。そして、〝今さら〟とでも言えるようなこの時期に、去年チームが別れてからの課目のことなどを話します。次の週に前期のノートを見せる約束をして別れました。

自分の中に、ただありのままに生きようとする感情があるのを感じます。

彼女に恋人がいるかいないかはどうでもいいから、自分の気持ちのままに彼女とこれからも友達でいたい。

自殺という考えも、自然になくなっていた。

12
章

現実への帰還

（大学４年10月）

病んだ心の崩壊

この3日間僕がほとんど日記を書かなかったのは、その間に起きた感情の変化が大きすぎて、落ち着いて日記を書く時間がなかったことによる。

それを超えたことで、明らかに僕はひとつの段階を過ぎて、新しい状態へと至った。

だが全てが解決したわけではない。次の揺り返しは早くも今日現れている。

木曜のことから書き始めよう。

……

こうして、私が詳しい日記を再開したのは10月になって間もない日曜日のことでした。

私は自分に変化が起きたことを、かなりの確信の中で感じました。しかし何がどう変化したのかを、考える余裕はありませんでした。感情の上昇と下降の次の波が、早くも土曜日の夜から始まり、私の目はそれに取られたからです。さらに、そもそも自分に何が起こったのか、私にはよく分からないような所がありました。

実際私に起きたのは、病んだ心の崩壊とでも言うべき出来事でした。

私が今までその中で生きようともがき苦しんでいた自己。その病んだ心の大きな部分が根底から崩壊

したのです。

それは私の病んだ心の、大きな治癒の瞬間でもありました。それは、「気持ちが楽になる」などではなく、「完全なる絶望」という形を取ったのです。

しかし、もしその人間の「生」がその病んだ心に支えられていたのならば、その除去消滅という治癒は、一度「生きる土台」を失うということである。従ってそれは意識体験上は、「完全なる絶望」の形を取る。これは理論的にも実につじつまの合う話と思われます。

私はその考えに基づき、後に新しい心理学を自ら構築することになります。

感情の断裂を過ぎて

数日間、私は自分に何が起きたのかという自覚のないまま、間断なく押し寄せる気分の上下を自己分析していました。多少、自分が劇的な変化の体験をしたという気になっていたかも知れません。

土曜日久しぶりにあの子と会話を交わした後、私に現れたのは、自分が色々なことをして、色々な人に会いたいという高揚感でした。

日曜日には聖書の英語サークルに参加し、〝お喋りで人を楽しませることのできない〟自分への失望感へ。夜には一転して自分の容貌への高揚感へ。

月曜日。スーツ姿で大学に行き、自分が燦然（さんぜん）とした姿でキャンパスに立っているというひどい高揚感

を感じます。語学授業で仲良くなった下級生と将来進路の話などしている間までは、胸を詰まらせるような高揚感。

昼休み、誰かと一緒に食事をしようと研究室に寄っても誰も知り合いがいないと、〝自分の居場所がない〟空虚感。自分がその場にいることが自然で重要なことであるような〝居場所〟というものを、自分は持っていない。

やがて自分の中の矛盾に気分が沈みがちになります。

人の好意を得るために親しい態度を取ろうとする衝動。その拘束に反抗して〝無情な〟態度を取ろうとする衝動。前者を取ると〝浅薄さ〟への反発が起きる。後者を取ると〝親しみにくい人間〟という自己軽蔑が起きる。

火曜日は卒論の続きと出版社への書類提出だけで、下宿で過ごします。

私の心に落ち着きが戻ります。何とも落ち着いた、いや落ち着き過ぎたともいえる生活だ。やはり人との交わりがないからか…。

数日前までの自分とは、感情が断絶しています。

あれだけの巨大な絶望感に陥ったことを忘れるかのように、それが自分の中でどう片付いたのか、それとも片付いていないのか、私には何の感覚もなく、考えることさえもしません。

事実それは崩れ去った病んだ心で起きていたことなのです。崩れ去った後には、それについて考える

心そのものがありません。
ただしこの崩壊は、まだ不完全なものでした。

赤剥けの心で

水曜日起きた時、私は何となくノスタルジックな気分を感じていました。18歳の頃の自分の美貌や、初恋の女性のことが思い出されてきます。
17歳の頃の自分を思い出すと、〝あの頃は自分自身に恋していた。それがひとつの救いだった。〟そんな言葉が浮かんできます。

将来進路に向けての作業を再開します。
ホーナイ訳者の一人の教授の連絡先を調べました。今大学院でどんなホーナイ研究ができるか、聞こうという考えです。しかし実際には会う気にはなれないでいる自分…。研究者という進路そのものが、心の中でぼやけています。
自分の来年の進路さえ決められないでいる自分…。卒論が完成するかという不安もある。留年という考えも浮かびます。
考えているうちに、どうしても幸福になれないでいる自分というものを、やはり感じます。

そうして、再び自殺という考えにまどろみ、今までの自分の人生の悲しさに涙を流す自分を見出すのです。ただ生きていることに疲れてしまったと感じました。

絶望は、まだ通り過ぎてはいませんでした。

留年することを本気で考え始めている。そうすれば勉強を続けながら、自分を見つめるためのモラトリアム期間が得られる。それが今の僕にとっては大きな魅力だ。

私は赤剥けの心にいました。病んだ心の大きな部分が崩壊したといっても、それは同時に、私を今まで支えていた、「なるべき自分」という硬い鎧が失われたことを意味していました。

代わりに健康で成長した心が取って替わったわけでもありません。赤剥けでひ弱な心から、私はこの現実世界の中で、これから自分の心を一歩一歩成長させていく必要があるのです。

そしてこの時の私は、自分の心を成長させる智慧について、あまりにも無知でした。

私の心の危機は、まだ去ってはいません。崩れかけた残りの大きな崩壊が、おそよ1か月後に起きることになります。

葛藤からの脱出

それでも私に、この現実世界での人生の道というものが、今までよりもよく見えるようになったと思

います。ひ弱でぎりぎりの心で、その道を歩き始めることになりました。

差しせまった問題は、来年の自分の進路です。それが現実問題として迫ってきてからのこの半月、私は精神的苦境への坂道を転げ落ちていたのです。

その葛藤から抜け出す方向へと歩き始めたのは、翌日の木曜から金曜にかけてでした。

木曜日、私の中で留年という考えが抜き差しならぬ大きさへと膨らんでいました。

私は大学で、比較的長期で手頃なアルバイトを見つけ、申し込んでしまおうかと考えます。今そのアルバイトを始めるということは、卒論や就職活動の時間がなくなるということであり、留年がほぼ決定的になることを意味していました。もう留年を決め込んで、アルバイトをしながら自分の内面に向き合う、平穏な生活を取り戻す誘惑に駆られたのです。

私はいざという時になってためらい、思い迷って苦しみます。

そこには、葛藤する自分の姿そのものへの嫌悪感がありました。決定の困難。暖かみのない自己像‥。

それらは、自分にはもはや死ぬ以外に道はないような感情さえ生み出していた‥。

結局私は、葛藤に苦しみながら、今すぐアルバイトの申し込みをすることはないという判断を下し、下宿に帰ると日記に向かって心の中を整理していきます。

今日は本当に疲れてしまった一日だった‥。

私の思考は、葛藤を現実的に解きほぐす方向へと動き出していました。それはやがて、袋小路にある自分への無力感を打ち破り、現実に向かって行動する歩みへとつながっていきます。

留年という考えはかなり本気だった。一方には卒論を仕上げて就職したいという気持ちがあった。だが、留年したい気持ちと就職したい気持ちが葛藤した訳ではなかったと思う。就職したい気持ちはまだ曖昧なのだ…。

むしろ僕は、留年したいという気持ちと、留年してもあまり意味がないという考えの間で葛藤したのだ。

実際、来年また今年と同じように就職への悩みを繰り返すのだとしたら……そう考えると今年留年することに意味はあまりなくなる。

留年したい理由のひとつは、自分の精神的問題への気疲れだった。こうして留年を考えて決定困難に陥っている事実そのものへの苦しみだ…。

だがそうなると、〝留年すべきかどうかに思い悩んで疲れてしまったから留年する〟ということになる。これは変だ。気疲れは進路選択ができれば自然と解消するかも知れない。

選択の基準は、あくまで別の客観的なものに求めなければならないということだ。

私の中で、留年という考えが薄れてきます。

この時私が取った思考法は、葛藤への対処として非常に重要なものです。

葛藤は極めて苦しいので、しばしば、本来の選択肢全てから目をそらす逃避行動への誘惑を起こしてしまいます。そしてその逃避行動が本来の選択肢に紛れ込むことで、葛藤全体の姿が歪んでしまうのです。葛藤からの逃避行動は選択肢から外して、客観的に考えることが重要です。

自殺衝動を持つ多くの方が、この轍にはまります。死ぬのも容易ではなく、生きるか死ぬかの葛藤に疲れて、死にたくなってしまうのです。

始動

金曜日は卒論のことを考えます。留年までしてそれをやろうという考えは、もう起きませんでした。留年という選択肢がほとんど消えます。問題は本来の進路選択だ。就職か大学院か。

進路についての考えがぼやける背景には、将来の人間関係、特に女性との関係への懸念があるようでした。研究者の道では「暗い人間」として敬遠され、好きになれる女性との出会いも期待できないのではないか。

さらに考えていると、自分の心の中に漠然とした、しかし確かな恐怖感が起きるのが分かります。新しい環境に身を置くことで、孤立して閉じこもってしまう。留年という考えがまた浮かぶ…。

生きる基盤を失って、今までの自分が小さい頃から独りぼっちでいたように、これからの自分も独りぼっちになってしまう…。この恐れが、何もやりたくない……心理学の研究者になることも就職するこ

ともやりたくない、という無気力さと結びつくようだ。

私はここで問題を追うことをやめます。結論は出ていませんが、気分に変化が起きたのです。混迷感が消えていました。

行動するなら今だ。ホーナイ訳者の教授に電話をする。

小さい頃、運動会の徒歩競走の前に感じたのと同じような緊張感が流れてきます。恐いのだ。意識上は、何か自分が〝失敗してしまう〟というような恐さだ。

電話をかけ、会う約束をします。

ほっとして、〝良かった〟と何度もつぶやきます。気分が上昇してきました。

ホーナイ訳者の教授との出会いを通して、自分が社会的な名声を得る人物へと昇り上がろうとしている。あの子がそれで、僕が手の届かない人になってしまうという不安を訴える‥。

私は今まで慣れたことを続けるかのように、まだ空想の世界で生きようとします。

それも次の夜までのことでした。

現実への帰還

土曜日、私は朝から全く落ち着けない高揚感を感じていました。専門講座の授業で、またあの子に会います。前期のノートを見せる約束をしていました。

自分の将来も、ホーナイの訳者に加えられるというものになる。立派で確固とした進路を持っている自分。著名教授とのつながりを持っていることを知人に話す場面の空想。

専門講座の授業に、あの子は来ませんでした。残念とは感じましたが、思い悩むほどではありません。今までの今日ということもあります。

大学では最も親しい学友に会い、好きな子を遊びにでも誘ったらと勧められます。

今日彼女に電話をかけてみようか。ノートを見せようと思っていたけど来なかったので……という口実で…。

もう単なる空想ではなく、現実にその行動を取る可能性を持つ自分を自覚すると、緊張感が流れてきます。

夜、私は漠然とした恐慌状態の中にいました。高揚感と不安感が入り混じっています。

私は自分の将来の空想を始めていました。ホーナイ訳者に加えられて、やがて精神分析研究者としての生活を送っている自分。自分が本当に精神分析学者になっているかのような感情。自分の業績が人々や社会の注目を浴びる。頭の中はまるで交響曲が鳴り響くような騒がしさです。

何かが間違っていると感じました。

その瞬間です。私の回りをおおっていた何かのベールが破れて消え去り、一瞬にして頭の中から全ての空想が消え、静寂に包まれました。

部屋の風景がぐわんと音を立てるように迫ってきます。

「僕は今ここにいるんだ…」。私は頭の中でつぶやいていました。

そこにあるのはただ、狭く殺風景な下宿の部屋の中で、静寂の中で呆然としているだけの自分でした。

今、あの大学の学生であり、何人かの友人や知人を持っているのが、自分の現実なのだ…。

空想の中にいた時、現実は薄れ、重点は空想の世界に移っていた。僕はそのことに気づいた。現実というものに、より大きな重点を感じた。

僕は今、現実に帰還した。

私の治癒過程を振り返って思い起こされる、最も特異な、「治癒の直接感覚」ともいうべき体験でした。それは開放を得た感動でも、歩む方向を見出した喜びでもなく、まっさらで強烈な「現実感」だったのです。

私はこの体験から、心理障害というものが、明晰な現実理性とは別種の、一種の半夢状態の中で動く

という考えを持っています。後に私はこれを「自己操縦心性」と名づけ、自らの心理学理論の要とすることになります。

漠然とした恐慌感はさらに起き続けていました。

現れてくるのは、あの子に対してさえ、はなっから愛などというものを否定するような自分の姿でした。それは何の葛藤とも、何の不安とも関わりなく、ただそのように存在する自分の姿のようでした。その態度は、むしろあの子が例外といえるほど、私が全ての女性に対して取っていた態度だったのです。

愛を拒絶した孤高。私にとって最も安心できるその姿勢に、今帰ってきたとでも言えるのかも知れません。

夜遅く、心が落ち着いてきます。全てが過去のことになろうとしている気がしました。

自分の中でひとつの時期が終わった。そんな感覚がありました。

私は吸いこまれるように、4月からの自分の日記を読み始めます。びっしりと埋まった大学ノートに3冊。飛ばし飛ばし読みながら、この半年に自分に起きた出来事をたどり直します。

日記を読み終えると、私は横書きの便箋にペンを走らせて最初の表紙の下に挟みます。それはあたかも自分自身に宛てた手紙のようでした。

ここから始まる3冊のノートに、恵藤由佳里への思いの分析の始まりから、一応の終結までが記される。

ここ数日も僕は、彼女への自分の感情は、そして僕が抱いた彼女のイメージは何だったのかという感慨に取られる時があった。だが今はそれも終わろうとしている。

今考えると、僕は、自らの人生の空虚を埋めるものとして、また自分自身への軽蔑を挽回するためのものとして、彼女を欲したのだ。そしてそんな自分自身に激しい軽蔑を抱いていた。

彼女が内心で僕を慕っているという空想は、その自己軽蔑から目をそらすために必要なものだったのだろう。だが最後まで勝っていたのは自己軽蔑の方だった。

だから僕が実際に彼女に近づく可能性は、ほとんどなかったのだ。

未知の自分へ

日曜日。起きた時私は、醒めて沈んだ感情の中にいました。

私の心は落ち着きを過ぎて、自分の中で失われたものへと再び視線を向け始めたようでした。

内面の不安と外界への疎外感。それが変わらない問題として自分の心にある‥。

やはり精神病理的な問題に関わらざるを得ないでいる自分の人生‥。絶望感のようなものが流れます。

今まで空想の中で描いていた、誰とでも親しくなれる自分、人々の間にあって重要な存在として尊敬される自分……そうしたものがもはや非現実的なものとして、自然に捨て去られていくのを感じる。今までのように自ら人々に親しんで行こうとする気持ちに、もはや自分をならせる気にはなれないのを感じる：。

午後、聖書の英語サークルへ。全く心を閉ざし、人に積極的に働きかけようとはしない自分を感じます。

夜、私は自分が全く未知な状態になろうとしているような気がしました。

はじめは漠然とした恐怖感として。やがてそれは消え、新しい感覚へと変化していきます。自分自身だけが今ここにいるのであり、それでいいのだ：。

今、僕の心は自分自身だけによって占められ、それ以外のものはなくなった：。

閉ざされたままの未来

週が明け、私はさらに進路を確定する方向へと歩みます。

それは同時に、私が外面の現実的問題を決着させる一方で、残された心の闇へと降りていく階段の入り口に立つ時となりました。

月曜日、私はホーナイ訳者の教授に会いました。教授の大学近くの居酒屋で話をします。結果は全く失望でした。ホーナイはもうほとんど扱われないとのこと。あとは拍子抜けするような、大学院の様子などの世間話で終わります。失望は、やがて気分がふさいで酒の席の会話を続けることが困難になった自分に対するものでもありました。

自分の将来への、そして自分の人生への閉塞感が強くなります。

結局自分は、一人で暗く生きていくような、全く〝モテない〟生き方しかできない…。結婚などまるでできる気がしない。

大学院に行って修士論文を書き上げたら、僕にはもう何もすべきことはなくなるかも知れない。そしたら自殺すればいい。

実際のところ、よく今までの人生で自殺せずに生きてきたものだ。今まで僕は、生活に満足できたことなど一度もないのだ。

夜、私は初恋の女性のことを考えていました。

彼女が今どんな人になっているのか、この目で見てみたい。会って話をする気はない。ただ一目見れれば、それでいいのだ。

僕は、彼女が一人の他人というよりも、何か僕自身の一部であるような気がする…。

進路の見定めへ

大きな失望を感じた大学院でしたが、それを自分の進路とする意志が定まってきたのは、翌日の火曜日から水曜日にかけてでした。大きな動揺を経てでした。

火曜日。私は今東京のどこかにいるであろう初恋の女性を浮かべながら大学へ向かいます。10年前とあまり変わらない面影の彼女が、就職活動のための紺のスーツを着て自分の家に出入りしている：。実際そうかも知れない。

彼女にも、僕とは違う満ち足りた世界があるのだろう：。失意のような感情が流れるのを感じます。

この日私は大学で短期のアルバイトを見つけ、今度は実際に申し込んでしまいます。販売補助作業とのこと。無理な日程ではないものの、少し奇妙な行動でした。

その直前、私はこの大学で院に進学した場合の履修課目を確認していました。全くやる気になれない内容です。その反動で、社会で積極的に働く自己像を描いたのです。

すぐに先方の担当者に会い話を聞きます。補助の雑用だけでなく、実際の販売員もお願いしたいとのこと。明るい自分で対応していた私はそのまま承諾します。

そして別れたとたんに強い後悔に襲われます。そんな自分への軽蔑と共に。このアルバイトをすることにしたのは間違いだ。明るく振る舞わなければならない拘束感。それに対する怒りを含んだ反抗的な

態度。無表情に固まる自分への軽蔑‥。美しさを失った自分の容貌への絶望感‥。

私は苦しくなっていました。苦しみは、アルバイトに申し込んだことへの後悔をはるかに超え、この人生を生きるための確かな自分の姿が見出せない深い事実に対するものでした。

疲れた‥。生きることに疲れた‥。

死ぬことを考えます。自殺という観念が再び現実味を増してきました。死ぬことによって安らかになれる。それが本当に魅力に感じられる。

涙が溢れてきます。私はしばらく泣き続け、やがて疲労感と、全てを放棄する気分の中で寝床に入ります。12時少し前でした。

しかし全く寝つけません。色々な考えや空想が次から次へと湧き出てきます。

アルバイト……何もできずに孤立する自分‥。大学院……就職……今の僕に社会に出ることなどできない……専門学校でも……。

翌日水曜日の朝5時、私は起き出して机に向かいます。結局一睡もせずに考え続けていました。

今は一応気持ちが落ち着き、こうして日記に向かうことになった。

空想に現れた自己像はどれも、安定に安んじた生活をするために、まるで抜けがらのように自分自身であることを放棄してしまった、おとなしい自分の姿だった‥。

全く月並みな就職、自分には社会的能力がないからだ。それでもなければ改めて専門学校にでもという、全くおとなしい自己像。大学院やマスコミから切りかわってそう考える。

アルバイトの話をした後に僕が感じていたのは、結局、社会で積極的に生きる資質を欠いた自分への自己軽蔑と、絶望感だった。

小さい頃から、人に対して積極的に働きかけるものを持たなかった自分…。中学の頃、僕は既に自分の人生に絶望していたのだ。

だが何と僕は、〝落ち着き〟を美化した自己像を持った。それは実は積極性の欠如でしかなかった。僕は自己軽蔑から逃れるために、次々と自己像を切りかえた。さらにその自己像のどれについても、自分が精神的に豊かになるというおまけも求めたため、ひとつの自己像を選ぶたびに他の自己像を全く無視するようになったのかも知れない。そのために行動不能に陥っていたということだ。アルバイトをする自分という姿も、そのひとつだった…。

韜晦からの脱出

私が自覚した問題は、ホーナイが「韜晦（とうかい）」と呼んだものです。自己軽蔑から逃れるために、次々と自己像を切り替え、やがて自分の本当の姿が分からなくなる人々。

ホーナイはこんな説明をしています。それはまるでおとぎ話に出てくる人物のようだ。追われると魚になって逃げ、つかまりそうになると鹿になり、追いつかれそうになると鳥になって飛び立つ。彼らは

確定した自己像を作り上げることに失敗した人達だ。

彼らの生活には似た混乱が支配的だ。権威者を求め卑屈に手を差し伸べたかと思うと、自分がドアマットのように踏みつけにされたと怒り、自分が傲慢だという呵責に合うと、一転して痛々しいほど腰を低くする。彼らには、何をやってもこれが自分だと感じられるものがない。

彼が進むべき道は、「多面を同時に見る」中庸の目の先にあります。自らの短所を自己卑下に陥ることなく見据え、ひとつの制約条件として受け入れると同時に、自分の長所を傲慢に陥ることなく認識し、それを役立てることです。

そして自分を、長所と短所の差し引き合計の結果として捉えるのではなく、さまざまな側面を持つひとつの本質として、前に進む存在であることを宣言することです。

真の自尊心は、その姿勢によってこそ導かれます。真の自尊心は決して「高い評価」を与えられることによって「獲得」されるものではありません。主体的存在としての自己の可能性に向かって生きていく意志として、自ら選択するものなのです。認知療法のデビッド・バーンズが述べたように、真の自尊心とはそのようにして、「勝ち取らねば」ならないものではなく、「勝ち取る」ことができるものでさえないのです。

私にはその道がまだよく見えていません。しかし私の心は、それ以外に進む道はないことを、もはや分かり始めていました。

私の中に、醒めて沈んだ確信の感覚が生まれます。このアルバイトは辞退しよう。それはなりたい自分になる栄光でも、人生を洞察する喜びでもありませんでした。不完全な自己をありのままに引き受けようとする、悲嘆の色濃い覚悟でした。

迷いの消えた落ち着きが、私の心を包み始めます。

今一応得た精神的安定は、恐らく解決ではないだろう。この平坦な感情の中で、僕はやはり生きることの無意味さを感じ、自殺を考えたりしているのだから。

でも今は、この精神的安定を歓迎したい。これまでのような思い悩みでは、あまりにも苦しすぎる。実際ここしばらく、僕は精神的に穏やかな生活を失っている。アルバイトの辞退を済ませたら、どうにか穏やかな状態が訪れるかも知れない：。

今から思うと、マスコミというのは、高校以来の僕にとって一つの夢だった。自分の知的な能力や考え方の独創性を発揮することの魅力。そしてまた、それが社会に対する働きかけであるという魅力。だがその念願をかなえるためには、今の自分には、マスコミへの就職よりも、心理学の研究者になる方が適切なのかも知れない。

日記に向かっているうちに、時計は午前9時に近くなっていました。

9時少し過ぎを見計らって、私は電話をかけアルバイトを辞退します。

これでいい。アルバイトは卒論を仕上げてからだ。マスコミ系の就職活動も続けるが、今のところは大学院を進路としてやってゆくつもりだ。

安堵感が広がってきます。

私はすぐに眠りへと落ちて行きました。

夢を見ました。穏やかな夢でした。

私は小さな男の子で、部屋には落ち着いて優しい印象のアイドル歌手がいました。「水野みゆきさんは、僕の姉さんなの」「そうよ」「男と女の両親とも同じな?」「そうよ」私の父と母が笑っています。「ひとりで暮らしていたの?」「ううん、私はあの弟達と……」彼女は小さな子供たちを優しく養っている人のようでした。

私は彼女の端正な顔が羨ましく、自分は彼女ほど端正ではないと感じました。そんな彼女を姉に持ったのを友達に自慢しよう‥。

彼女が同じ部屋で寝ます。間には兄がいました。僕は彼女の傍で寝たかったのに‥。

死への憧憬

私の心に、僅かな安定が生まれていました。しかしそれは、沈んだ安定でした。

私の心を取り囲む外面は静かになり、私は内面の深底(しんてい)への階段を歩き始めていました。

翌日木曜日、朝大学に向かう時、外はいい天気でした。私は何となく開放的な気分を感じていました。

統計学の授業に出ます。心理学科の生徒にとっては必須の課目です。私は去年、根気が続かず落としていました。

去年の初め頃この授業で、離れた席であの子と目が合った時のことを思い出します。私が笑みを作ると、あの子も純真そうに笑顔を返していました。その情景が、何か光にあふれた、幸福な世界だったように感じます。

授業を聞きながら、私はあの子がどんなにか素晴らしい女の子だろう、と考えていました。この授業を通ったほど頭もいい。そしてあんなに素直でかわいい。あの子をちやほやする、彼女が所属するサークルの男達の姿が浮かんできます。

彼女が欲しい、と感じました。しかしそれは具体的な形を何も持たない感情でした。

前の方の席には、よく見かける、いつも独りの男子学生が真面目そうに座っています。私は、自分がその男子学生を軽蔑しているのを感じました。同じ軽蔑は、これからの自分にも当てはまるのではないか：。

憂うつな気分になっている自分に気がつきます。空しさに耐えられず、教室を抜け出します。

死への憧れ…。
そこには、明るくて、平和で、暖かい世界が待っている…。
独りで生きて行きたい。自分はただ美しく純粋な存在でありたい…。
しかし学友に会うと、〝人なつこい〟態度を自動的に演じて、人に対する内面の冷淡さをおおい隠すしかない自分を感じます。自分は偽りの人間でしかない…。

生の本能と死の本能

心の深底への階段を歩き始めた私に、2つの衝動が姿を現します。
それは生の本能と死の本能でした。

最後の授業に出る時、私はあの子の面影を求める気持ちを感じていました。
授業の前、ハンサム君と一緒の彼女を見たような気がしました。しかしあの子は授業には来ませんでした。錯覚だったのか…。
彼女との何のつながりも得られないとしたら…。そうしたら生きること自体に意味がない。そんな感情が流れるのを感じます。
一方では、彼女抜きでも楽しく生きて行ける、そんな自己理想像のようなものもある…。
現実は、僕は彼女に特別な人として思われているわけではない…。あの子やハンサム君の純粋さに比

べて、彼女を求めながら身構えて自分の中に閉じこもるしかない自分には、彼女に近づくための資質などない…。

そんなことを考えているうちに、自然と自殺という考えが浮かんできます。

だが同時に、自殺をすることにそれほどの意義はないと感じる部分もある…。

生の本能と死の本能が、私の目の前で、全く均等な重さで浮かんでいました。

ある特定の生き方を貫くために死を選ぶか。それともそんな生き方などできなくてもいいからとにかく生きていくか。2つの感情が、全く中途半端なままにバランスを取っている。自分が完全にジレンマに陥っている。

下宿に帰ってから、私は自殺を思います。それはあらゆるジレンマから来る疲れを一気にふっ切ってしまいたい、というような感情でした。

輝きの人

心の深底への私の歩みは続き、外界の輝きは遠ざかって行きます。

翌日金曜日。応募していた広告会社のひとつに辞退の連絡を入れました。進路の選択肢が絞られてきました。

午後、大学の研究室に行って勉強します。隣接する研究室の一つで行われていたあの子のゼミもこの時間でした。

ゼミが終わる時間が近づくと、心の中にあの子を求める気持ちを感じます。同時に、実際にあの子に会うのが恐いとも感じました。やがて勉強に集中できなくなります。

廊下に出ると、あの子と同じゼミの下級生男子を見ます。心臓が速く打ち始めます。

しかし彼女の姿は見えません。ゼミ室にいるのかも知れない：。だが彼女の声は聞こえない：。

私はあの子を求める気持ちを心の中に感じながら、しばらく立ち尽くします。

少しして研究室を出ます。自分が全く矛盾した感情を抱いている気がしました。

土曜日、授業は休講で、早稲田大学へ行って過去の大学院入試問題を入手します。

私の感情はすさみ始めていました。早大のキャンパスで、自分の美貌によって男女を問わず威圧したい衝動。しかし自分の〝ごつい〟顔を自覚すると、自分には可愛い女の子の相手となるだけの魅力は全くない、という沈んだ気分。

他人であろうと自分であろうと、服装の着こなしに僅かでも欠点を見ると軽蔑を感じてしまう。

見るものの全てが、軽蔑に出会う。世界の全てに、軽蔑がまとわりついている。

あの子ただ一人が、そうした否定的まつわりを持たない唯一の人物として、象徴的な輝きを持っている。そして初恋の女性だ：。

僕は彼女達に対して、軽蔑を抱くことができない。

それ以外の人々に対して、僕はそれを当たり前のことであるかのように、軽視の目を向ける。ほとんどの人々の中に、自己軽蔑を宿した絶望感を見る。そして彼らを、生命の停滞した存在であるかのように軽蔑するのだ。

彼女達にはそれもない。そして光と生命の象徴のように、僕の心に描かれるのだ。

心の深底へ

10月も後半に入っていました。

生活の外面にもはや問題は少なく、問題は内面だけになりました。

日曜日、私は人との交わりをあまり持ちたくない気持ちを、以前よりも自らを受け入れる形で感じました。人を前にしてさえ、そのことを認めていい気がしました。

それでもあの子への思いを否定することはできず、自分が完全に袋小路に行き詰まっているのを感じます。苦しくなってあの子への葛藤から意識を離すと、身をさいなむ空虚感が現れます。それを紛らすための、自分自身で一体何をやっているんだと思うような無茶苦茶な暴飲暴食。今までにはないことでした。

月曜日、研究室には大勢の2年生達がいました。賑やかに演習授業の打ち合わせ勉強をやっています。いかにも打ちとけて楽しそうな様子。

私の中に醒めて冷淡な感情が流れます。よくそうゆう風にいられるものだ。彼らはあのようにしながら、本当の自分自身であることができるのだろうか。

僕はそうはできなかった。僕がそんな態度を装ったとしたら、軋轢を回避するための演技でしかなかった。

私は、その2年生達の親密さが偽りの表面的なものであることを見抜いて、激しく軽蔑する自分を空想します。

それは憎しみを選択することでしかありません。そして憎しみの先に答えはありません。

下宿に帰ってから、僕は自分がどうしようもない状態に陥っていると感じた。具体的に何が苦しいのか分からない。僕はやはり自殺ということを考えていた‥。

私は心の階段を下り、深い底の世界に降り立っていました。

深海のような心の闇に、上の方から薄い光が射し込みます。私はそれを見上げます。

僕にとって愛とは一体何だったのだろう‥。こうして考えようとする僕の心の中に、悲しみがよぎる。

以前のあの子の姿が、僕の中に思い出される‥。僕は、あの頃の彼女に夢を求めたのだ。それは僕に

とって、僕の人生にとって、何よりも大切な何かだったのだ。

僕が自分のそんな気持ちに気づいた時に思い描いた映像が、僕の中にはっきりと浮かび上がる。また写真を始めようと思った時に思い浮かべたのが、その映像だった。

それは新緑の大きな木の下で、枝の木の葉に手を差し伸べながら笑顔を見せる彼女の姿だ。

その映像は、僕のその自分の思いの象徴として、僕の心の中に深く刻みこまれる。

でも僕はもう今の彼女にそれを求めない。その理由は彼女が変わったからではなく、また僕の気持ちがさめたわけでもなく、今の彼女があくまでも〝現実〟の人だということにあるのだ！

〝現実〟の世界はあまりにも自己軽蔑に満ちていて、僕が本当に自分自身であることができない。

自分の足で

心の深底にとどまったまま、私は数日間を過ごしました。

進む先を失った私の心は、立つ力さえ失ったように、心の深底の地べたに身を晒します。

しかし身を横たえて待っても、誰も助けられる者はいません。自分の足で立つしかないのです。

火曜から水曜にかけて帰省。木曜日、最後の授業にあの子はやはり来ませんでした。

金曜日の午後3時頃、下宿の部屋に飽きて大学に行くと、私は大学の門のところで偶然あの子に会い

ます。

誰か男の子と一緒に歩いていた彼女は、私に気づくと少しおじぎをして、そのまま男の子とお喋りを続けながら過ぎて行きます。私は突然の状況に何もできずに立ちつくし、少し遅れて振り返ると、遠ざかって行く彼女の後ろ姿が小さくなります。私に見せた彼女の僅かな仕草は、好意からというよりも、義務感からのものに感じられました。

私は自分の心は平静だと思おうとしました。しかしすぐ渦を巻くように自分への怒りと悲しみが湧き起こってきます。動転した気分の中で、頭に浮かぶものを必死にメモに書きます。

あの子は誰に対しても心を開く女性なのだから……自分に対してもそうなのだから……

彼女を自分に近づけるために手を打たなければならない……願望の否定……自分自身を苦しめているかのような苦しみ……自分への怒り……他人への全般的な怒りっぽさ……

彼女が僕のことを月並みにしか見なくなりはしないという確証が欲しい……彼女に手紙で理解を訴える……彼女が忘れていた自分自身を思い出させたということ……

彼女に出会えて良かったということ……

疲労感の中、下宿へ帰り日記に向かいます。

今は彼女の好意を得ようとするよりも、それを諦めて自分自身にできることをやった方がいいと感じている。

私の心は、自分の足で立つことを求めていました。それ以外に進む道はないことを、私の心は感じ取っていました。

彼女が僕にとってとても魅力のある女性だという考えは、今も変わらない。これからも変わらないだろう。だがそこにはまだ、自己の欠損の穴埋めを彼女に求めるものがある気がする…。

何とか前を向こうとする努力の下で、私の心は打ちひしがれていました。

土曜日の専門講座の授業にも、あの子は来ませんでした。

夜、子供向けアニメを見て、私は泣いていました。すねて意地悪になった男の子が、他の人々の優しさに触れて、「今まで優しくされたことなんてなかった」と涙ぐむ場面です。

同じものが、僕の中にある。他人への軽蔑を向けることで孤立している自分。その軽蔑とは、自己中心性への軽蔑のようなものだと思う…。

きのう見た彼女の姿を思い出す。自己中心的でない彼女だけが、自分のこの悲しみに応えてくれるように思える。この悲しみを彼女に訴える自分が浮かぶ…。

しかし同時に私は、自分のその感情の非現実性を感じました。実際そんなことをしたところで、彼女の方では困惑するだけだろう。

それに、僕は子供ではないのだから…。

赤剥けの私の心は、自分の足で立つことを選んでいました。

魂の萌芽

日曜日。10月の最後の週に入りました。

私の心に一瞬、未知の力の息吹が湧き起こります。

私は漠然と、自分が人に好かれようとして意識的に努力する必要は何もないのだ、という気分を感じました。

聖書の英語サークルでは、特に意識的な努力をしなくても、人に対する自発的な感情が自分の中から湧き出てくるという感覚を感じます。初めての感覚でした。

このような感情の上に人との関係を築くのが本当なのだ、と思えました。自分は独立した一個の人間であり、他人にもたれる必要はないのだ。

私は快い高揚感へと上昇し、あの子に愛を告白する純真な自分を空想します。自分が感情表現豊かな人間になる気がしました。

しかしあの子はもともと僕には大した関心はない：。漠然とした失意の感覚から、行動への可能性を見出せない自分へと戻ります。新しい感覚は視界から消えていました。

私の中に起きた一瞬の息吹は、魂の萌芽だったのだと思います。私の中で新しく生きる、新たな人間の魂がその時用意されたのです。

しかしそれがすぐに私の人格の主座を獲得するのではありません。

完全には果たされていないことがありました。それは私の中で今まで生きていた、一人の人間への別れです。そして私の意識はまだこの今までの人間の中にあります。

その別れを完全に果たす時、私は一度「精神の死」を経るのです。

その時が近づいていました。

人生への実質的な力を何も持たなかった自分。

それにもかかわらず、僕には人並外れた属性が与えられ、僕はそれを復讐的勝利の栄光によって進路を切り開こうとする衝動に利用した。その結果としての葛藤が全く極端な識烈（しきれつ）さをそなえたこと。

つい先日ホーナイで勉強した通りに、自分が様々な困難を克服して、〝精神的に健全な人間〟という誉れある座に昇りつつあるという高揚感は、葛藤に引き裂かれた自己への幻滅と怒りへと変わった。

そして悲観的な気分の中で、死に物狂いで勉強をして自分自身に取り組むことで、どうにか自分を支えていくという人生しか歩めなかった自分の運命を悲しんだ。もし僕が違った場所で生まれていたら……そうしたらこんな生き方の自分ではなかったのに。

悲しみがあふれ、僕は目に涙をにじませた。

私の中で生きていた、一人の人間への別れを告げる時が近づきました。
今だその人間の中にある私の意識は、もはや進む先のない心を見つめていました。

月曜日。

彼女が僕を望んでいると感じるか、それとも望んでいないと感じるか。それが僕の感情に決定的な影響を与えた。

人に背を向ける態度が自分自身として安堵できるものである時、それは必然的に、自分の求める愛が失われることを意味した。

あの子に自分がどう思われているかにかかわらず、彼女と一緒にいるのではなく、一人でいたいという気持ちに自分がなっているのに気づく。彼女と一緒にいるときに自分が感じるであろう拘束感への嫌悪感があった。

火曜日。

いろいろなことを考えているうちに、自分の中にある混乱した葛藤を漠然と感じる。

自分の内部に葛藤する欲動があり、矛盾する目標に到達できぬ自分の無力さを感じる。

そして最後にこの苦しみを彼女に訴えるという空想を持つのは、彼女の関心を惹き、許しを求め、搾取し、制裁を加えるという、最後の手段を選ぼうとする衝動を表しているように思える。それはすべきではないと今は感じる。

自分の足で立って歩く。その選択は確かなものになっていました。

私の中で一瞬、淀んだ感情が消えます。

全てが終わろうとしているという安堵感と、この大学での2年間の歩みへの感動が生まれ始めます。僕は人生への徒労感を感じてもいた：。それが和らいでくると、今度は肯定的な感情が流れ出してくる。僕はこの大学で出会った3年生達に、年賀状を出すのを空想する。あの子へがやはり最も重要だ。僕がこんな気持ちになるのも変な話だなという気がする。

もうすぐ11月だ。大学生活ももう終わるのだな。

この大学での2年間：。僕にとってそれは何と大きなものだったろうか！　僕はこの大学の名が、もし自分が他の人生を歩んでいたら全く持たなかった特別な意味を、そして自分自身のひとつの歴史の象徴を、その響きの中に持っているのを感じる。

ひとつの自己への別れ

私の中で一人の人間の終焉が訪れたのは、翌日の水曜日のことでした。

この日の朝私は夢を見ました。私はその時、その夢の意味が全く分かりませんでした。

中学校の友人達が出ています。何かゲームのような感じで、当時片思いだった女の子と、ちょっと粗野な感じの男の友人が頬を叩き合っています。友人は全く容赦なく、女の子は困惑し怯えています。私は駆け寄って友人を止めようとします。すると回りから「彼女を愛してるんだ」と冷やかしの声が飛びます。そのあと私のところに2人の男が謝りに来ました。そのうちの一人は『大草原の小さな家』のチャールズ・インガルスでした。

もうひとつの夢の中で、私は自慰をしていました。すると兄が強引に私の性器をつまもうとします。私はそれを払いのけます。そんな夢でした。

私は夢の中で、私自身の心の中の規範への別れを果たしていたのだと思います。実際、常にリーダーでいた優等生の兄と、善人の象徴のようなチャールズ・インガルスを重ねてイメージしたことが、私にはありました。そうした、なるべき自分の規範への別れを告げ、ありのままの自分の未知の可能性を開放する。

精神の死へ

夢はすでに自立を示していました。私の意識は、消えていく心の側にいました。

消えようとする心の願いが、か細い光の中に一瞬映し出されます。

彼女の心に、僕にとって彼女が特別な存在であったこと……従って互いの間には特別な関係があること……それを告げようとする空想…。何も求めない静かな人間としての自己像…。

このまま何もせずにいるべきではないか。何か危険なことではないか…。

僕に好意を寄せていたあの子の姿……もう僕の出る授業に出るのはよそうと考えているあの子の姿……

そして、私の今までの心に死が訪れます。

消えていく魂は、大きな悲しみのうねりを溢れさせます。

午後、大学へ行って少し勉強。そのあと髪をカットする。

僕は、あの子も含めて、人々に対する肯定的な行動を諦める気分になっていた。自分の心の中に、肯定的な感情が全くないのを感じた。

人生というものが、無意味に感じられた。

どこかの医者に、自分の身体を何にでも提供するから殺してくれと言うのを空想した。

悲しみが湧き上がる。

最近母から、妹が生まれた頃小さい自分が不満をもらしていたという話を聞いたのを思い出す。やは

り僕にとって求めようとする愛は全て自分の手から奪い去られていくものだったのか！と感じた。
悲しみに嗚咽した。
自分とは全く違って、こんな内向的な悩みなど何も持たないであろうあの子の生活を、僕は思い浮かべた。
僕は苦しかった。
彼女の生活に何の参加もすることができない自分だけがあった。

光を失いつつある自分の心を、私は慰めようともします。それは光を取り戻すものではありませんでした。

強度の神経症の分析には平均して3年かかるという。僕はその半分を経過したことになる。
まだそれだけの途上にいるのだから、あの子に対して自分自身としての行動を見出せずに終わったとしてもしかたないのではないか。
そう考えることは僕を少し楽にする。その上で彼女に感謝を示すぐらいのことは、自分として行って良いのではないか：。

そして光が消えます。
私の心が、精神の死へと向かいます。

深い悲しみは再び溢れてくる。もはや何もない。
外的な事柄への絶望ではない。問題は全て僕の内面的なものなのだ。
僕は再び自殺を考えていた。
そこには、葛藤に満ち、無意味な生からの逃避や、自分の死によって人々からの特別な関心を向けられることへの願望などがあった。
今の自分に、自己の人生に肯定的なものを感じることは、あまりできない。死ぬことが今の中途半端な生活に区切りをつけるために適したことだと感じる気持ちがある。

私の中で再び、全ての迷いが消えます。死を選んだ落ち着きが私を包み始めます。
死をどう実行するかという考えはありませんでした。しかしこれが、自己の真実に導かれてたどり着いた答えだという感覚が、深く私を捉えていました。

さっきもそうだったが、よく今まで自殺をせずに生きて来たものだ、と感じることがよくある。
それだけ、僕の生は激しく耐え難い葛藤に満ち、そして本当の自分自身というのは、あまりにも小さく無力な存在だったのだ。
生きることはひとつの重荷だ。そして僕は死に憧れ、死ぬことを考える。
そのためには様々な準備を成さなければならない。自殺の決行は延ばされ、その間に新しい精神状態

が生じる。こうしているうちに自分はあるいは強くなっていくのかも知れない。
いずれにせよ、意識的に自分の感情を決めることはできない。これから自分がどうなるかはわからないのだ。今日感じたことにしても、何の解決もないのだから。

2度目の偶然

翌日木曜日。朝起きた時、私は深い沼の底のように重く静かな空気の中にいました。それは全ての命が絶えた、精神の死の世界でした。その空気は微動だにせず、身じろぎすら重く感じます。

私の中で、生きる心が消えていました。人生が終わった。心はむしろ静かでした。目が醒め、生きてゆく気がないのを感じます。時間をかけて起き出し、ぼんやりと色々なことを考えたり、本に少し目を通したりします。死にたい、という気持ちが心の中をおおい尽くしていました。今僕の目の前の問題は、これ以上生きていくことに意味を感じるか否かだ。僕はそれを感じない。自分にとって生きていることそのものが、人の関心を獲得したり、〃人生に勝利する〃という復讐的な栄光へのあがきだった。

そして今や、現実の自分の生は、そのようにイメージしたものではなく、空虚で暗いものであることが、自分自身に明らかになってしまったのだ。

死人になったような気分の中で、下宿の部屋にこもったまま過ごします。今日はもうそのまま一日過ごそうとも感じました。

午後3時頃になって、少し動きたいという感覚を感じ、大学に行きます。

図書館で勉強した後、この日の最後の授業に出ます。席に着くと、教師が来るまで勉強の続きに没頭することに決めます。あの子のことが気になって集中できないとしてもです。もうあの子には何の行動をする気もありませんでした。

この日、あの子は出席しました。

私がホーナイに取り組んでいると、あの子が私の方に来て声をかけます。土曜の専門講座のノートのことでした。約束したのを忘れていないことを伝えてきた感じでした。

あの子から私に声をかけたことで、彼女の友人や他の知人達がはっとしてこっちを見たように感じました。

私は少し緊張して話している自分を意識しました。声が少し震えています。そんな自分の様子を人々が見て、自分が彼女のことを特別に意識していることを察知したに違いないと感じました。

彼女が自分の席に戻った後、私はあまりよく回らない頭で、このところ彼女と声を交わしたのがどちらも自殺決意後の気持ちにいる時とは、奇妙な偶然だ、と考えていました。

私の心に僅かな浮力が生まれていました。

私は人生を通して、2度だけ死を決意しました。

私があの下級生の子とチームを別れて以来、そしてその後の人生も通して、彼女と会話をしたのは、私が死を決意したその2回の時だけでした。

13
章

自己の受け入れに向かって

（大学４年11月）

開放された自己

自殺を決意した2度目の感情の中、再び偶然のようにあの子と言葉を交わした時、精神の死の底にいた私の心に僅かな浮力が生まれていました。
それから一夜が明け金曜日になります。

私は自分が変わったとは思いませんでした。なぜなら私が私自身の中に見る感情に、特に変化はなかったからです。それは相変わらず、苦しい葛藤と苦い自己軽蔑でした。
しかしこの日の朝の夢には、開放された私自身の姿が映し出されていました。
ひとつの夢の中で、私は強圧的な教師に負けずに自己主張をします。もうひとつの夢の中で、私は自分にはできないと思っていたスキーを自在に滑ることができました。

あの子のことを考えると、やはり葛藤で苦しくなります。
変化は、私の目に見える感情ではなく、見る私自身の足元にありました。私は明らかに、前よりも広く自分の心を見渡すことができました。

僕の心の一方には、自分が彼女に対して、他の人にはない純粋で真実の愛を自分が持っていると思お

うとする気持ちがある。そこには見返りとしての愛を彼女に期待する気持ちがある。それは自己中心的な願望ではないかという考えが、自制を生む。

一方で僕は、自分が彼女と友人であることにプライドを感じてもいた。まさにそのために、彼女への純粋な友情が見えなくなる。それが彼女が自分から離れて行くという感情を生み、彼女の愛を引きつけなければならないという最初の衝動を、強化するのかも知れない。

私に起きた変化はごく僅かなものでした。しかし僅か足裏一個分のようなこの違いが、私の今までの人生とこれからの人生を分けるものになったのです。

私は今、現実世界にしっかりと足をつけて立っていました。今までおぼろげだった自分の進むべき道が、今ははっきりと見えてきます。

さっき僕はまた自殺ということを、あまり感情は伴わないが考えていた…。

それは恐らくこの葛藤を、あるべき自分の姿という現実から乖離した世界で解決しようとする、最後の手段なのだろう。僕の真の自己は、現実的な解決能力をまだ持っていないということだ。

だとすれば今は、自分自身をこのまま受容して、彼女に対して自分がどんな態度を取れるのかをゆっくり考えるしかないのかも知れない。

この日の午後遅く、私はまた大学に行く途中で偶然あの子に会いました。

私はその時、苦い自己軽蔑感に包まれていました。自分の容貌への軽い自己軽蔑。そして人を愛することのできない自分…。自分の全てが軽蔑に値するような気がしました。

あの子に会った時もそのままで、私にできるのは無表情にうなずくことだけです。そのまますれ違って、離れて行きます。

自分への怒りと悲しみ…。自分の取った行動は別に悔やむものではないが、結局行動不能に陥った自分がそこにあったのだ。

彼女を愛しいと思う気持ちと、その気持ちを諦めなければならないという気持ち。そして彼女にまた実際に会うことを恐れる気持ち。ジレンマの中で自殺願望が再び現れます。

相変わらず出口のない感情が目の前に現れる一方で、私が立つ足元の先には道があるようでした。自分の望みは何なのか…。

それは、自分が彼女をいつも思っていたことを、どんな形であれ彼女に伝えることだ。それができるような気がする。

今は、彼女に今度会った時に自分の気持ちを告白しようと思っている。これは果たして実現されるだ

ろうか。

進むべき道

翌日土曜日から大学は一週間の秋季休暇となり、私は数日間の帰省に発ちます。朝、私は何とも落ち着けない気分の中で、自分の中で鮮明化している自己軽蔑感を追っていました。しかしやがてそれをやめてしまいます。自己軽蔑感をどうにか解決しようとして躍起になっていることに、少し徒労感を感じたのです。あまり無理に自己軽蔑感に直面することはない。

それは私の気持ちを非常に楽にしました。

私は自分が、何とかして自己軽蔑を霧散させようと躍起になっていたことに気づきました。実はその態度そのものが、自己軽蔑感を生み出していたのです。

もちろんそれで私の抱えた自己軽蔑感の全てが解決したわけではありません。大きな山の小さな一角が取れたに過ぎないでしょう。しかし私の、私自身への関係は大きく、より良いものへと向きを変えていました。

自分の進むべき道が、さらに明瞭に見えてきます。

あの子とは、それほど大げさな形ではなしに、できれば色々な話をしたい：。

僕の中にはやはり幾種類かの自己像があって、それでも矛盾を感じなかったのは、やはり「韜晦（とうかい）」だったと思う。彼女の恋人となるべき自分、彼女にとって頼りがいのある上級生、あどけなさを残した同級生、という具合だ。自分が軽蔑されるという恐れを感じるたびに、それから逃れて自己像を切り換えていたのだ。

それによって僕は本当の自分というものを、自分に対しても彼女に対しても、見失っていた。

本当の自分とはどれだろうか。

いや、そのどれでもないだろう。僕は自分自身でしかない、ということだ。

救われた魂

帰省して3日目、月曜日の夜。11月に入っていました。

私は次の日に、実家から2時間程度で行ける谷川岳へ写真を撮りに行く予定を立てていました。大学1年の春以来で、3年半ぶりです。

帰省したら谷川岳に行こう。そう思いついたのは、実は数日前の絶望の淵の中でした。写真を撮るためにではなく、死ぬ場所を探すためにです。

今はそのことを考えることもなく、翌朝の早起きにそなえて穏やかな夜を過ごします。

酒を飲みながら、家のこたつに父と妹と座って、たわいのない話をします。和やかな雰囲気…。かつて大学2年の研究会サークルの皆と一緒に酒を飲んだ時と同じ感情を、僕は今味わっているのかも知れない。

こうした色々な時々に、僕はあの子のことを考えている。

外面では、そして現実には、彼女とそれほど大した間柄でいたわけではない。だけど彼女の存在が、自分にとって計り知れないほどの意味を持っているように思える。

そして僕は彼女を愛している、と思う。

愛しているなどと言っても、空想の中での感情でしかなかったかも知れません。

しかし私は、救われたのです。

翌朝私は、早い山の冬を感じさせる冷たい空気の中、谷川岳一の倉沢の大岩壁を望む展望場へと続く、落ち葉におおわれた道を歩いていました。紅葉した樹々の合間から見える山の頂きはうっすらと雪をかぶり、美しいコントラストです。

私は自分が数日前に、絶望の中でこの山に来ることを考えたのを思い起こしていました。その時私は、この谷川岳の雪の中に身を横たえて死ぬことを考えたのです。

しかし今、私は何も考えずに、大自然の美しさに感動しながら、静かな気持ちで歩いていました。

解かれ始めた容貌自意識

帰省から東京へと戻り、残りの休暇を過ごす中、私の中で解消のきざしが見えてきたのは、病的とも言えるほどの極端さを帯びていた自分の容貌への自意識でした。

自分の容貌に美貌を感じ取れるかどうかで、天国と地獄の差と言えるほど、感情が違ってしまう。自分が誰からも注目され、自己表現できるという前進の気分と、自分は何の魅力もない、うさん臭い人間で、自分の気持ちをあの子に示すことなど許されないという気分。これは一体何なのか。

やがて一度容貌への自己軽蔑感におおわれ、短時間のうちに自分の容貌に精彩が戻ってくるのを感じる体験の中で、私は自分が自分の容貌に何を求めていたのかを、はっきりと自覚します。

それは人々から自分に特別の関心が向けられ、かつ、内面の積極性の欠如などの性格上の欠点を帳消しにするような、美貌でした。

僕は自分の性格の弱さを軽蔑していたのだ‥。今まで、自分の性格への自己軽蔑感は漠然としたまま、容貌への自意識の問題に化けていたのです。

この体験の後、容貌への自意識は、内面のより深い自己軽蔑感からは次第に切り離されて行きます。容貌や外見については単純により良いものを望むという、あまりストレスのない感情に変化して行きま

した。やがて趣味のように洋服に凝る、青年時代の私が生まれることになります。

感情の中にあった真実

秋季休暇が終わる頃、私はあの子に対してさらに現実的な関係を育てようとしている自分を感じました。今まで大した関係を持てた訳ではない。まず友人としての延長から関係を育てていけばいい。自分のこの〝現実的な態度〟は、もう崩れるものではないように思えました。

しかしそれは事実ではありませんでした。

秋季休暇が明けた土曜日、あの子はやはり授業に来ませんでした。その時の私の感情は、とても現実的とは言えないものでした。

彼女が来ないことで自分がこんなに落胆するとは思わなかった…。落胆とは、彼女が僕に会いたいとは思っていない、ということだ。

そのあと僕は、自分が孤独だ、と感じた。

僕は、〝僕を見離した彼女〟に、手紙で今までの気持ちを伝えるのを考えたりした。だがそれは恨みがましいことをするだけのような気がして、そんなことはすべきではないという気持ちもあった。この葛藤は嫌なものだった。

それでも私は自分の感情を否定しません。その中に一つの真実があると感じるからです。〝どうして行っちゃったの～〟と僕に言ったあの子：。僕はあの時の彼女に夢を見たのだ。その夢は忘れ去られていた夢であり、忘れ去っていた僕自身でもあった。〝どうして僕を置いて行っちゃったの〟……そう自分を暖かく包む愛を求めていたのは、僕自身だった。

葛藤の直視

その翌日はあの子を得たいという衝動が私を苦しめます。現実的ではないほどの感情を自分が向けた相手：。それを自分のものにしたいという衝動が首をもたげたのです。

あの子が僕を求め、そして僕も彼女を愛する。その愛の世界を実現したものこそが、僕の現実であるはずだった。その衝動はあまりにも強い力で、僕を飲み尽くそうとする。

しかし僕はそのためには、他の男達に勝るほど心を開いた人間として、明るく快活に振る舞わねばならない。それは僕自身ではない。僕はその拘束に苦しみ、自分自身の中へと閉じこもる。

2つの世界が僕を引き裂こうとする。求めれば求めるほど、僕は得ることはできなくなる。

この時私の意識に初めて、葛藤のありのままの姿が映し出されました。

今まで私の自己はあまりに小さく、分裂した人格が引き起こす葛藤はあまりにも大きく、私はその中をさ迷う小さな旅人でしかありませんでした。

しかし今私の自己は、葛藤の全てを包含するまでに成長しました。今まで、分裂した人格の一部が私でした。今や、分裂した人格が、私の一部となったのです。

葛藤のありのままの姿を直視することは、意識の上では極めて苦痛な時間でしかありません。しかしその時、人の心には大きな成長が成されるのです。

その日の夕方、私の中で苦しみは和らいでいます。あの子を今までとは違う見方で見ることのできる自分を感じます。

あの子に対する僕の感情は、やはり全く違うものが次々と現れてくる。だが、そうしているうちに、より現実的な形で彼女に対していくという方向に、僕は少しずつ動いているように思える。

そして現実にはなかった空想上の彼女とのつながりを捨て去って、現在の現実の中で生きていこうとする時、彼女は僕にとってやはり夢であり、僕はやはり彼女に恋をしているのかも知れない。

だがこれまでの感情と、今の感情とは違う。

今までの感情は、空想の恋人関係を現実のものにしようとする衝動が、その全てのあり方を決めていたような気がする。その点で僕は現実の彼女を、自分とは違ったひとりの個人としては見ていなかったのだ。

生きるとは楽しいこと

月曜日。秋季休暇が明けた新しい一週間が始まります。

私の中で、現実を生きるという感覚が強くなりました。ありのままの自分の足で歩もうとする内面の力が、大きく湧き立ちます。

上昇した気分は、新たな領域に突入しました。私の人生で初めて、「今日僕は生きることが楽しいことなのだという感覚を感じた」という言葉が日記に現れます。

自分が新たな、明るくて楽しい世界に向かっているという感覚。色々なことへの意欲が湧いてきます。

心理学者としての仕事。たとえば何十年か後に自分が最終的に取り組みたいのは、「人生とは何か」というテーマだ。全く予想もしない変遷を経てそれが実現されるとは、この時の私には知る由もありません。

それに、ディスコで踊りたい。

もはや、一日の大半を心理学の勉強をすることで自分を支えていた、堅い研究徒としての以前の私からは、あまりにも似つかわしくない言葉でした。

テニスやスキーなどの流行スポーツの世界に憧れ、やがてその中に入り、洋服にも凝る、一見すると時代の先端の青年のような外見の後の私の芽が、この時芽生えていたのを知ります。

現在の私につながる新しい人間は、事実、2度目の偶然の中であの下級生の子と会話を交わした翌日、スキーを自在に滑る夢と共に始動を開始していたのだと感じます。

不実の兆候

しかしこの前進の気分の中で、今までとは異質な問題が私の中に起こり始めていました。

あの子への愛情とは相容れない、否、あの子への愛情に敵対しようとさえする心の動きの台頭でした。

あの子への感情、否、あの子の存在そのものが、一瞬私の視界から消えます。

そして私は、語学授業で見かける美少女への接近衝動に取られるのです。

同じ教室の語学授業を一つ前の時間に受けている女子生徒でした。かつて、あの子の優しさはむしろ重荷だと考えながら、閉ざされた情事の空想を描いた相手です。白く美しい肌が印象的な美少女でした。

他の女子生徒と一緒に微笑みを浮かべながら教室を出る美少女を見た時、私の中に屈折した孤独感のようなものが流れます。

複雑な感情の中にいる自分を自覚します。自分もあの授業を取れば良かった…。何とかして彼女と関係を持ちたい。手紙を出すことを空想します。彼女ほど美しい人は今までに見たことがない。彼女がどんな人なのか、知りたい。名前や学部……たぶん文学部だろう。学科、そしてどんな生き方や考え方の人なのか。

この時の私はまだ、あれほどの重みを持っていたあの子の存在が自分の心の中から消えたことに、何の疑念も抱きません。

しかし実はこれが、私が内面で愛の魅惑と不実に向き合いながら長い歩みを続けることになる、その後の前半生の最初の兆候だったように感じます。

心の中の敵

語学授業の美少女への衝動はそれ以上発展することはなく、私の感情は他人への漠然とした敵対感に向かっていました。

仲の良さそうな2年生達…。それが上辺だけの偽りの親しさだとは思わないが、彼らの頭の中にはやはり、〝明るい性格〟の基準というものがあるのだ。そして彼ら自身がそれにうまく合わせているのだ…。

その一方で一人で勉強している自分…。特に感情を感じるともなく、私は自分が彼らに軽蔑されるだろうと考えていることに気がつきました。

〝暗い人間〟：。そうなのだ。確かに僕は自分が軽蔑されると感じているのだ。そしてその点において、僕は彼らに対して疎外感と、そしてかすかな敵意を感じていた：。

再びあの子と同じ授業の木曜日が来た時、私は何か身構えるような感覚の中で、自分の中で今まで目をそむけようとしていた衝動の存在を感じます。女の子に〝モテようとする〟衝動：。価値の高い女性と親密になることで、他の男達に勝とうとする衝動。それは僕が軽蔑した男達の姿に見たものだった。

あの子はやはり授業に来ませんでした。感情はあまり揺れ動きません。

ただ、少し体の力が抜けるような感覚の中で考えたのは、もしその衝動への自己軽蔑が今まで自分があの子に近づくことを制止していたのであれば、その制止はもう必要ないのではないか、ということでした。

あの子への思慕が、再び私の中に戻り始めます。

開放された、ありのままの現実を生きようとする内面の力の中でも、私は自分が求める愛に近づくことを阻まれています。

その理由が次第に明らかになっていきます。増大していく内面の力は、愛に近づけるためにではなく、それを阻んだものをまず直視するために、必要だったのかも知れません。

私が愛に近づけない、否、近づこうとしない不実の裏に隠されたものを：。

一週間前に起きたことをまるでそのまま繰り返すように、自分の心の中にある真実の感情を知ることから始まりました。

消えた感情

翌日金曜日。午後2時を過ぎた頃、下宿にいることに飽きた私は、大学の研究室で勉強しようと出かけます。意識の上では単に気分転換のためでしたが、ゼミを終えたあの子に会えるかも知れないという感覚が、意識するともなく漠然と流れていました。

そして研究室まで行ったものの、あの子に会える気配が全くないのを感じると、結局勉強など全くしないまま研究室を後にします。もうここにいてもしかたがない。

そして数日前と全く同じ言葉を心の中でつぶやくのです。彼女に会えないことで、自分がこんなに落胆するとは思わなかった。

まるで自分自身を失ったかのような感情だ。僕はやはり、現実的な関係と考えながら彼女に近づこうとして、彼女が得られない時、現実的とは言えない深い失意を抱くのだ。

〝現実上の関係〟だけで満足できると思ったのは、自分自身への偽りだった。

現実的とは言えないほどの、この感情：。それは今度は私を葛藤に陥らせるのではなく、逆に、大胆

不遜とも言える感情を生み出させていました。

あの子に近づくという考えが、自分の中で強い意志に変化するのを感じます。彼女を思っていたことを手紙で伝えたい。

そうすることで逆に、彼女が僕に嫌悪感を覚えるかも知れない。

そうなってしまったっていい。本当の自分を伝えたいのだ。

土曜日。湧き上がる前進への力が、私のナルシズム衝動を刺激していました。自分が活力に溢れた魅力的な人間のような気分になってきます。

自分の魅力によって、女の子が困惑するという空想。あの子が僕にどんな態度を取ろうとも、あの子に対する自分の「建設的な態度」はもう揺るがない。

それも事実ではありません。それどころではありませんでした。私の心におかしなことが起ころうとしていました。

それは自分の容貌にあまり魅力がないという軽い失意から始まりました。すぐに、自分が自信に欠けた、根の暗い人間なのだという深い落胆へと変化していきます。すると、自分があの子に近づこうとしたことが、何か軽蔑すべきことだった気がしてきました。〝根の暗い人間の悪あがき〟。

何か毒気に当てられ冷や汗の出るような、嫌な気分が私を包み始めます。そして見る間に、あの子へ

の思慕の感情が心の中で消えて行きます。
自分がどこを向いているのか分からなくなるような感覚でした。そしてこの感情の中で、私はまたあの子の顔をよく思い出すことができなくなっていたのです。

少し時間が経つと、あの子の表情が遠い距離を隔てた感覚の中で浮かんできます。
私は自分を〝去る者〟と位置付けて、あの子に告白する空想を描きました。僕は君に大きな影響を受けた。そしてこれから本当の愛が何なのかを探しながら生きていきたい、と‥。

愛とプライド

ここに来て、私の心に残された心の不整合は明白でした。「現実の中で生きていこうとする時、僕はやはり彼女に恋をしているのかも知れない」。その一方で、あの子の存在すら忘れて、他の美少女への衝動に自らを駆り立てた人間。それでも、「どうして行っちゃったの〜」と言ったあの子への思慕の中にあった、真実の感情。
それらは全くつながりのない感情として、私の中にありました。
私の心の一部には明らかに、あの子への「愛の中にいる自分」を良しとはしない感情がありました。それは一つのプライドの感情でした。それは自分の尊大さがもし守られるのであれば、「愛」を認めもします。しかしその時、「愛」は真実の深みを欠き、自己陶酔的な傲慢の姿をちらつかせ始めます。

私の中にはそれに対する、淀んだ自己嫌悪感情の膿がありました。

私はそこから逃げていたのです。私にはそのことが全く分かっていません。今だ統合を阻まれた人格の亀裂を抱え、私にできるのはただ、まるで難解で見慣れぬパズルが生み出したつながりのない感情を追い続けることだけです。そこに一片の真実がある限り。

翌日日曜日、私はアルバイトに出かけ、概して沈んだ感情の中で過ごしました。あの子との関係を考えることでさえ、何か自分には不相応のことに思えました。まるで嘘がばれた罪人のような気分です。それでも夜になると、「現実を生きていく」気持ちが再び強くなってきます。

今までの思いを〝告白〟することでも、逆に彼女との関係を否定することでもない、現実的な関係を実際に築いていく他はないのではないか…。

こうして11月の前半を過ごす中で、つながりのない感情は新たな様相さえ見せながら、私の感情は再び「現実を生きる」という、唯一確かなふりだしへと駒を戻します。もはや以前の自分とは違う私自身とともに。

その時、現実を生きる私の内面の力はさらに増しています。

その一方で、心の隙間から奥底に垣間見える感情は、さらに深く鮮明な輝きを私に見せ、私は自らが来歴の中で自分自身に隠した心の真実へと、近づいて行くのです。

「現実の生」の獲得

月曜日。11月もちょうど後半への折り返しでした。

私は美術雑誌出版社の入社試験を受けます。面接では「堂々と正直でいる」ことへの変なプライドからか、会社を受けるのはこれが初めてで大学院も考えていると述べると、5分も経たないうちに終了。自分で笑えます。バカなことを言ったもんだ。しかしそれ以外のことを言ったら実際嘘になる。面接が終わったあと、他の応募者と談笑します。自分の言った「バカな一言」を話したりしました。そこにいた私にはもはや、自分の心に悩む人間の面影はありませんでした。現実を生きるという感覚だけを感じます。揺れ動く感情がありません。

この日の夜、私はあの子の家に電話をかけました。講義ノートのことなど、幾つか口実を用意しておきました。

彼女のお母さんらしい人が出て、あの子は家庭教師のバイトで不在とのことです。

結局あの子とは話せませんでしたが、私は自分が確実な何かをつかんだと感じました。

それは「現実を生きる」という自らの目標への、一つの実績でした。内面の混乱と恐怖の深淵を前に、全ての行動を阻まれていたこの人間にとって、僅か数か月前までは全く不可能だったであろう行動が、今可能となった。それは大きな前進でした。

現実の彼方の感情

それから私の心は再びあの子への思いで満たされました。

火曜日。心の中に何かの空虚感がある。あの子がここにいて欲しい。

水曜日。あの子に交際を申し込もうという気持ちをはっきりと感じる。彼女の返事がどうであったとしても、僕にとって彼女は一生のうちに何度も訪れない運命の出会いなのだから。彼女との出会いがなかったら今の自分はなかったし、今の自分に命を与えたのは彼女だという気がする。

木曜日。あの子はやはり来ません。彼女の友人達のお喋りに聞き耳を立てると、あの子はもうこの授業には出られないらしいと言う声が聞こえます。彼女の身の上に何か変化があった気配を感じました。あの子との関係が存在しなくなってしまったかのような気分だ。授業も全くつまらない。授業だけではない。全てが意味を失ってしまうかのようだ。

金曜日。心の中に抱え続けているあの子への感情と、あの子との関係を失ったまま過ぎていく現実。2つの世界のギャップが私の心に深く滲んできます。

時間は流れていく。こうしているうちに月日が経ってしまうとしたら、それは空しいことだ。

もはやあまり考えることもない。今はただ、あの子に明日来て欲しいと思う。そして、これからは今

までのようにただ待っていることをやめて、自分から動いていくことだ。

その日の午後、めぐり回る感情は下降へと向かっていました。顔の美醜にこだわり、きれいな女性を見るたびに惹かれ、それでいて自分から近づくことはできない自分：。そんな自分が人への現実的な愛情を欠いた、魅力のない人間のように思えた。あの子が実際に僕とつき合ったら、それが分かってしまって嫌われる気がする。自分に現実的な愛がないのなら、何もしないでいることに甘んじようとする気持ち：。

その夜、私に電話がかかってきます。私はとっさにあの子からではないかと考えました。明日の授業のノートの件か何かで。先日彼女の家に電話をかけたこともあります。心臓の鼓動が高まります。前の大学1年の時の学友の、仏教活動の男でした。電話を終え、少し落胆を感じます。その直後、私の中に何かの不安感が湧き起こってきました。漠然とした恐慌感です。全く意味が分かりません。

恐慌状態が収まらない中、私は9月末の授業の時に見たあの子の姿を思い浮かべていました。私を完全なる絶望へと導いた、ただ愛を示すことを喜ぶあの子の姿。それは全く自己中心性のない愛の姿でした。

私の心の中に、まるで地面の断裂から見る、灼熱に輝くマグマのように、何かの感情が湧き上がってきます。

〝求める愛は自分から失われていく〟…。絶望を受け入れた、孤独で不幸な自分…。闇の中の光のように現れた彼女。

私の中に激情が湧きます。激しい心の中の、嵐の告白。愛している……愛している！

夜遅く、少し落ち着いてきます。

今は、自分の問題を含めた形で彼女に話をすることはできると感じている。今まで自分は彼女を思い続けていた。しかし内心の葛藤のために現実には何もできなかった。今もその全てが解決したわけではないけれども、彼女を思う気持ちは今も同じだし、その気持ちだけは一応知っておいてほしいと。

別々の人間として

翌日土曜日、あの子はやはり授業に来ませんでした。軽い落胆を感じます。

私はあの子が来なかったら電話をかけようと考えていました。しかし結局それもやめます。

そうするのが恐いと自分が感じているのを自覚したのです。無理しなくてもいい。

今まで自分は、「現実的な親しい関係」を彼女との間につくらなければならないという観念に、盲目的に駆り立てられていた…。

私の中で、私の空想と共に生きたあの子の姿が、またひとつ遠ざかっていきます。

この現実世界の中にただ生きる、自分とは別の人間としてのあの子の存在が、遠ざかるイメージの代わりにより身近なものになってきます。

今は、彼女が、自分とは別のひとりの人間なのだということが、今までよりも確実な形で、僕に感じられる。

それは同時に、自分自身というものがひとつの独立したものとして、今までよりもより確実に感じられるということなのだ。

自分の中へ

それから11月の残り10日間ほど、自分の内面に向き合う時間だけが流れていきました。

日曜日。僕が求めたのは〝自分に向けられた純粋な愛〟であって、あの子を一人の個人として愛していたのではないのかも知れない…。

火曜日。前の大学の大学祭へ行く。久しぶりに研究会サークルの人に会う。一部の人と親しく話せたが、他の人達とは距離ができているのを感じた。

「現実的な感情」と、心の奥底に見える感情との鮮明な対比が、再び私を揺るがします。

あの子に対して自分はただの一人の友人に過ぎないと考えることもできる。しかしその一方で、ずっと前に何かを求めるような小さな声で「しまのさん……さよなら」と言った彼女の姿を思い出すと、僕

の心の中に何かが湧き起こってくる！　僕とは別の人間でしかない現実の彼女と、まるで夢の中に現れたようなその時の彼女とが僕に引き起こす感情のギャップは何だ！

彼女は少しためらっただけなのかも知れない：。そう思いついて、僕は一瞬感情を見失う。だがやはり僕にはあの時の彼女の姿が、愛しいのだ。それは僕を求めて、僕のために悩むことなのかも知れない。そして今の現実の彼女に、それがない、のだ。

水曜日。新聞広告の中に見つけた、少し潤んだ眼差しで、少しだけ微笑んだ表情で、じっとこっちを見つめている女の子の写真：。それを切り取って、何度も眺めている。今の僕から見て理想の美しさかも知れない。そしてそんな女の子と見つめ合う同じように美しい自分というのが、僕の理想像なのかも知れない：。

初恋の少女もそんな美しさを持っていた：。

木曜日。初恋の女性の夢を見る。話をしようとしたが、話せないままに終わってしまった。

大学の交響楽団に所属する学友から、演奏会のチケットを2枚もらう。来週の火曜日だ。あの子を誘おうか。整理して書くのが難しいほど色々なことを考える。

金曜日。あの子のゼミの終わる時間。研究室に行けば彼女に会うかも知れないと感じた時、ちょっとした内面的恐慌を感じる。彼女に会うのが恐いという感覚があった。

土曜日。番組制作会社の入社試験に行く。作文は白紙で出した。何も書くことがなかったからだ。これで就職活動が全て終わる。自分のこれからの目標は、心理学者になるということに純粋に絞られた。この目標に不満はない。自分が、自分の幸福につながる目標を持っているという感覚が、僕に内面的な強さを与えているようだ。

演奏会はやはり一人で行く方が良いのではないかと考えている。

月曜日。相変わらずあの子のことについていろいろと考えている。特に強く自分を駆り立てる感情はない。漠然と様々な考えが移り変わってゆく。

火曜日。11月の最後の日。自分の容貌へのナルシスティックな気分。

夕方から一人で演奏会に行く。チャイコフスキーの第5番がとても良かった。

僕の心は自分の内側へ沈んで行く方向にあった。自分が独りであることを甘受し、自己の独立を保とうとする。そんな感情だったのだろう。

それでも、髪の長かった頃のあの子の姿を思い出して愛しさを感じ、一体それは何なのだと僕を困惑させた。

3通目の手紙

あの子への3通目の、出すことのなかった手紙を書き始めたのは、一人で演奏会を聞きに行った前の日のことでした。

翌日朝、それに関連した夢を見ました。机の上に置いておいた手紙の下書きをあの子が読みます。あの子はその内容について特に言いませんでした。

手紙の下書きを書き終わったのは3日後で、12月に入っていました。およそこんな内容でした。

僕はこの大学での2年間を経て、大きく変わりました。実は僕を変えたのは、恵藤さんとの出会いだったのです。初めて会った頃、僕は人間としてどうしようもない状態に陥っていました。僕は〝愛〟についてどうしようもないほどの葛藤と絶望感を抱いていて、そこから逃れようとしていたように思えます。

恵藤さんは、僕が真剣に好きになった、生まれてから二度目の女性なのです。この1年間、僕が心の中でいつも君のことを考えていたと言ったら、君はどう感じるでしょうか。今から思うと、恵藤さんとの出会いが、僕の人生を救ったように思えます。

自分のことだけ勝手に書いて、よく分からないと感じるかも知れませんが、ただ黙って沈黙を守っているのは間違いだと思ったのです。

〝愛〟ということが、僕にとって最も大きな問題のようです。

夏休み終わり頃、あの子の現実感が戻った中で書いた1通目の手紙。「君との関係をこのままで終わ

らせたくなかった」。そして完全なる絶望へと向かう中で救いを求めるように書いた、「僕のことを単に〝よそよそしくなった〟とだけ感じているとすれば辛いことです」という2通目の手紙。

それに比べた時、この3通目の手紙になって初めて、今の私から見ても、自分の現実をそのまま伝える言葉になったように感じます。

ただ一つ、「ただ沈黙を守っているのは間違いだと思った」。その言葉だけが、この時の私がまだ現実をそのまま見ることのできていないことだったのかも知れません。

打ち砕かれたプライド

あの子に伝える言葉を書き上げたことで、私の中であの子に近づく意志が再び確かめられる時が訪れました。

あの子への意志が私自身の中で試される。それが最後の時となりました。

手紙の下書きを書き終えた翌日の金曜日。

私は手紙を実際に出すことに躊躇を感じました。それは「告白する勇気」などの問題では全くなく、それを行動に移した時、自分自身の中で何かが覆されてしまう。そんな不安感があったのです。

僕の中にはまだ、あの子との関係を築くことへの漠然とした恐怖感がある‥。

この日の昼、私は仕上がった卒論の製本を頼みに、大学の近所のコピー屋に出かけました。帰り道を歩きながら、ふと、大学に来るあの子に会うかも知れないと考えます。親しそうに話しかける自分を頭に描きました。

彼女に会うかも知れない。

その実感が強まった瞬間、私は緊張した不安感に襲われました。つい今しがた描いた親しそうな自分の姿は、この不安感と全く相容れないものでした。描いた姿はあの子を前にしてこの不安感を隠そうとする、仮面のように思えました。

私の中にまた、漠然とした恐慌感が流れ始めました。大きな危険が迫っている感覚です。恐慌感の中で空想に浮かんでくるのは、最近ハンサム君が美人のフィアンセを連れて大学に来た場面でした。2人は学友達の前で仲睦まじく、それが学友との仲間づき合いとも全く違和感を感じさせませんでした。

私は自分があの子を恋人として彼らの前にいる場面を空想しました。それは強い違和感を感じさせる姿でした。

自分にとげとげしい非難と軽蔑が向けられる感覚がありました。実際そんな間柄じゃないだろう。何かうさんくさい感情をあの子に抱いている。

しびれるような感覚と共に、私の中であの子に近づこうとする気持ちが消えていきます。

そして再び、私の中に鮮明な映像の記憶が流れます。

あの子に自分を伝えようという気持ちは、押さえられつつあった。
感情は殺されて見えなくなっていた。
自分が彼女に惹かれたことが、実は彼女を愛していたのではなく、自己中心的にあの子を欲しただけだという自己嫌悪があった。
僕の心の中に、9月末の授業の時のあの子の姿が浮かぶ。ただ親しみだけのために、愛を差し出すあの子の姿：。まるで幼な児のような純真さで、楽しそうに：。

そこには、私が来歴を通して心の中に閉ざした全てがありました。
求めながら否定し、そして自ら否定したことさえ忘れ去り、現実にはそんなものはないと自分に言い訳をするようになった、純粋な愛。
思春期の中で、自分には無縁だと背を向けた、優しく華やかに楽しみ合っていた人々：。
何の曇りもない素直さで微笑む、少女の笑顔の輝き：。
そうして自分が追い求めたものに自ら背を向け、自己の想念の世界に閉じこもり始めたとき、人は人生と現実を見下すような気難しい哲学を身にまとい始めます。
本当の愛とは何かを考えているのです。本当の愛はそんな簡単なものではないはずです。本当の愛は見返りを求めないものです。本当の愛は寛容です。信じることです。耐えることです。奪うことではなく与えることです。エトセトラ。エトセトラ。

違います。真の愛は自らを語りません。語ろうとした瞬間、それは愛ではなくなります。愛はいわば命と命が奏でる、生命のハーモニーです。ハーモニーを構成する音を分解して、どこに愛があるのかと探しても、そこに愛はありません。愛は自らを知ることはありません。知ろうとした時、それは見えなくなります。知ろうとするのをやめた時、自然に湧き出ます。愛は、生きることです。愛は努力して作り出すものではなく、難しいものでさえないのです。

人生で追い求めるものに自ら背を向けた時、人は自分自身を見失い、愛を見失います。自分自身の敵となりながら、敵の姿は見えず、世界と人生が敵であるかのように感じます。そして自ら見下した人生の空虚と、枯渇した自分の心を埋めるための「愛」を、彼がその高潔な哲学の中で糾弾した強欲さで、まさに彼自身が欲するようになるのです。

本当の愛なんてない。自分は真実を知っている。真実の愛に一番近いのはこの自分だ。

僕の中には、自分があの子に対して他の人にはない純粋で真実の愛を自分が持っていると思おうとする気持ちがある…。愛が僕にとって最も大きな問題のようです。

自分の心を透かした先に見えてくるのは、想念だけの愛を押し付ける不実な傲慢と、相手を操縦し、振り向かせ、利用し、枯渇した自分の心を満たそうと相手の情動を吸い取る、搾取もしくは寄生とも言うべき、人間の一つのおぞましい存在様式でした。

私はそれを来歴の中で憎んできました。そして今まさに、私は自分が憎んだものの正体を、自分自身の中に感じ始めていたのです。

逃げるような身構えの中で愛を語る不実。

その裏には、自分自身への秘められた糾弾がありました。それが暴かれたとき、私は無力に崩れ落ち、全てを失い、自らによって偽者の烙印を押された無様な姿を晒すのです。

しかしあの子の姿は、それを超えるものでした。自らを弾劾し全てを失った私を前にしても、その姿は何も変わるものではなかったのです。

心は全てを見切っていました。私にはほとんど何も見えていません。

ただ大きな感情が私を打ちます。それは大きな光に打たれた痛みであり、感動であり、悲しみでした。

僕にはあの時の彼女の姿が、何か天使のように思えた。ただ親しみのために愛を示すことを喜ぶ：。その時の彼女の心は一体何なのか！　そんな存在が僕の友人として実際にいたのだ。そしてその愛が僕にも向けられたのだ！

それは、僕にとって何と大きなことだったろう。僕は一方で他人の好意を求めながら、心の底では他人に対して否定的な態度を根深く持っていた。

僕は自分をごまかしていたのだ。そんな僕を、彼女の存在が打ちひしいだ。

彼女は僕の光だ。
彼女が僕に今の命を与えたのだ。

僕はそう考えることで心が一杯になった。
悲しかった。

心の独立へ

翌日土曜日。私は沈んだ気分の中で自分の内面に向き合っていました。

前の晩遅く、落ち着きを取り戻した私の心を包んだのは、感動の余韻ではなく、醒めた感情でした。あの子の優しさが僕の中で遠ざかっていた。自分がもはやそれを求めないのを感じた。そんな自分に僕は少し困惑した。

その時自分が独立を求めているのだとは感じなかった。ただ彼女の愛を求める気持ちがなくなっているのを感じた。奇妙なほどに。今日あの子には会いたくないとさえ感じた。あの子の親しみも自分には無関係なことのように思えた。

今まで彼女の愛を求めた時、そこにはやはり自分自身への拘束があったのかも知れない…。そして彼女の愛を求める気持ちは、自己の欠損を補うものだったのか…。

再び別の感情に向かった私には、自分の心の底にあるものを見ることができません。
いや、最後までそれは見ることができるものではなかったのかも知れません。それでも今、はっきりと、私は自分の中で何かが終わったのを感じるのです。何かがあった。それはもうなくなった。
そして、今、新しい自分がある。

今日は時間に余裕があり、授業に出る。
大学で僕は、少しすさんだ感情の中にいる自分を感じた。女の子をもののように見て、見下そうとする気分が少しあった。
そんな感情からも離れると、それこそ僕は無感情になって、自己の内面に沈潜する。
あの子は友人であり、僕に好意を返すこともあるだろう。だがそれを考えてもどうしようという気持ちはない。今はただ偽りの感情を放棄する時に、僕はあるのかも知れない…。
自分が新しい感情を持つようになっているのを感じる。
今まであの子への感情は、彼女の好意を自分に向けるという目的のために生み出されていたような気がする。その時、自分が彼女に対して本当には何をしたいと望んでいたのか。それとはおよそ無関係に、感情は強制的に流れたのだ。

父が40代を終える頃に言った、印象的な言葉がある。

「10代というのは1年1年がとても長く感じるけれども、20代になるとその半分の長さしかない。30代になるとそのまた半分になって、40代になるともっと短い。50代はどうなるかまだ知らないけれど」

自分の今までの22年間の人生を振り返るとき、僕は、これは一体何ということだろう！　という深い感慨に取られる。

ひとりの人間の心が、こんな複雑な変遷を歩むこともあり得るのだ。

14章

新たな人生へ

（大学4年残り）

初めて訪れた平安

あの子が結婚するという話を聞いたのは、それから一週間後の土曜日のことでした。

私の心は静かな変化を続けていました。

週が明け、あの子のことで考える時間が少なくなるのを感じました。内面の力が新たに増大し、さらに生き生きとした感情を感じる日も訪れます。

新しいアルバイトを始めました。私自身の変化に合わせるように、それまでの粗雑な作業場から、都心のきれいで雰囲気のいいオフィスになりました。

久しぶりにあの子への愛しさを感じたのは金曜日でした。アルバイト先で「純真そうに」振る舞う自分を意識した日です。僕はあの子の純真さを手本に感じているのかも知れない…。いずれにせよ、せっぱつまった感情はもうない。

土曜日。授業の後3年生の学友達と学食に寄ると、あの子が結婚するらしいとハンサム君が伝えます。

私はその瞬間、心の中に起きた大きな感情を気取られないよう、ごく普通に驚いた顔を作ります。目頭が熱くなるのを感じながら、目に涙は浮かんでいないことを確かめつつお喋りを続けます。

別れてから、日記に向かいます。

今日は僕にとって大きな一日だ。

専門講座は休講だった。その後聞いたのは、あの子が結婚するということだった。

僕は今そのことを、落ち着いた気持ちで受け止めている。聞いた時は、これで自分の〝2度目の恋〟が終わったのだ！　と感じたが。そしてこれから新しい人生が始まるのだとも感じた。

だが今考えるのだが、僕の何が変わるわけでもないのかも知れない。もともとあの子への僕の感情には、「現実的な目標」が欠けていたのだから‥。

僕にとってあの子との関係はこれからも、真の愛を見出すために僕を導くものなのだ。これからも僕は、彼女に対して何かを感じ、何かを求め、そして今までと同じように、それを考えながら生きていくだろう。

翌日の日曜日。私はあの子とのこれからの関係について、あれこれと空想していました。

少し気分が昂ぶっていました。

結婚式で彼女にプレゼントを渡して、〝幸せになってね〟と言う‥。いや、結婚式に出るほどの間柄ではない‥。演習チームのメンバーで彼女にお祝いのプレゼントをすることを提案してみようか。それから、年賀状には、〝忘れていた自分自身を思い出させてくれた〟、〝とても感謝している〟との言葉を

書く…。

そうした空想の中で、僕は自分を、深い感情と深い人間関係に生きる人間として描いている…。それが今だに、僕が心の底で抱き続け、また束縛されている、「理想化された自己像」なのだろう。そして僕の私生活は、様々な友人達とのつき合いを持ちながら、自分自身の人間としての成長と、本当の自分自身としての生き方を求めて、自分自身とつき合っていく生活が、これからも続くだろう。恋はひとまず当分の間おあずけだ。そう意識的に自制をしようという気持ちも少しある。僕の中には、女性を恋愛対象として見る硬直した傾向があったのだ。それが僕の現実的な異性関係を妨げる限り、そうした自制心も必要なのだろう。

この日私は多くの時間を日記の前で過ごしました。

私の中で、これからのあの子との関係の空想が次第に遠ざかっていきます。

これからの自分の人生への思いは、やがて静かに、自分に今起きていることへの思いへと変化していきます。

きのうの夜はあまりよく眠れなかった…。あの子が結婚するのだという思いが何度も溢れ、僕は軽い苦しみを感じ、何度も寝返りを打ったりしていた。

その時、僕の心の中で、何かが確実に変化していた。

あの子との関係が僕にとって最も大きなことだった、そしてそれをめぐって自分自身の中で心の旅を

して来た、長かった一つの時期が、今終わろうとしている。
少なくとも、彼女の気持ちを自分に向けることへの誘惑がもはやなくなった点で、僕は本来の自分自身に、今立ち帰ろうとしている気がする。
その意味で、彼女が他ならぬこの時期に結婚することは、僕にとって、僕のために、大きな象徴的な意味を持っているように感じるのだ。

2週間前の自分だったら、このことに耐えられなかっただろう。そして十分耐えられる状態になったであろう今、彼女の結婚を知らされたのは、以前にはそれなしには生きていけなかった感情的な支えが、まるで僕のために僕から離れて行くかのような形で、ひとり立ちへの託宣を与えたかのような気がするのだ。
僕にとってこれが2度目の恋だったと言っていいだろう。
だがそれは全てが現実の中にあったのではなく、僕は夢を見ていたのだとも言えるような気がする。
それは、夢と現実が混ざり合った世界での、心の旅路だったのだ。
そしてその旅路を終えようとした自分を迎えたのが、彼女の結婚というできごとだった。
僕はそれを祝福しよう。

夜、私は静かに自分の心だけに向き合っていました。夕方からの自分の心の流れを日記に綴ります。
やがて不思議な感覚が私を捉えます。

夕方、買物のために街に出る。僕の心に流れてきたのは、寂しさを含んだ感慨だった。彼女の結婚が、今までの何よりも確実な形で、彼女をこれからは自分の感情的な支えとして求めて行くことはできないのだということを告げているのを感じた。

僕はそれでもこれから生きていくだろう。でもまだ少しの間は、時に彼女を思い出して寂しくなることがあるような気がした。

ふと、自分がまるで小説を書いているかのような錯覚に陥る…。

その時僕は、今この時の感情から離れて、今までの自分に起こった全てのことを見渡し直しているのだろう。

そうなのだ。それが何と劇的なものだったか！

彼女との出会いにしても、その後に自分がたどった変化にしても、彼女の結婚にしても、今の自分がここに存在するために、何かあまりにもうまくお膳立てされた出来事が用意されていたかのような気がするのだ。

確かにそうでした。今でも私は、大学3年にこの大学に編入学してからの自分の歩みを振り返った時、時に不思議な感覚に取られます。

今思い返すと、それはまるで記憶の中に残る、別の人間の物語…。でも紛れもなく、その人間が今の

自分になった。その道のりの何が欠けても、今の自分はなかった。それを思う時、私はそこに何か人間の意志を超えた大きな力が働いていたかのような感覚さえ、時に覚えるのです。私自身はその観念をあまり使いませんが、人はそれを神と言うのかも知れません。

私の心の旅は、ここで終わったのではありませんでした。この後さらに20年の年月を経て、私の心の旅は本当の終わりを遂げ、全ての心の謎が解かれます。

それでも、大学4年4月、あの下級生の子と再び同じ教室に会えた日からのこの8か月間が、私の心の旅の中でも、あまりにも特別な期間となりました。

この心の旅路が、確かに、自らの心の迷路と断崖の中であえいでいた一人の人間を救ったのです。

この特別な心の旅の期間が終わりを告げたのは、翌日の朝でした。

朝、目覚めた私の心に、あの子の姿が浮かんでいました。

それは、何もかも失った私を暖かく迎え、微笑んでいる彼女の姿でした。そしてそんな彼女が自分から次第に遠ざかっていくのを感じます。私の目に涙が溢れ、一時のあいだ泣きます。

やがて私は涙を拭き、前を向きます。

僕は今、その彼女のイメージが現実的でもあったことを、感じるのだ。彼女は実際に、全てを失った自分に、何の混じりけもない純粋な暖かい愛情で微笑んでくれると信じることのできた、僕にとって恐らくは生まれて初めての人だった。

そのことを思うと、胸は熱くなり、僕の目に再び涙が溢れる…。

私の心に今、人生で初めて平安が訪れました。

新しい自分で

少しの間、私は自分の問題が全て解決したのではないかと考えました。それは事実ではありませんでした。「こうなれた自分」とは違う現実を見るごとに、私の気分は醒め、やがて今だに厭世観のような感情を抱いている自分を知ります。気分が高揚する日と下降する日の振幅は穏やかなものの、波は終わりませんでした。

そして相変わらず自分が、矛盾した感情と、現実を生きる意志と、深い心の世界の狭間で、本当の自分自身と、自分の人生の生き方を模索し続ける存在であることを知るのです。

アルバイト先で孤立感と拘束感にさいなまれる時間も来ました。空虚感を飲食でまぎらす日も来ます。まるで1年前の自分に戻ったかのようです。

それでも自分自身の変化についての私の確信は変わりませんでした。

僕は今、自分が独りで生きるのを望んでいることを自覚し、あの子と出会う以前のように、ひとりだけでいる自分に戻ったのを感じる。

だが、確かに僕はその頃の自分とは違うのだ。僕の傍らからは今、フランソワーズ・アルディが流れ、そして僕の容貌も変わり…。

そして同じように食べることで空虚感から逃れようとすることはあっても、今の僕は自分自身から逃れようとはしていない。あらゆる意味において、今ここにいる自分が自分自身でしかないのだ。

波乱の中の旅立ち

私の目標は大学院の合格、そして将来心理学者になることに絞られました。受験の勉強とアルバイト、そして自分の心に映るさまざまな思いを見つめる時間の中で、月日が過ぎていきます。

年末に出したあの子への年賀状の返信には、結婚式でのあの子の写真の年賀状が来ていました。表の通信欄には、演習授業の頃私が手助けしたことへのお礼などが、細かい字で埋めつくされていました。

正月を過ごした帰省先では、兄の友人から思いがけず、初恋の少女の友人の美少女の近況を聞きます。今東京にいて、大学は浪人して目指していたらしい。男にもてている。私は初恋の少女の名前を出しましたが、知らないとのことでした。

僕の〝知らない間に〟、あの日々はつながっていた…。僕は今、あの小学校の日々に自分を包んでいたのと同じ雰囲気を、あの淡い風景の記憶とともに思い出すことができる…。

心理学者になるという将来の目標は、実は波乱を残していました。

大学の心理学に対する、戦闘的ともいえる批判の感情。その裏にある、自分が入ろうとする世界で排斥されるという無力感。さらにその底には、今だに解決していない、これからの人生を生きることへの不安と絶望が残されていました。

実際、私の心には多くの問題が残されていました。巨大な崩壊を経てもなお残る、病んだ心の残骸。そして何よりも、それを抱えながらこの人生と社会を生きるための知恵を、私はまだ何も持っていません。それを教えてくれる心理学はなく、自らそれを新しい心理学として作ることが、この後の私の宿命になるのです。

3月に入り、今の大学の大学院試験が始まりました。専門問題の枝葉末節さに苛立ちを覚えながら筆記試験を受けます。一般問題はほぼ完璧の出来。

翌日は口頭試問。私は明らかに招かれざる若き異端者でした。

「上着を脱いで……」「脱ぎますか?」

「脱ぎますかじゃなくて、常識だろう」

私の側も、反抗者の気骨が自分で意識しないまま染みついています。

面接は試問というよりも、さながら学問論争になります。

「結局君は何がやりたいの?」「心理学の理論的統一です」

「それを一体どのような方法でやるのか」脳生理学から社会心理までの、全ての知識を得ることです。

現在の心理学は断片的な研究ばかりだが、現に人間はそれらの統一体なのだから、統一そのものを考察

しなければならない。

若い教授達は私の考えに多少納得しているようでした。主任面接官の表情が厳しくなります。それは哲学でやるべきだ。

心理学は総合科学として位置づけるべきだと思います。

面接官は審判を下すように言います。心理学は独立科学だ。その立場を考慮しない君の研究姿勢には問題がある。

極度の疲労感と、公正な評価を受けていないという怒りの中で帰ります。確実に悪い手応えでした。

この大学院は受からない可能性が高い：。早稲田の方も、結局大した関心も持たれずに落とされるのではないか：。教授達の研究方法への追従を拒否した自分は、結局どこの心理学科でも排斥される：。行き場がない：。身につまされる感覚が私を包みます。

自分の将来像の切り替えを再び試みますが、もう選択肢はあまり残されていません。過ぎ去っていたかに見えた人生への絶望感が、再び騒ぎ始めます。

大学院が駄目だったら……実家に帰って父が店を開く手伝いでも……だが人づき合いが苦手な自分……自分が本当にやりたいのではないことをしなければならない人生……どうしても安堵できる生活の基盤を得ることのできない自分……。

いつの間にか自殺の空想を描いている自分に気づきます。悲しみが込み上げ、私は声を殺して泣きました。久しぶりの涙でした。

少しして落ち着きます。今の僕はいつまでも無力感にひたっている存在ではない。ただ深い感慨が私を包みます。自分の人生とは何なのだろう…。

今までそれは常に、人に対して示されるものとして僕の中で描かれていた。そうなのだ。〝他人の世界〟で自分が何者かになる。人生そのものがその要求によって方向付けられていたのだ。

翌日、心理学者という目標そのものが色褪せているのを感じました。

今思い返すと、僕の中には、自分こそが心理学の変革者になるのだという感覚があった。そうしなければ心理学は駄目になる。それ以外の生き方は考えられないとさえ思った。

だが、今までとは全く違った生き方をすることも可能なのだ。心理学に捉われなくても大したことはない。心理学がどうなろうと、人々はそれなりに自分の人間観を持ち、世界は動いていくのだ…。

その次の日に早大院試験1次の筆記。まあまあの出来。

今の大学側の合格者発表もその日にあり、やはり不合格でした。早大で受かるのが望ましいと考えてはいても、夢がほぼ破られたと感じます。

自分の人生が大きな変換点に来ている…。

心理学者になるという夢は、恐らく思春期の頃から、いや、それよりもずっと前の子供の頃から、自分の進むべき道はそれ以外にはないと感じたことではなかっただろうか。

今までの自分の人生…。それは一つのハンディキャップだった。それが僕に心理学者という道を選ば

せていた。これが僕の能力の問題だったら、僕は何度でも受け直すだろう。だが今の心理学の状況が、僕にやる気を失わせる…。

早大院1次試験の発表まで1週間あり、一度帰省しました。

心理学者になろうという意志は、ほとんど失われていました。

社会からはぐれてしまった人間としての自分の姿が浮かんでいました。結局自分には生きるに値するものは与えられない…。初恋の少女の姿、そして自分がその頃から抱いたさまざまな夢がイメージとなって心の中に現れ、それが遠くへ離れて失われていくのを感じます。

死という穏やかな世界への憧れがあった…。

現実世界の中で生きてゆくことは、まるで生まれたばかりの人間が、何の楽しみも幸福も与えられずに、ただお前はこの世の中にこれこれという風に生きて行かねばならないのだと不本意な圧力をかけられている。そんな感じのことだった…。

それでも帰省から戻り、進路について全ての可能性を吟味していると、心理学でやっていく可能性の感覚が少しずつ戻ってきます。多少の妥協も必要と考えました。空想的理論の主張に走るのは控えた方がいい。

そして早大院一次に合格。

可能性が開けてくるのを感じます。帰りに古本屋で買った早稲田の心理学教科書は幅広い体系で、自分の考えに近いのを感じました。今の大学とは大きな違いでした。

2日後に2次試験の面接。

その時主任面接官になった教授の、包容力を感じさせる暖かい表情を、私は今でもはっきりと憶えています。後に私がそのゼミに入ることになる、日本心理学会の発展に大きな足跡を残した心理学者でした。

教授は私の卒論について、賛否両論があったが独自性を評価すると告げました。だが修士論文からはもう理論だけでは認められない、と釘をさします。

私はそれを承知していると答えます。しかし内心では、やはり不本意な研究手法を強いられるであろう大学院生活への失望を感じていました。

恐らく受かった。喜びは確かにあったものの、長い目での将来の展望が見えないという、沈んだ気分の方が次第に広がっていました。この合格は妥協の結果だ…。無駄な2年間になるかも知れない。いっそ専門大学でグラフィックデザインの勉強でもと思い浮かべたりします。

いつしか私は再び人生の絶望感へと沈んでいました。他人に対する敵愾心や不信感を拭い去れない自分は、結局、求める人間関係は与えられない…。

考えてもどうにもなりません。あとはただ発表を待つだけです。

不安を静めることができませんでした。やはり落ちるのではないか…。その不安はまるで、静かな湖面を僅かに揺らす波紋を透かして見える、底なしの闇の葛藤の世界のようでした。仮りそめの合格の感触が少しでも揺らぐと、自分はそこに放り落とされてしまう…。

合格者発表の前の日、私はしばらく休んでいたアルバイトに顔を出しました。その時の私の精神状態は、かなり悪いものでした。

自分ひとりが人間関係に入れない畏縮感。緊張感の中で黙りがちな自分に、怒りと軽蔑が向けられる感覚…。このアルバイトを続けることへの恐怖感と絶望感さえ起きていました。

苦々しく淀んだ感情の中で帰ります。自分には何の人間的魅力もないように思えました。こんな性格の人間に恋人などできるわけもない。

明日を考えても、理屈抜きで自分が落ちる気がします。自分にはいられる場所がない。考えるのは自殺のことばかりだ…。

とても苦しい精神状態でした。やがて私は開き直りを選んでいました。自分が暗い性格であることを、人に対しても認めてしまえばいい。楽しそうに振る舞うことなんてできない。食事会に誘われても断ればいい。

それがせめてもの、私の気持ちを少し楽にするものでした。

新たな人生へ

早大院合格者の発表日。

私は不安でよく眠れませんでした。朝から強い不安で落ち着けません。

不安の中の思考は、次第に、自分の心の中にある全てのものへの不信感や嫌悪のために、自分にはこの世にいられる場所がないという絶望へと姿を変えて行く。落ちたら自殺する。そう考えることしかできなくなる。

先日から読み始めた『青年の生と死の間』を手にとる。自分の問題から少し目を逸らし、自分の絶望の一部を静かに受け入れて、僕の心は少し静まる。

早稲田に向かうバスの中が、最も苦しい時間でした。

まるで胸をしめつけるような不安。自分がどうなってしまうのか分からないような不安。自分自身を不安な状態に陥らせている感覚もあった。

掲示板の前まで来たとき、僕は、まるで自分から不安をむしかえしている自分に、いい加減に覚悟を決めようと言い聞かせた。

結果は……合格だった。

今の大学に向かうため、私は歩き始めました。
一瞬の安堵と喜びはあったでしょう。しかし歩き始めた私の心は、別の感情に包まれていました。
それは何かをしっかりと見据えようとする、意志のような感情だったと思います。
軽い痛みにも似た、決意のような感情でした。

今は、ただ、新たな人生へと歩み出します。

合格を嬉しく思う気持ちは確かにある。
だが、これで自分の人生に本当に重大な問題の変化があったわけではないだろう。そして自分を苦しめた不安の底にある問題が解決したのでもないだろう。

これから自分に何があるのかは分かっている。
きのうのバイト先で感じた感情は、アルバイトを他のものにしても変わらないだろう。そしてそれと同じ問題を、これから進む大学院での生活にも僕は持ち込むだろう。

そして今までと同じように、自分自身の内面と格闘する日々が続くのだ。

15
章

見出された人生

（大学院～現在）

新しい心理学との出会い

その後の私の前半生の歩みを、かいつまんで節目だけ話そうと思います。これもいつかまた詳しくお話しできる時が来るでしょう。

大学院ではホーナイ精神分析と心理療法理論の研究を続けました。それを専門とするゼミがあった訳ではありませんが、早稲田の研究室には自由な研究を許す懐(ふところ)の広さがありました。

私の心は相変わらず、かなり不安定でした。大学4年時のように深く大きな谷間に落ち込むのではなかったものの、自殺を決意したかのような感情にも何度か陥ります。

それでも、論理療法や認知療法など新しい心理療法との出会いの中で、私はより積極的に自分の心を健康的な方向へ向けることを学びました。精神分析だけに頼る今までの進め方では、明らかに不足があったのです。

私は自分が目指すものを、「自己への誠実さ」から「楽しみの追求」へと変えました。「自己の評価」をやめること、そして自分の欠点や短所を積極的に受け入れることを学んでいきます。

多くの重要な洞察が、その後に生まれました。修士2年も後半になり、既に就職を進路に定めた時期です。それが私に、社会に出る心の準備を与えてくれたように感じます。

「暖かい信頼関係の中にいる自分」という理想像を抱きながら、そのための実質的な努力という視点が完全に欠落していたこと。理想像通りに振る舞える〝お膳立て〟を求めていたこと。そして努力の欠如の底に、「不誠実で偽りの自分」への激しい嫌悪があったこと。

そうした洞察が、私の内面を大きく変化させました。人から「暗い人間」という視線を向けられるという、耐え難い感覚が消え、他人への嫉妬感情や強制的な恋愛衝動も明らかに減少しました。

望むものを手に入れるためには自分からの積極的な働きかけが必要であること。私の心はその単純な真実を受け入れ、同時に、自分の可能性という感覚が私の心に芽生え始めます。

社会へ

就職を進路とすることについては、私はもう迷いませんでした。研究室に残ることは、微塵も考えられませんでした。

大学や学会の心理学には全く魅力を感じず、経済的収入にも見通しはない。そして何よりも、私が心理学を学んだのは自分の心と人生に取り組むためでした。研究室に残った時、研究しようとしたもの自体がなくなってしまう。それはむしろ社会人としての生活にあると感じました。

就職活動は、不安というよりもあからさまな恐怖を前に始まりました。私には自分が、〝社会的能力のまるでない駄目な人間〟という感覚があったのです。

それでも実際に会社を回るうちに、自分がむしろ社会で高く評価される方であることを知ります。それは私の心に大きな安定感と、社会で生きていくことへの積極的な感情を与えてくれました。

そして中堅のシステム開発会社への内定が決定。

修士論文は、大学時代からの自分自身の自己分析過程を取り上げたもので、現在の私の著作活動の前身とも言えるものになりました。そのあまりに異色の修士論文を認めて下さった指導教授には、今でも深い感謝を感じています。

私は論文の最後で、自分の心の状態について判断を下します。「全ての問題の最終的解決へとは、明らかに至っていない」。そして「能動的な自己の発見こそが最大の課題である」。

能動的な自己の発見とは、自己の受容を通して新しい自己を発見する過程である。当論文の結論は、それが一定の自己の基準で自らを規定することではなく、〝生〟を楽しむ人間の本性を開放することで生み出されるということである。

それが、私が心理学の道を歩んで得た結論でもありました。与えられたこの〝生〟を楽しむことに、これからの人生を注ぐ。

それは同時に、それを私に教えた心理学研究生活との別れでもありました。

忘却の日々

社会人生活の始まりは、何か生活環境全てがリセットされたような感覚もあり、私は自分の内面に向き合うよりも、外面での生活に専念したように思います。内面のぎこちなさに蓋をして、大勢の同期入社組や職場の人々に何とか打ちとけながら過ごしました。

新しい生活が軌道に乗る頃、私は日記を書くのをやめます。自分の心を内省して日記を書くという行為自体に、何となく嫌悪感、否、自己軽蔑感を感じたのです。もう二度と日記を書かないつもりにさえなりました。

拭い去ることのできない内面の孤独感を日記に綴ったのは、一年後のことでした。人々へのちぐはぐな感情と疎外感の中にいる自分。やはり自分は人とは違うのだ…。そんな内面を抱え、友人関係はあまり満足できるものではなく、女性に対してはさらに複雑に屈折した感情の中で近づくこともあまりできず、心の中では孤独感が続きました。

一方仕事はコンピューターのシステム開発関係で、自分の資質や性にも合い、大きなやりがいを感じられるものでした。まさに自分の天職だと感じ、かなりの成果も発揮できたと思います。3年半後には、より大きな仕事を目指して大手のコンピューター企業に移ります。

孤独がちな内面を抱えながらも、趣味のテニスやスキーにも熱中し、外見からはまさに今時の若いビジネスマンだったと思います。それなりに充実した生活を送ることができました。

そうした仕事と私生活の中に、自分の人生の全てがあるのだと感じ始めていました。かつて心理学を勉強した自分も、もはや遠い昔の他人のようでした。心理学の本もほとんど全て古本屋に売り払い、心理学の世界に戻ることはあり得ないと考えていました。

再会

私の中で次第に開放感が大きくなり、自分が孤独を抜け出せるような気がして、勇気を出して女性とのデートに奔走したのが、20代終わり頃から30代半ば頃までです。

沢山のパーティに参加し、沢山の女性と会話や食事の機会を持ちました。軟派な行動に走ったこともあります。長く続くものをなかなか見出せないまま、自分にとっての恋愛のあり方を模索しました。

初恋の女性に再会したのは、そんな時期の31歳の時でした。

その数か月前、大阪での短い転勤生活をしていた私は、出張で訪れた小学校以来の友人から、数年前にその女性が結婚していたという話を聞きます。結婚式では有名女性ヴォーカリストが彼女のために歌ったらしい。かつて中学校で離れ離れになる時、アイドルの世界を思わせる中学校に行ったと感じた私の予感は、多少とも的中していたその後があったようでした。彼を含む数人でお祝いのメッセージと写真を送ったそうです。友人は私に彼女の東京の実家の住所を教えてくれました。

私はこの時、目に涙がにじんだのを憶えています。あの日々が、本当につながった…。

その後転勤を終え千葉に住むようになった私は、翌年の年賀状を彼女に送りました。それを受け取った彼女から後日電話があり、渋谷で20年振りの再会を祝して乾杯をしたのです。

この女性の存在は後に、闇の中で遠く光る小さな恒星のように、私の心の旅を最後まで導くことになります。

恋愛不能症候群

30代後半になった頃、女性とのデートへの気力が薄れてきました。結局何も続くものはなかったのです。自分の中の何かがそれを阻んでいました。

相手の女性に熱を上げる感情が湧けば湧くほど、自分の心の底にある何かの欠損が見えてくるかのようでした。やがて相手の女性を前にして消失していく愛の感情という症候に、私は繰り返し悩まされます。その時私の心は、他愛ない話題を楽しもうとする努力とは裏腹に、自分の中で失われたものを探し求めようとするかのように、自分自身の中へと沈んで行きました。そして目の前の女性は、誰よりも遠い他人であるかのように、現実感を失ってしまいました。

確信を持てる愛の感情を見出せないまま、私の中には、初恋の頃の自分が生き続けていました。何も初恋の女性を目当てにしていた訳ではありません。それでもあの小学校の日々に、ただその子に近づけることだけを願っていた自分を、超えることができない。それを超える自分を見出せない限り、

本当に女性を愛することはできない。そんな観念が時に浮かんでいました。
やがてそれが全く未知の感情として見出される、この心の旅の終わりを知らないまま…。

神秘の道

私は再び、外面行動よりは自分の内面に向き合う生活をするようになりました。デートへの関心が薄れた分、仕事や趣味のスキー活動に身が入る結果になったのでしょう。単調ながらも充実した生活の中で、時間が静かに流れるようになりました。

この頃私は、神秘的な夢をよく見るようになりました。それは亡くなった子供のためのお葬式であったり、亡くなった友人の魂を探しに行く、神秘的な旅の夢であったりしました。

ある夢の中で、私は小さな子供で、お葬式のお屋敷に出会いました。真っ暗な闇の中で、ぼんぼりのように淡く光る照明がともされ、お屋敷の壁全体が淡く白い光を放っています。優しく見守るような淡い光の道を、小さな子供の私は歩いて行きます。

私はそれが何か、私が前半生で歩んだ「病んだ心から健康な心への道」の、象徴の映像であったように感じます。

企業生活に学ぶ

仕事にも精の入った30代後半は、私が企業の仕組みやその中での行動法、そして対人関係の調整法について多くを学んだ時期になりました。

中でも私が最も大きな影響を受けたのは、「ハーバード流交渉術」です。交渉とは、意見を戦わせる場ではなく、共通目標共通利益を見出す場である。その考え方に基づき、建設的な関係を維持しながら最大限に有利な結果を導く、最強の行動学とも言えるものです。

私はそこから、怒りを全く使わずにものごとに対処することを学びました。人に対して怒りを全く使わない行動法は、自分自身に対しても怒りを全く使わない思考法へと、私の意識を変えていきます。

それはやがて、私の人生観の変化にも貢献したようでした。

人生は与えられた条件によって決まるのではない。与えられた場からいかに前進するかにあるのだ。ならば、人生に定められた「あるべき姿」などないということになる。自分は唯一無二の存在だということだ。

そうして企業生活の中で学んだことは、この社会を生きる人生において、企業で生きるかどうかに関わりなく、幅広く糧になるものだと感じます。そのため私は自らの心理学の中に、行動学を重要な一領域として取り入れています。

私はまた、それらが学校教育で教えているものではないことに驚きの念を感じています。中高生を対象にして、そのような知恵を教える機会を、私もぜひ持っていきたいと感じています。

悲しみの理由を探して

40代が近づく頃、仕事や趣味のスキー活動もいよいよ順調になっていました。生活は安定した充実感の中にありました。

社会人としての自分に自信が持てるようになってきた背景もあるのでしょう。全ての問題が自分の内面の問題として見ることができるようになっていました。この頃の自己分析が、精神分析としては最も質の高いものになったと思います。

私に残り続けた問題とは、自分には、自分を人と結びつけるための感情や意欲や性格が根本的に欠損している、自分は人と親密になったり愛情を交わしたりすることのできない、精神的不具者なのだという感情でした。

ある時は、その抑うつ感情の中で、やってきた地下鉄にとび込んでしまえ、といった感情が今だに自分の中にあるのを自覚したりもしました。「生きる」ことへの確信については、もはや微塵の影響も与えるものではありませんでしたが。

その感情が、他のさまざまな悪感情が取り払われても決して消え去ることのない、原点とも言える感情だったのです。この感情にどんな出口があるのか分からず、また出口があるとも思えませんでした。

それでも、隠されていた感情に出会うような自己分析の中で、私の心のもつれは少しずつ確実に解きほぐされて行きます。日々の感情の基調も、少しずつ上の方へ、静かに上昇していきました。

やがて私は、幼少期の頃に自分が感じていた感情を、初めて思い出すことができるようになりました。

それはほんの些細な寂しさと不満から始まっていたようでした。そこには私の心を壊そうとしたものは何もなく、全てが人間の心の中に元からある、些細な歯車の狂いの積み重ねだったように思えました。

休み明けの悲しみ

私の中で最後まで残ったのは、漠然とした、生理的な悲しみの感情でした。

1週間の中で仕事にも熱が入り、休日をのんびりと過ごした後、休み明けに会社の席に座った時、私は自分でも全く理由の分からない、目頭が熱くなるような生理的な悲しみの感覚を感じました。その時は全てが無意味なようで、仕事の手も進まず、人に明るく接する気にもなれない。私はその感覚を「休み明けの悲しみ」と呼び、何度も向き合うようになりました。

やがて私は、悲しみの理由が分かるような気がしました。それは自分や他人の具体的な何かに向けられたものではありませんでした。それは自分の来歴の全てに向けられたものでした。

幼少期からの運命とも言える、人との心を満たすつながりを得ることなく生きた自分…。心がそれを悲しんでいる…。その悲しみはもはや私の日々の生活の中で、仕事や人への感情を阻害することもなく、外面では人に明るく接することができる。でも悲しみがそこにある。そんな状態になっていました。

しかしそうして感情の清明感が増し、感情の基調がマイナスからプラスの方へと上昇していくならば、完全な停滞に陥らない限り、ゼロ線を通過する時が訪れるはずです。

実際それが私に訪れます。私はその時それがゼロ線の通過などとは考えようもありませんでしたが、とても印象深い体験になりました。

ゼロ線の通過

2002年の春、私は41歳になっていました。時折感じる悲しみ感の理由が、私にはすぐ分かるようになっていました。

その4月中旬、シーズンのスキー活動も終わった後、私は気分転換に一人で白馬八方にスキーに行きました。会社のスキー仲間といつも行く宿で、今までは性格的な気後れから一人で行くことはあまり考えられませんでしたが、今はそんな気後れもなく、お世話になりますと連絡をして、金曜の夜、中央高速を走っていました。

何となく、今までの自分の感情の全てが、心の中で整理されたような感覚がありました。自分は独りでした。他には何もありませんでした。それが自分の感情の基調だったのです。外見ではどうであれ、独りで生きてきた自分。他には何もない。それが自分なのだ…。しかし同時に私を、不思議な、大きな感慨の感覚がつかんでいました。それは「自分には何もない」という感覚の強烈さでした。「悲しむ理由」……それさえも、もうないのだ…。

自分が来歴の中で感じ続けていた悲しみ。自分はそれさえも失おうとしている。それは軽い感動にも似た、不思議な感覚でした。悲しみを失う悲しみ。自分はどこに向かうのか…。ただ自分は「まっさら」になって行く…。

この不思議な感覚を体験した夜のことを、私は一生忘れないと思います。

未知の感情の出現

この体験の後、私の心の変化が、私自身にかなり明瞭になってきました。

感情の基調がマイナスからゼロ線を通過し、プラスになったことは、外界全体の色がブルー系から薄いピンク色に変わったように、少し別世界のような感覚がありました。

5月のGW、実家に帰って兄夫婦の小さな子供を前にした時、私は自分の変化をはっきりと感じまし

た。

それまで私は小さな子供が苦手でした。何か自分の心の欠損を敏感に察知して、怖がるのではないかという不安から、子供に接することを避けていたのです。

しかしその時その不安はなく、子供は可愛いもの、自分が育て得るもの、という感覚があるのを感じ、ようやく甥と仲良くなり始めました。

私は、何の前提もなく自然に人を好きになれる感情が自分の中にあるのを、生まれて初めて感じました。

〝恐れることなく人を愛せる！〟。私は再び女性相手探しに熱中し始めました。愛する女性を見つけ、家族を作りたい。

ただしその高揚感は、多分に今までの反動のナルシズムが生み出した部分もありました。実際の行動の中で、高揚感が幻滅に変わり、感情の混乱と動揺の中で自己分析を繰り返し、やがて自分の内面に確信を伴う安定が生まれてきます。

見出された人生

それから間もなく、私の人生に大きな変化が訪れました。

人と積極的に交際しようという気分になり、まるで今までを挽回しようとするかのように、旧友相手

に飲み会を持ちかけたりしていた時のことでした。

自分が今までとは別人のように、行動的になれているのを感じていました。

一方で私は既に40代に入り、青春の若さは通りすぎた後です。今行動力が生まれたとしても、私の悲しみの来歴は塗り替えられるものではなかったのです。

ある日私はその事実をまざまざと実感し、悲嘆に包まれました。20年前に今の自分があったら、どんなに素晴らしい人生を歩めていただろう！　回りの友人たちは、そうして青春時代を過ぎて今がある。自分にはそれがない。

この20年間が「失われた20年間」であったという喪失感をまざまざと感じました。青春時代の20年間を失ったまま、時間だけが今にワープして来た人間であるかのように、自分を感じました。自分の住む村に帰ってきた子供が、回りを見回しても誰もいない、何もない、そんな気分に陥っている自分を感じました。心の中で、〝何もないよう〜。誰もいないよう〜〟と泣き崩れる自分のイメージ。〝もう死んでしまいたい〟という自分のイメージ。

私はこの時、浦島太郎の物語を思い出していました。玉手箱を開けたとき、浦島太郎は一気に3百年の時を老化して死んだのです。それは、失われた時への悲しみから逃れるためのことであったように思えました。

自分の人生は一体何だったのか。その懐疑に私はおおわれました。仕事も手につかず、この感情は何なのだろうと、インターネットで、「自分の人生は何だったのか」と入力しました。

すると沢山の人々の自叙伝が出てきました。望まない結婚と不幸な家庭生活の後、ようやく自分の時間を見出した時、自分が何も得ていなかったことに気づいた女性。戦時の貧窮から疎開して、生活を支えるためだけに身を減らす苦労の末にようやく生まれた平和の中で、失われた青春を振り返る老年の男性。そして原爆被害者の悲痛としか言えない人生……。

そこには、容赦ない現実がありました。何億何万という地球上の命と、何億という年月の中で、幸せな一生を送るか、あまりにばかげた損な一生を送るか、そこには何の必然性もないのです。

自分の人生が特別のものだという、幼い頃から抱いていた感覚は、完全に間違っていました。そこにあるのは、ただ、〝ちっぽけな人生〟でした。

〝自分の人生は一体何だったのか〟。その答えは明白でした。それは、〝ちっぽけな人生〟だ！　それが答えでした。

僕は今ようやく人生というものが分かった気がする。やっと今になって！

残された人生を最大限に生きたい。本当にそう思う。

私はこの後、目の前のことに何でも全力を尽くそうという意欲を感じました。

同時に、今までに感じたことのない、大きな自分の可能性という感覚が湧き起こってくるのを感じました。自分はこの人生で何だってできる。以前に上司から話があったものの、気後れから断っていた海外勤務みたいなことだっていい。

この時を境に、私の生活は無気力や空虚とは縁なく、いつも充実した状態でいるようになったと感じます。

心の旅の終わり

私の長い心の旅が終わったのは、それから数週間後のことでした。

私は人に紹介された女性に会うため、正午頃の電車で銀座に向かっていました。かつて自分がこんな時、深淵を覗くような不安感を感じたことを思い出します。今はもうそれはなく、私の心は一点の曇りもない開放感に溢れていました。

この人生を生きていることへの喜びを、心の底から感じます。生きているのがうれしい。

僕の心の旅は、もう終わった…。

12時少し過ぎに駅に着きます。銀座の大通りに出る階段を上がって行きました。

銀座一丁目の地下鉄の駅を出ると、夏のまぶしい光が降り注いできました。ちょうど昨日梅雨が明け、空には雲ひとつない青空が広がっています。

夏の明るい光の中を、私は歩き出しました。

エピローグ

私の心の旅の物語は、そこまでです。でも物語が終わったのではありません。新しい物語が、ここから始まります。それは私の生涯続く物語になるでしょう。

海外勤務だっていいとは考えたものの、私の情熱は再び心理学に向かいました。

一体何が自分の心に起きたのか。ホーナイの本を読み返し、人間の生涯を貫く心理メカニズムの整理に熱中し始めました。それは実際に自分が見た光景をもとにして地図を完成させるような、とても楽しい作業でした。

私の最大の関心事は、何が私を病んだ心の世界から抜け出させたのかでした。かつての私にとって、現在の私は、そうなろうと努力したものではなかったどころか、そうなれると想像したものでさえなかったのです。

これを説明する心理学はありませんでした。いわば、精神分析は病んだ心の世界を描写し、認知療法や論理療法は健康な心の世界を示したと言えるでしょう。残されたのは、その2つの世界を結ぶ道と、その歩き方です。

やがて私は新しい心理学の体系を作り、それに「ハイブリッド心理学」という名をつけ、インターネット・サイトで公開を始めました。２００２年11月のことです。

それから3年が経つ中、サイトを見た方から沢山の感謝の言葉を頂きました。「心が健康で穏やかになった」「家族とも優しく接することができるようになり家族からも話しかけられるようになった」「今までは小さな子供に、こうしなければいけないと怒りの中で押しつけの教育をしていたのをやめました。子供の反応もとても変わりました。今では子供と一緒に心から笑えるようになり幸せを感じています」などなど。

中でも印象的だったのは、私の心理学がまるで自分のことを書いているように感じるという方が多かったことです。そして私のサイトとの出会いを運命的なものと感じるとの言葉も多く頂きました。

病んだ心への対処方法を明瞭化したことで、それからの私自身の変化も加速度的に早くなりました。サイトを通じて出会った方への援助体験の中で、私自身の心が成長し、私は自分の心にさらに安定と包容力を感じるようになりました。会社の仕事や厳しい上司、また偉いお客様を相手にしてのストレスもなくなりました。

やがて私は、自分を会社そのものと対等に感じるようになりました。唯一無二の自分の人生を生きようとするならば、どんな大きい会社であろうと何百何千の選択肢の中の一つに過ぎないのです。

私には書きたいことが山ほどあります。執筆のことで頭が一杯になり、会社の仕事との両立も難しく

なってきました。この活動をライフワークにするために会社を辞めるのも、時間の問題でした。

私の最初の物語の執筆もこうして一段落しました。

ふとキーボードから手を休め、マンションのリビングからの眺望に目をやると、いつも変わることのないビルや家並みの風景を見ることができます。私はこの風景がとても大好きです。

そこには色んな人たちが生きている…。そこに生きる一つ一つの命に、それぞれの人生があることに思いを馳せながら…。

何気ない日常の現実の中で隠されているかのような心の世界…。でも人生はそこにこそあったのだと感じます。

今では私の心は、生きる喜びと楽しさ、そして何よりも子供達への愛情で満たされています。

そしてこの世界の中で唯一無二の存在として生かされる自分に、僅かに不思議な感覚と、少し感謝に似た気持ちと、そして大きな開放感を感じるのです。

再びキーボードに向かって、私は書き続けます。

これから私と同じように、唯一無二の自分の人生を探して歩もうとする人たちのために…。

考察　―病んだ心から健康な心への道の本質

ここでは私が前半生で歩んだ「病んだ心から健康な心への道」について、ごく大まかな概観をしておきたいと思います。

それは一体どんな道だったのか。私にそれを歩ませたものは、何だったのか。

それが同時に、私の考える「心理障害の治癒」の大枠になるでしょう。より詳しい説明は私のサイト（『しまのたかしハイブリッド人生心理学』http://tspsycho.k-server.org/）（2006年7月現在）や、今後出版する私の著作を参考頂きたいと思います。

誰よりも自分自身が感じる「心の問題」

まず、私が抱えた「心の問題」とは一体何だったのでしょうか。

それについて、心の障害の「診断」は資格ある精神科医のみが行うべきであり、素人判断は良くない、私にもそれが当てはまると言われるならば、特に反論をする気はありません。

でもそうだとしても、私の心の問題とは何だったのでしょうか。「神経症」でしょうか。「回避性人格障害」でしょうか。それとも「自己愛性人格障害」でしょうか。精神科医に頼ることなく克服できたということは、「単なる性格の問題」だったのでしょうか。

私は今、そうした「診断」の全体が、あまり意味のないものに思えてしかたがありません。なぜなら、かつての私の心が人に、そして精神科医にどう「診断」されようとされまいと、それが問題だったのは、**私自身が感じる形で、私自身のための、私自身の人生においての**、問題だったからです。

それを何という名前で「診断」されようと、私のこの心の歩みには何の役にも立たなかったでしょう。さらに言うならば、もし私が自分の心の問題を人の「診断」に任せるべきものと考えたならば、その時点で私の心の成長は止まっていたでしょう。

結局私は自分の心を、自分が感じる通りに追い続けることをやめませんでした。これが私の歩んだ道の、**最初の本質**だったと思います。そして実際、追い続けるに値するものがあったのであり、追い続けることによって、私はそれを取り戻すことができたのです。

「人格の障害」と「人間としての成長」

一方私が心に抱えた問題は、単なる「考え方」や「生き方」、「心の持ちよう」を超えた、「障害」であったことも事実だと感じています。そこにはやはり「病んだ心」があったのだと思います。

そしてそれが何の障害だったのかと言えば、**「人格の障害」**だったのだと思います。なぜなら、不安定な感情や自己嫌悪といった表面の問題の下で、根底にあったのは、見失った自分自身であり、内面に

おける自己の分裂と対立だったからです。

私はこれを、**「病気」**とは考えていません。病気とは感染や癌や梗塞など、本来の心身機能とは明らかに異なる原因を持つ症状を言うものと理解しています。

私の心に起きた変化は、最終的にはまるで脳の構造が変化したかのような大きなものでした。しかしそれは最初から最後まで、私が自分の問題を「病気」ではなく、あくまで心の問題として追い続けた結果でした。

私はそのような自分自身の体験を通して心理学を研究した結論として、**人格障害は病気ではなく、心のメカニズム**だと考えています。そして**全ての心理障害が、実は人格の障害**であると。**病気ではないので、その解決は「治療」ではない。人間としての「成長」なのだ。**

それが私の心理学の基本的な考え方です。

「心理障害を治す」のではなく「人生の望みへ向かう」歩み

治療ではなく成長だということが、この歩みの**2つ目の本質**につながります。それは「心理障害を治そうとする」取り組みではなく、**「人生の望みへ向かう」取り組み**だということです。

多くの方が、「心理障害が治らないと人生が始まらない」と考え、薬や心理療法によって障害が治る

のをじっと待っているかも知れません。

しかし、心に染みついた不安や恐怖が「障害」なのではなく、それを理由に前向きに人生を生きられないことが、実は「障害」なのです。心理障害が治ってから人生が始まるのではなく、治っていなくても人生を歩んだ時、心理障害の根本的な克服につながる、「成長」が始まります。

「心理障害を治す」ことだけに意識が向いた時、心理障害は治らないものです。これは多くの心理療法が共通して言っていることです。「治す」ことに目が向いた時、心理障害の克服につながるような「成長」への歩みが止まってしまうからです。

そのため私の心理学では、心理障害の克服を、「自らの人生における望み」に向かう取り組みと位置づけています。障害は、自らの望みを見失わせ、望みに向かって自らの足で歩むことを妨げるものとして、取り組みます。

問題は他人との関係ではなく自分自身の中にある

「自らの望み」に向かうことを妨げるのは、何といっても、人との関係で揺れ動く感情が、私たちの心の中で全てをおおい尽くしてしまうことでしょう。あるいは、親や過去の誰かのせいで自分の人生の望みが断たれたと、憎しみの感情の中にいるかも知れません。

それについて私の心理学では、**「自己の重心」**という考え方を非常に重視しています。

「自己の重心」とは、自分の思考や感情が、自分と他人の間のどこに「重み」を置いて感じ取られるかのことです。自分の思考や感情なのですから、「自己の重心」は自分にあるのが自然で健康な状態です。

これが心理障害の中では、「自己の重心の喪失」が起きてしまっています。例えば、「自分が誰々を怒った」ではなく「誰々が自分を怒らせた」。すると「怒り」という感情は同じですが、さらに、自分の感情が相手に依存するという無力感と、変わるべきは相手だという敵意が付け加わってしまいます。これが広範囲にわたることで、敵意と無力感におおわれてしまうのです。

「自己の重心」の選択

それへの対処として、私の心理学では**「自己の重心の選択」**という姿勢を非常に重視しています。「人のせいで」と考えるのではなく、「自分自身によって」と考えることです。「誰々が自分を怒らせた」ではなく「自分が何々を怒った」。「侮辱された」ではなく、「自分が侮辱として受け取った」。心理障害において「自己の重心の喪失」は思考から感情さらには感性にまで及ぶ広範囲なものですが、まずは思考から変換を試みます。

実際この「自己の重心の選択」によって、思考のみでなく感情や感性の変化が始まるのです。なぜなら「自分から怒った」と考えた時、怒りの感情が起きるか起きないかを決めるものが自分自身の中にあるという視点が開けるからです。そこから、より細かい心理学的な取り組みを進めることができます。自ら変わることができる可能性が、心を凍らせた無力感を解かし始めます。

例えば「自分が侮辱として受け取る」という場合、そうなる心理学的な理由が少なくとも2つあります。

それは、人に言われた欠点短所を自分自身でも当てはまると心の底で思いながら、そのことから目をそむけようとしている場合です。この時初めて、人は他人に言われた言葉によって、「侮辱され傷つけられた」と感じます。

もし相手の言うことが自分に当てはまらないのであれば、言われた事を気にする必要はありません。当てはまるのであれば、人に指摘され突きつけられるものではなく、自分自身の意志で向き合い改善の努力をするものとして、もしくは自己の人間としての限界として受け入れるべきものとして、捉えるべきです。

なぜならそれが「真の強さ」だからです。完璧な人間などいないのですから。

そうして卑下に陥ることなく自分の欠点短所に向き合うことを学んだ時、私たちは、相手の欠点短所を攻撃できることは決して「強さ」ではなく、むしろ自分を豊かにする術を知らない「弱さ」であることを知ります。その時、「侮辱された」という事実そのものがもはや私たちの心から消え去るでしょう。

私は最初から最後まで、**問題は外部にあるのではなく自分自身の内部にある**と考えていました。これが私の歩んだ「健康な心への道」の、**3つ目の本質**と言えるでしょう。

ただこれは自分で考えてそう心がけたのではなく、あまりにも矛盾した感情が最初からあったため、

問題は自分の内部にあると考えざるを得なかったようにも感じます。その結果、宿命とも言える、独力で内面の迷路から抜け出る歩みが始まったわけです。

一方で多くの方が、「病んだ心」が自分の中に生まれてしまったことまでは感じるものの、原因や解決については外に目を向けてしまいがちです。その結果、自分の中にしかない脱出への道が閉ざされ、病んだ心にとどまってしまいます。

そのような違いはなぜ生まれるのか。どうすればより多くの方が、自分自身の中にある抜け道に気づくことができるようになるのか。それを明確にすることが、私の心理学の課題だと思っています。

未知なる自己との出会い

そうして自分自身の中に問題を探求した時、私たちの心の中にはあまりに多くの**未知の自分**が埋もれている。それに出会う歩みである。これが**4つ目の本質**になります。

私がこの小説で描写し、社会に伝えようと最初に考えたのも、自己分析を通してあらわにされていく埋もれていた感情の、予想もつかないほどの多彩さでした。実際私自身が心理学を学んだ中で、これほど大掛かりな仕掛けの中で、人の心が精神分析の過程で変化していくさまを描いたものを、私は他にあまり知りません。

私は自分の心の多くの変化を、精神分析という心理学の一領域に負っています。ただし有名なフロイ

トの理論は全く役に立たず、カレン・ホーナイの理論だけが、私の人生の再建への力となりました。

この、著名な精神医学者や社会学者が半世紀以上もの間熱中した学問領域が、今社会の注目を失っているのは、とても残念なことだと思います。

無理もありません。それは実に難しいものです。机上の勉強だけで理解することは、まず不可能でしょう。私はこの小説で、精神分析が空論ではないことを示すために十分なものを提供できたと考えています。

未知の自分との出会いという時、そこには2つの側面があります。

ひとつの側面は、心の治癒成長とは「こうなりたい自分」になるというよりも、そう考えたことさえ無意味になるような、未知の自分になることだということです。それは「生まれてからこんな良い気分を体験したことはない」と感じるような、開放感に満ちた良好な心の状態です。

自殺願望のある人に、「生きていればいいこともありますよ」と言っても、決して理解してもらうことはできません。これは当然です。なぜなら現に今「生きるのが辛い」心にあるのなら、その心の上でどう考え想像してみても、やはり生きることは辛いこととして心に映るからです。それはまるで、夢の中で起きている状態を一生懸命知ろうとするような話です。

心が治癒成長した時、「なぜ生きるのか」という問いへの答えが出るのではなく、問いそのものが消え去ります。そんなに難しく考えなくても、ただ生きているだけで楽しい。それが人間の本来の姿なのだと思います。

そのような未知の自分へと治癒成長する心の道が、誰の中にもある。あとはそんな事実を受け入れ、それを歩むことを「選択」するかです。

「どうなれるのかをまず知りたい」と考えるかも知れません。そうできないから「未知」なのです。「そんなものはない」と考えればそれで終わりです。「未知」の可能性に向かって歩む意志を持つかどうか。そこにはただ、「選択」だけがあります。

一方そんな「未知」に向かって歩む過程で、私たちは来歴の中で葬り去っていたかのような、置き去りにした感情に再び出会うことになります。その中には、目をそむけたままでいたかった、「知りたくなかった自分」という感情もあるでしょう。これが「未知」のもうひとつの側面です。

心理障害の根本的な克服が一般に難しい理由のひとつが、ここにあります。

心理障害とは、自分自身を見失い、自分自身の敵になってしまう病だと言えるでしょう。その内面を映し出すかのように、他人との関係も破壊的になってしまいます。これは本人にとっても、また回りの人々にとっても、とても苦しい状態です。

しかしその根底には、その人が来歴の中で対処することができないまま目をそむけてきた感情の塊があります。心理障害はそこからの逃避の表れと言えます。

心理障害の根本的な治癒は、対処できず目をそむけた感情に再び対面し、目をそむけることなく克服する方向にこそあります。しかし、まさにそれができないからこそ心理障害になったわけです。心理障害は苦しいものですが、治癒の方向にも別の苦しみが控えていることになります。

人が心の病の中で「死の願望」に取られてしまうのも、そんな八方ふさがりの状況が背景にあるためと言えるでしょう。

科学の目

それでも、未知なる自己の開放の先に、根本的な治癒がある。心にはそれをもたらす**自然治癒力**と**自然成長力**がある。この事実を受け入れたとき、人の心の中に、その道を歩もうとする勇気が生まれ得ると、私は信じています。

これは私たちが人間の長い歴史を通して勝ち取った、**科学の姿勢**に他なりません。**医学の姿勢**とも言えるでしょう。治癒方法のない病に冒された時、私たちは程度の差はあれ絶望を味わうことは避けられません。しかし同様に苦しい病であっても、完全な治癒への方向がある場合は話が別です。

なぜなら、治癒への道を歩む努力に、新しい意味が加わるからです。

それは、同じ問題に悩み、同じ方向に向かって努力する人々との連帯であり、互いに与え合える勇気と知恵であり、一人の成果が皆の糧になる豊かさです。

私たちは決して、一人で闘っているのではありません。これは、私たち人間の心を守るための闘いなのです。

これが**5番目の本質**です。私の中には最初から最後まで、自分の心に悩む自分自身を客観的に見続け

る、科学の目があったと思います。それは科学図鑑を隅から隅まで眺めるのを楽しみにした子供時代が与えてくれたものだったのでしょう。

そして完全なる絶望の中で死を決意したその瞬間でさえ、もはや意識から押しやられた心の片隅で、私の中には、自分が救われることを確信していた、科学の目があったような気がします。

そのような確かな科学の目に立った、新しい心理学が必要だと思います。

今、社会は大きな曲がり角に立っていると思います。明らかに心の問題に関連してです。

異常性を増す少年犯罪、虐待の増加、幼児や少女を狙った性的犯罪、集団自殺、人災とも言える悲惨な事故の発生…。一方で、「団塊の世代」と言われ、今までの日本を支えてきた世代が、社会の第一線から引退しようとしています。

今までの社会を支えていた頭越しの秩序道徳は、もはやこれからの社会を支え得ない。その表れが今、起き始めているように感じます。

それに代わる、新しい「心の指針」が必要だと思います。科学の姿勢と、心の健康に立脚した、新しい心理学です。

私はそれを、**「ハイブリッド人生心理学」**として社会に伝えていきたいと思っています。

頭越しの説教道徳や人生訓としてではなく、中立的な心理学の姿勢で、心の健康と幸福のための技術を示したいと思います。それを選択するかどうかは本人の自由です。

その選択によって、病んだ心を良識によって押さえつけるのではなく、本来その人が持つ健康な心を開放することです。そしてその結果、開放された心が社会とも調和するものであることを、この心理学では見出しています。

私の心理学が、これから一人でも多くの方の人生と幸福に役立てればと願っています。この願いを、最初の私の著書となるこの本の、最後の言葉に代えたいと思います。

著者プロフィール

島野　隆
（しまの　たかし）
ホームページ
http://tspsycho.k-server.org/

1961 年、群馬県にて出生。
1985 年、早稲田大学大学院心理学修士課程修了。
　コンピューターシステム開発企業を経て、大手コンピューター企業に長く勤める。
2002 年、『ハイブリッド人生心理学』の執筆活動を開始。
2005 年、企業を早期退職し、以降執筆活動に専念。
2008 年まで千葉県に、以降は群馬県に在住。

悲しみの彼方への旅
　―わが内なる病んだ心から健康な心への道―

2006. 7.15　出版本初版発行
2013. 7.29　電子書籍版発行
　　7.31 更新：奥付に著者近影を追加

著者　島野　隆（しまの　たかし）
Copyright(C) 2006,2013 Takashi Shimano

Lake
dead